

武道の歴史とその精神

(増補版)

武道論集 I 武道の歴史とその精神 (増補版) 国際武道大学附属 武道・スポーツ科学研究所



『武道論集』 発刊にあたって



研究所長 魚住孝至

国際武道大学附属武道・スポーツ科学研究所編集の『武道論集』を発刊します。

国際武道大学が開学したのは1984年であり、近く創立25周年を迎えます。1986年に開設された日本武道館の武道科学研究センターが武道大学に移譲され、武道・スポーツ科学研究所となったのが1995年で、当研究所も間もなく15周年を迎えることになります。これを機に、武道の研究成果をまとめて発信しようと、『研究所年報』の別冊として、この武道論集を企画しました。研究所では、2000年に“Budo Studies”（英語版）、翌年『武道研究』（日本語版）という小論集を発行しましたが、今回はシリーズで、第1集に「武道の歴史とその精神」を、第2集に「武道の指導法」を、第3集に「武道の比較文化論と国際化の問題」を取り上げる予定です。

武道といっても各種目でその歴史も内実も大きく異なります。それぞれの種目ごとの専門書は数多く刊行されていますが、各種武道を横断的にまとめた論集はほとんどありません。幸い本学には、各武道の専門の教員がいるので、各武道の現状を踏まえた論稿を企画しました。主たる対象を本学の学生としていますが、より広く一般にも武道の啓蒙書となればうれしいことです。

この論集の企画に対して多大の補助をいただいた日本武道館に感謝申し上げます。

2008年3月

大学創立30周年記念の増刷に寄せて

2013年、国際武道大学は創立30周年を迎えました。1つの区切りとなる年にあたって、改めて本学が創立された背景・経緯を振り返り、これまでの長い武道の歴史の中で、本学の存在意義を捉え直して、今後の進むべき道を展望することが必要だと思います。

その意味で、「武道の歴史とその精神」を論じた本集を増刷して、研究所のこれまでの歩みをまとめた「研究概要（1986～2013）」とともに配布することにしました。

本集は、武道の淵源から江戸時代までの伝統を概観した後、近代に再編されて武道が確立したこと、戦後の武道禁止時代から復活し、1960年代からは国際化が本格化して今日に至っている過程を述べ、それらを通じて受け継がれてきた武道の精神を考えようとしたものです。第1章では、日本武道館を中心に現代武道の組織的な普及・充実が図られる中で、1984年に国際武道大学が設立されたことも書いています。第2章以下は、主に展開した時代の順に、剣道・なぎなた・弓道・柔道・空手道の現代までの歴史とその精神を論じるとともに、最後に学生へのメッセージを書いています。ここに書かれたことは、各連盟や本学、研究所としての公式の見解ではなく、あくまで執筆者の研究・指導実践に基づくそれぞれの論ですが、この機会に改めて確認するとともに考えてみてほしいことです。

なお、本書の英語版 “IBU BUDO SERIES Vol.1 The History and Spirit of Budo” (2010)、『武道論集』第2集「中学校保健体育における武道の指導法」(2009)、第3集「グローバル時代の武道」(2012)、“Vol.2 Budo in the Global Era” (2013) も刊行しています。合わせてご参照いただければ、幸いです。

2013年9月



目次

『武道論集』発刊にあたって 研究所長 魚住孝至 i

第1章 武道の歴史とその精神 概説——魚住孝至

はじめに

I. 武道の伝統9

1. 流派武術の成立

2. 近世武術の展開

(1) 初期；流派の確立

(2) 中期；流派武術の展開と停滞

(3) 後期；流派武術の革新

(4) 幕末；武術におけるプレ近代

II. 近代武道の成立17

1. 武道の近代化

(1) 近代剣道・柔道

(2) 大日本武徳会

(3) 学校教育での展開と「武道」

(4) 学校武道の拡大—弓道・薙刀

2. 近代武道の展開

(1) 競技会の隆盛

(2) 相撲・空手道

(3) 戦時下の武道—銃剣道と戦技化

III. 現代武道の展開28

1. 武道の現代化

(1) 武道禁止からの復活

(2) 戦後に展開した武道

—合気道・少林寺拳法・居合道・杖道

2. 現代武道の発展

(1) 東京オリンピック

(2) 日本武道館を中心とする展開

3. 武道の国際化

(1) 武道の国際連盟

(2) 国際武道大学

4. 21世紀の武道—武道の将来

おわりに

第2章 剣道の歴史とその精神——田中 守

はじめに	
I. 剣道の伝統	43
1. 剣術の発生	
(1) 日本刀と剣術の発達	
(2) 流派の成立	
2. 近世の剣術	
(1) 剣術の理論的深化	
(2) 華法剣法としない打ち込み稽古の出現	
(3) 武芸教育の振興（藩校と講武所）	
II. 剣道の展開	51
1. 近代の剣道	
(1) 明治維新と剣道	
(2) 近代剣道の興隆	
(3) 学校教育と剣道	
2. 戦後の剣道	
(1) 禁止と復興	
(2) 現代剣道の発展と課題	
おわりに	
剣道歴史年表	

第3章 なぎなたの歴史とその精神——アレキサンダー・ベネット

はじめに	
I. 薙刀の伝統	75
1. 起源と薙刀の構造	
2. 薙刀と中世の戦	
3. 江戸時代の薙刀	
II. 薙刀の近代化への展開	82
1. 明治時代の薙刀—衰退と復活	
2. 近代教育と「学校薙刀道」	
3. 薙刀同士の稽古法の工夫	
III. 戦後の「新しいなぎなた」	92
IV. なぎなたの特性	95
1. なぎなたの特性	
2. しかけ・応じ	
3. 全日本なぎなたの形	
4. 異種試合とリズムなぎなた	
おわりに	

第4章 弓道の歴史とその精神——松尾牧則

はじめに

I. 弓道の伝統	111
1. 弓術流派について	
2. 日本弓術の射術目的による分類	
(1) 歩射	
(2) 騎射	
(3) 堂射	
II. 弓道の展開	120
1. 近代以降の弓道	
2. 戦後の弓道復活	
3. 現在の弓道	
III. 弓道の技術と精神	133
1. 弓道射法八節	
2. 弓道の理念と精神	
おわりに	

第5章 柔道の歴史とその精神——柏崎克彦

はじめに

I. 柔道の伝統	145
1. 柔術から柔道へ	
2. 講道館柔道の発展	
嘉納治五郎と柔道の略歴年表（年表1）	
II. 柔道の展開	152
1. 学校柔道の展開	
2. 柔道の国際化の要因	
戦後柔道の展開（年表2）	
III. 柔道の理念	162
おわりに	

第6章 空手道の歴史とその精神——マーヤ・ソリドワール 魚住孝至

はじめに	
I. 空手道の伝統	171
1. 空手道のルーツ —琉球王国での「唐手」—	
2. 唐手の三つの系統	
3. 沖縄における唐手の公開普及	
II. 空手道の近代化	176
1. 船越義珍による唐手の日本本土への普及	
2. 他の系統の普及	
3. 近代空手の主な技術的な展開	
4. 唐手から「空手」へ —近代武道としての定着	
III. 現代空手道としての展開（1945年以降）	187
1. 現代空手道に基盤の形成	
2. 現代空手道の展開	
IV. 空手道の特質及びその精神	193
1. 空手道の技法	
2. 空手道競技としての特性	
3. 空手道の精神	
おわりに	
付録	205
1. 武道のあゆみ	
2. 武道憲章	
3. 日本武道協議会	
4. 日本武道学会	
5. 日本古武道協会	
執筆者紹介	214

第 1 章

武道の歴史とその精神 概説

魚住 孝至

は じ め に



「武道」という用語は、江戸時代以前から使われていたが、「武士としての生きる道」、「武士道」といった意味であり、特に武術や武芸を指すものではなかった。今日使われている「武道」という概念は、大正後期（1918～25）に柔道・剣道・弓道の総称として使われ始めたものである。今日、武道に含まれる種目としては、1977年に設立された日本武道協議会を構成する連盟の、柔道・剣道・弓道・相撲・空手道・合気道・少林寺拳法・なぎなた・銃剣道の9種目を指すのが一般的である。それぞれ歴史も内容も異なり、成立や基盤とするものが日本でなかったものも含まれるが、競技性よりも「人格形成」としての目的を強調し、練習ではなく「稽古」、練習場ではなく「道場」と言い、また形の稽古や演武があり、礼法を重視し、段位制を取るなどの共通した特色があるので、日本の武道とされているのである。ここでは各連盟傘下で行われているこの9種目を「武道」と捉えることにする。近代以前の流派武術を伝承しているものは「古武道」と呼ばれている。

日本武道協議会が1987年に制定した『武道憲章』には、「かつて武道は、心技一如の教えに則り、礼を修め、技を磨き、身体を鍛え、心胆を錬る修業道・鍛錬道として洗練され発展してきた」「術から道へと発展した伝統文化である」と規定している。

武道は、大枠で捉えれば、日本において独自に展開した武術文化を基にして、近代になって、西欧的なスポーツに学びながらそれに対抗して、近代的に再編して成立した運動文化と言えるであろう。

伝統性と近代性の両面を持ち、そのいずれを強調するかで、武道のあり様も大きく変化してきた。では、今日の武道がどのように成立し、展開してきたのか、その歴史を、時代背景とともに簡単にたどっておきたい。

I. 武道の伝統

武術の起源は人類の発生とともに古いが、日本の武術は、外からの影響も受けながらも早くから独自のものであったようである。

3世紀の『魏志倭人伝』には、「木弓は下を短く、上を長くし」と記されており、中国・朝鮮とは異なる南方系の長弓であったようである。けれども日本の射法は、矢をつまむ原始的な方式ではなく、右親指の内側に弦をかけて引く、中国・朝鮮に共通する蒙古式である^(注1)。日本の民族と同様、弓においても、南方系と大陸系が混合して日本独特のものとなったようである。また五穀豊穡を願う農耕儀礼としての相撲は弥生時代から見られ、『日本書記』にある野見宿禰のみのすくねと当麻蹶速たいまのけはやの力比べの伝説が相撲の起源と言われている。また銅剣・鉄剣は弥生時代に大陸から伝わり、古墳時代には馬に乗り剣



写真 1. 相撲節会で仕度をする相撲人の絵（『相撲の歴史』[講談社]より）

を身に着けた兵士の埴輪も見られる。飛鳥から奈良時代にかけて、律令体制下の兵士たちにどのような武術の訓練がなされていたのかよくわからないが、平安時代には弓の「ひきめ墓目」や「じゃらい射礼」、せちえ「ずもう節会相撲」(図1参照)などが宮中の神事の儀礼として行われていた(注2)。

日本の武術が独自に展開するのは、10世紀ごろ武士が誕生してからである。武士は、律令体制の軍隊とは別の私的な武装集団をなし、弓馬を操り、武術を専門とする職能者であった。平安中期には反りと鑄を持つ片刃の日本刀が出来ており、独自の剣術技法が展開したはずであるが詳細は不明である。武士は、11世紀後半から中央でも台頭し、12世紀半ばには国家権力を左右する存在となり、末には鎌倉幕府を成立させている。武士は弓馬の術の訓練をしており、鎌倉時代にはかさがけ笠懸やいぬおうもの犬追物などの騎射が盛んであった。小笠原家は、弓馬や礼式の故実を専門に伝承し、14世紀に入って室町時代には伝書も作られて、流派の先駆的な役割を果たしている。

1. 流派武術の成立

今日につながる武道の原型が形成されたのは、15世紀後期から16世紀にかけて生まれた流派武術においてである。戦国時代に入ってから、各地で合戦が相続く中で、武術が専門分化し、弓術、剣術、柔術等においてそれぞれの専門的な技法とその教習法を工夫した天才的な人物が現われ、それぞれの流派を形成した。

15世紀後期、剣術では飯篠長威いいざさちやういさい斎の天真正伝神道流、愛洲移香あいすいこうの陰流かげりゅう、念流を継いだ中条長英の中条流、柔術では堤宝山こくそくの小具足、弓術では日置弾正正次の日置流など、各武術の源流となる流派が現われている。16世紀になると、それらを受け継ぎ、剣術では塚原

ぼくでん ト伝の新当流、^{かみいずみいせのかみひでつな}上泉伊勢守秀綱
の新陰流、伊藤一刀斎の一刀流、
柔術では竹内久盛の^{たけのうちこしのまわ}竹内腰廻り、
弓術では日置流から吉田流、道
雪派、^{せっか}雪荷派など、さまざまな
流派が展開している。



写真 2. 流派の絵目録（〔塚原〕ト伝末後流目録：寛永 4 年（1627）発給：国際武道大学蔵）

武術流派が成立した背景には、日本の文化伝統があった。古くから神道・仏教・修験道などで身心をかけた修行法が定着していた。室町時代には歌道や能楽、生け花、茶の湯などの芸道で、一芸に達すれば、他にも通じ真実にも触れ得るとして、一事専念を言う「道」の考え方が成立していた。芸道の中で「型」を中心にする教習法があり、目録の形態もあった。15世紀初期には、さまざまな道の一つとして「兵法」（剣術）が挙げられていたが、後期に入って明確な武術流派が形成されたのである。

武術流派の流祖は、神社や洞窟に参籠して極意を編み出したと言われ（飯篠、愛洲、塚原、竹内……）、また彼らは戦わずして相手を圧倒した（飯篠、塚原、上泉……）などという伝説も、勝負以上のものを志向した彼らの意識を示している。

16世紀後半の戦国後期になると、長槍の足軽による集団戦法が主になり、加えて鉄砲の伝来・普及によって、それまでの重装備の騎馬中心の戦いから軽装備で白兵戦となる比重が高まって、実戦的な弓術・槍術・剣術・小具足・組討などの武術を訓練しておく必要があった。16世紀末の天下統一期から江戸初頭までは、まだ合戦が起きる可能性があり、武将としての性格が強かった大名たちは競って有能な武芸者を招こうとした。中央権力も織田、豊臣、徳川と

三変する中で大名の興亡も激しく、流動的な社会の中で武者修行が盛んであった。この時代に流派は一気に増え、槍術、居合術、砲術などにおいても独立した流派が生まれている。

2. 近世武術の展開

17世紀初頭、江戸幕府が成立し、大坂の陣（1615）以降、合戦はなくなったが、士農工商の身分社会の中で、「弓馬劍槍」が武士の表芸として修練されることになる。弓・馬は上級武士の嗜好^{たしな}みであったが、刀は全ての武士が常に身に着ける身分の象徴でもあったので、剣術を中心として流派武術が展開した。

剣術では、木刀による形稽古が中心で、柔術も受と取の形稽古であった。流派の中では、それぞれに教習法があり、免許を出して教えるやり方だったので、伝書が多く作られた。「天下泰平」となっても武士は、タテマエとしては絶えず戦う備えが求められていたので、実戦的に役立つ武術であるよりも、武士としての覚悟を養成することが主であった。

幕府は軍事的には各藩を厳しく監視し、大名に参勤交代をさせたが、260余りの藩は独立した体制であった。武術流派は統制されることはなく、藩にはそれぞれに各武術で幾つかの流派の兵法師範があり、また江戸や諸国の城下町に町道場があったので、各武術で多くの流派が展開することになる。

江戸時代の流派は、幕末までの250年間に、ある研究者によれば剣術745流（内、異名同流は120流、以下同様）、槍術148流（26流）、柔術179流（12流）、弓術51流（10流）の他、兵学71流（17流）、馬術67流（6流）、砲術192流（19流）など、非常に多くの流派が展開

することになる^(注3)。

(1) 初期；流派の確立

徳川家康は、戦国武将として武芸好きであり、かつ征夷大將軍として武家の伝統を重んじたので、個々の武士の武芸の稽古を奨励した。3代將軍の家光は、合戦を知らない世代であったが、武芸の稽古に熱心であった。家光治世の17世紀半ばまでは、合戦を体験した世代がおり、尚武の風は強く、幕府や諸藩には兵法師範がいた。彼らは兵法師範に相応しい伝書、伝承の形態を整備しようとした。

この時代に柳生宗矩の『兵法家伝書』(1632)や宮本武蔵の『五輪書』(1645)等が書かれている。宗矩は、乱れたる世の「殺人刀」は、治まりたる世では「活人剣」にならなければならないとし、禅僧・沢庵の教えを取り入れ、剣術の究極は「無心」で遣うこととし、心法を強調した。宗矩は將軍家兵法師範として大きな権威を持ち、剣術のみならず、各種武芸にも影響を与えた。同じ新陰流でも尾張徳川家の兵法師範となった柳生兵庫助は、心法論には批判的で素肌剣術の技法を整備しようとした。武蔵の『五輪書』は、実戦的な剣術の心得を核として武士としての生き方を具体的に示している^(注4)。

また柔術では、中国拳法の技法や医学の経絡^{けいらく}などの影響も受けながら、当身^{あてみ}や殺活法を取り入れた楊心流^{りょうしんりゅう}や良移心当流などが生まれた。良移心当流の福野七郎右衛門やその弟子で起倒流乱れを興す茨木専斎は、柳生新陰流を学び、専斎には宗矩の心法論の影響もある。別に柔術の技法を整備した関口流^{ちくりん}は、紀伊徳川家の流儀となっている。

弓術では、日置流の傍系に竹林派が成立して、尾張徳川家、紀伊徳川家の両藩に定着し、後の三十三間堂の通し矢における尾張・紀伊の技の競争に発展していく。

江戸初期に、流派武術は武士階級の新たな文化として定着し、以

後江戸時代を通じて、武士が嗜むべきものとして、数多くの流派が展開していくのである。

（２）中期；流派武術の展開と停滞

17世紀後半には、幕藩体制が定着して「天下泰平」の世で耕地面積が大幅に拡大し、農業生産性が高まり、経済的に豊かになった。交通網が整備され、全国の経済圏が出来上がり、上方の町人を中心に元禄文化が花開いた。幕府や諸藩では、組織が整備された分、上下の身分格式が厳密になり、万事は伝統主義となっていった。和歌、俳諧、謡、仕舞、茶の湯、生け花など遊芸文化が展開し、家元を中心とした免許制度も確立する。

武術においては、他流試合が禁じられ、実戦の可能性はほぼなかった。武術は華法化する傾向があった。武術の技法より、禅や儒教の教えを取り入れて心法を強調する流派が出てくる。流派の中では、免許とする形が多くなり、また新たな流派も増えていった。武士は剣・槍を習うのが務めとは言われていたが、技の稽古が文字通り型通りのものになって、武芸の免許を義理や金で得る者までいた。

こうした中で、弓術では京都の三十三間堂の通し矢が盛んになり、有力な藩の武士が藩の名誉をかけて競い合い、次々と驚異的な記録を打ち立てていった。また勸進相撲では、藩のお抱えになった職業的力士が競っていた。相撲において俵で土俵が作られ、決まり手が整備されたのは、18世紀前後のことであった。また薙刀は、武家の女性の嗜みとしても行なわれるようになった。

（３）後期；流派武術の革新

18世紀後期には、経済発展の中で町人・豪農の社会的な上昇が見られ、封建体制の矛盾が深まり、社会全体が大きく変動しつつあった。18世紀中期から一揆が頻発していたが、18世紀末から外国船が度々

鎖国していた日本に接近し、対外的な危機感も高まった。こうした中で、享保（1716～45）、寛政（1787～93）、天保（1841～43）の幕府の三大改革がなされ、その度に武術の復興が図られた。

剣術では、18世紀初期から竹刀と面・胴・籠手の防具が工夫され、竹刀で打ち合う撃剣が展開していった。最初は流派剣術から反発が大きかったが、実際に打ち合う競技の面白さもあったので、18世紀後半に一刀流中西派なども取り入れてからは急速に広がっていった。



写真3. 日夏繁高著『本朝武芸小伝』（享保元年（1716）刊本：国際武道大学蔵）
武芸者150人の略伝を掲載する

18世紀末からは諸藩で藩校が多く作られ、儒教の教育とともに剣術・槍術・馬術・弓術・柔術・兵学・砲術など武術の稽古が奨励されていた。

19世紀になると撃剣の試合が盛んになり、武者修行も行われるようになった。中でも千葉周作は、埼玉地方に武者修行をして北辰一刀流の教線を広げ、江戸に町道場を開いたが、竹刀剣術の技術を整理し、教習法を簡素化し、学びやすくして、人気を博した。その他、撃剣の新流派が多く出来、江戸の町道場が盛んになった。撃剣は下級武士を中心として、豪農層や町人も行っている。

18世紀後期から19世紀にかけては、江戸初期からの流派でも中興や復古再編が行われている流派が多い。今日に伝わる尾張柳生家の新陰流剣術の形が改めて整備されたのも、また柔道の「古式の形」

として伝わる起倒流の形が中興・普及したのもこの頃である。起倒流と並んで柔道の母胎となる天神真楊流も19世紀初期に生まれている。

柔術ではそれまで土間で稽古する流派が多かったが、板間やさらには畳を敷いた道場を使う流派も出てきた。また19世紀半ば頃からは、形を崩して自由に技を掛け合う乱捕りも始まっている。

弓術でも、藩校に今日の弓道場とほぼ同じ15間（28メートル）先の^{あずち}塙に1尺2寸（36センチ）の的を置き、屋根付きの板間の射場があるものも作られるようになった（注5）。

江戸後期には、今日に直接つながる武道の始まりが見られるのである。

（4）幕末；武術におけるプレ近代

1853年、ペリーの黒船が来航して幕末になると、尊皇攘夷や倒幕運動も起こり、テロが横行する中で、剣術が一層盛んになった。剣術は、豪農層が武士に取り立てられ下級武士が出世する手段でもあった。剣術修行として諸国を巡る者も多く、道場が情報交換の場ともなった。新選組のように実戦の剣を揮った者もいた。

こうした中で幕府は1856年に講武所を作り、幕臣だけでなく諸藩の臣も受け入れ訓練した。講武所は砲術と剣術が中心であった。（柔術も弓術も最初は教授科目に入っていたが、実戦的ではないとしてやがて廃止された。）

講武所の剣術では、各流派の名手が教授方になり、流派を越えて、試合を中心に行われた。竹刀の長さも今の3尺8寸に統一された。幕末には「心気力一致」「気剣体一致」なども言われ、千葉周作の遺稿とされる「剣術68手」には、面、籠手、胴、突きの技が整理されている。剣道の技法もかなりの部分は、この時代に出来上がっ

ており、近代剣道の基盤になるのである。

剣術は、まだ武士階級中心の武術であったが、流派を越えて統一した形で試合が広範に行われていたという点では、すでに近代化が先取りする形で始まっていたのである。

II. 近代武道の成立

1. 武道の近代化

1868年明治維新となる。西欧の軍事力による圧迫で日本の独立に対する危機意識があったので、新政府主導で社会全体の急激な近代化が上から強制されていた。明治初期の10年間は「文明開化」期で、武士階級が解体され、廃刀令が出て、伝統的なものは時代遅れとされ、江戸時代に展開した流派武術は存亡の危機に直面した。この時期、多くの流派が断絶している。有名剣士でも、職を失い窮迫していたので、「撃剣興行会」として、有名剣士同士や薙刀の女性などが試合を行って、その観戦料を得ることで、わずかに命脈を保つほどであった。

(1) 近代剣道・柔道の確立

伝統的な武術を見直す気運が出てきたのは、明治10年（1877）の西南戦争で警視庁の抜刀隊が活躍してからである。警視庁は警察官に撃剣と柔術を訓練することにし、武術大会を催し、優れた剣術家、柔術家を世話係に登用した。

自由民権運動が盛んになる中で、言論弾圧も厳しくなったので、運動会や懇親会の形を取る結社が多くあり、撃剣の試合や壮士養成に剣術訓練をする所もあった^(注6)。

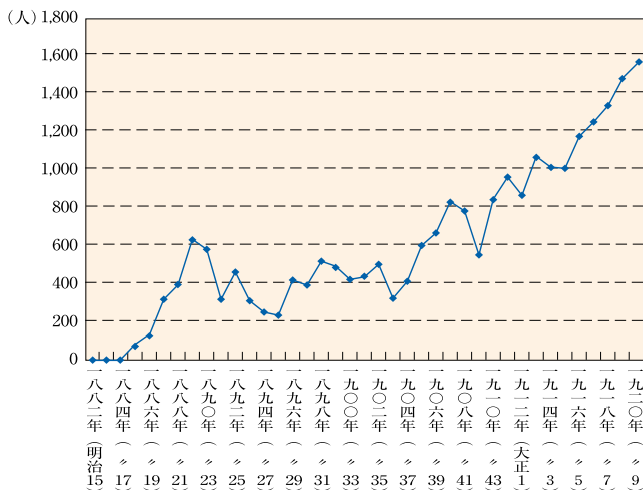
明治15年(1882)、山岡鉄舟(1836~88)は春風館を設立、一刀流を継ぐとともに禅を学んで精神性を強調した剣術指導を始めた。鉄舟は、江戸の無血開城の交渉を成功させた幕臣であったが、維新後は明治天皇の侍従となり社会的に信望の厚い人物であったので、その影響力は大きく、江戸の剣術を近代剣道へと橋渡した人物と言える。

明治15年(1882)は、嘉納治五郎(1860~1938)が講道館を設立した年でもあった。東京帝国大学を卒業し学習院の講師になったばかりの嘉納は、投げ技主体の起倒流と固め技主体の天神真楊流を合わせて、危険な技を省き、「手技・足技・腰技」の分類と「投げ・掛け・払い」などを組み合わせ技を大胆に組み換えた講道館柔道を、以後数年間で作り上げる。柔術が形稽古であったのに対して、柔道は乱取り中心で、試合形式も取り入れて、柔術を近代化したものである。嘉納は、柔道は「体育法」、「勝負法」、「修心法」を合わせ持つと主張した。警視庁の武術大会で、西郷四郎らの活躍で講道館柔道の名が高まった。入門者が増えると、嘉納は「投げの形」「固めの形」を作って教授法を新たにしたが、他方、起倒流の技は「古式の形」として保存している。また修練の励みとするため、段位制も始めている。

明治22年(1889)嘉納が文部大臣らを行前に行った講演「柔道一班とその教育上の価値」は、柔術と柔道の相違を明確にし、技的にも理論的にも柔道が確立したことを示すものであった。この明治22年は、大日本帝国憲法が公布された年で、翌年国会が開設され、また教育勅語も出されて明治国家の体制が固まった時代であった。

嘉納による柔道の創始は、伝統武術を近代化し、社会的にも定着させた典型として、他の武道の近代化にも大きな影響を与えることになる。

表1. 講道館の入門者数の推移（井上俊『武道の誕生』より）



（2）大日本武徳会と武道の定着

明治27～28年(1894～95)の日清戦争から10年後の日露戦争(1904～05)の時期は、対外戦争とその戦勝によってナショナリズムが非常に高揚した時期であった。新渡戸稲造の『武士道』(1899)が英文で刊行され、欧米では日清戦争、さらに日露戦争にも日本が勝った要因を説明するものとしてベストセラーになったが、日本語に訳され、国内でも武士道がブームになっていた。こうした中で柔道と撃剣は、警察・軍隊・学校・道場で盛んになり、また弓術も学生を中心に展開することになる。

明治28年(1895)、桓武天皇による京都遷都1100年を記念して京都に大日本武徳会が設立された。武徳会は演武会を催し、667人が参加したが、剣術が338人、柔術117人、弓術114人、槍術17人、薙刀14人などであった^(注7)。以後、演武会は毎年開催されるように

なった。武徳会は、当初1800人足らずの会員で発足したが、皇族を総裁とし、内務官僚や知事、警察も会員募集に協力させたので、わずか2年後には会員は10万人を越え、10年後には100万人を越えるまでになった。

武徳会は、明治32年(1899)平安神宮内に武徳殿を建て、以後、ここで演武会を開くようになる。武徳殿は、正面に天皇の玉座をあつらえ、復古的な「作られた伝統」という面が強い。さらに明治35年(1902)には「範士・教士」の称号を授与し武術家優遇制度を敷き、同37年には武術教員養成所を建て、翌38年には流派を越えて統一した柔術・剣術の制定形を制定するなど、武徳会は、戦前の武道の推進に大きな役割を果たすことになる。

この間、柔道を創始した嘉納は、明治26年(1894)以来、大正



写真 4. 大日本武徳会の武徳殿の前で柔術の形の制定委員の写真
(前列中央が嘉納治五郎)〔『写真でみる柔道の歴史』[講談社]より〕

9年（1920）まで3期、通算26年間、東京高等師範学校長の職にあり、武徳会においても柔術部門の責任者であった。さらに明治42年（1909）には国際オリンピック（IOC）委員になり、2年後には大日本体育協会を組織し初代会長となり、翌年の第5回オリンピックに日本が初参加した時の団長となった。嘉納は、柔道だけでなく、剣道、相撲、さらに日本のスポーツの普及・発展に大きな功績を残し、後には沖縄の唐手の本土紹介にも助力している。

近代スポーツの展開を考えると、イギリスのパブリック・スクールでサッカー、ラグビーなどの試合や、陸上競技大会などが始まったのが1860年代、ドイツで体操競技が連盟を組織したのは1880年代、アメリカで、バレーボールとバスケットボールが考案されたのは1890年代、近代オリンピックの第1回大会が開かれたのは1896年である。日本の武道が伝統武術を近代化して社会に定着させ、組織的に展開するのが1890年代という早い時期であったことは、世界の体育・スポーツ史上でも特筆に価することである。

（3）学校教育での展開と「武道」

日露戦争後の明治末期から大正時代、日本は「一等国」の仲間入りをし、朝鮮併合（1910）を強行し、中国への進出も図って、帝国主義の道を歩むことになる。第一次世界大戦（1914～18）中には、戦場となった欧州向けの輸出が大幅に伸び、大戦景気になり、アジアにも勢力を広げていった。江戸時代に生まれ武士であった世代がほぼ亡くなったが、「武士道」がブームとなり、軍国主義的な傾向も強まっていった。この時代に、大学・高等学校・高等専門学校の学生を中心に競技としての武道が展開する。

武道を学校の科目として教育することは、武道関係者の長年の悲願であった。明治16年（1883）文部省が撃剣・柔術を科目として

採用することの可否を諮問したが、調査を行った体操伝習所は翌年に否と結論を出した。この後、何度も請願運動があり、明治29年（1896）には帝国議会に柔・剣術を中学校の正課に加えることが建議されたが、否決された。中学校での正科として柔道・撃剣を教えてもよいことになったのは、明治44年（1911）であった。

学校の教科となると、教員の養成が必要であり、教授するのに形の統一と集団教授法の開発が早急に必要となった。教員養成は、東京高等師範学校と明治45年に京都の武徳会に出来た武術専門学校が中心に行った。形の統一は、柔術に関しては、講道館が大きな力を持っていたので、明治39年（1906）の武徳会の制定形（投げ技十五本、固め技十五本）で異論は出なかったが、剣術は伝統ある流派が多く、同年の武徳会の制定形3本には異論が多かったので、改めて20人の委員を委嘱して再調査を行い、大正元年（1911）に大日本帝国剣道形（太刀の形七本、小太刀の形三本）を制定した。（これは現在、日本剣道形として受け継がれている。）大正4年には集団指導法を書いた高野佐三郎著『剣道』も出版された。集団訓練の中で礼法もこの時期に整えられている。

またこの時期から、江戸時代には流派の秘伝とされていた剣術の伝書が公開され始めた。明治42年（1909）には『五輪書』が公刊され、高野の『剣道』にも掲載されている。大正4年（1915）には江戸期の剣術書21編を載せた『武術叢書』が出され、さらに大正10年には山田次朗吉が『剣道集義』正統で剣術書58編を翻刻している。大正14年には山田著『日本剣道史』、下川潮著『剣道の発達』という通史も出版された。

「柔道」という名称は、講道館柔道が広まるにつれ明治30年代にはかなり知られるようになっていた。生け花や茶の湯が近代化をは

かり、新たに意味づけられて「華道」や「茶道」を名乗り始めるのは1890年代である。撃剣に代わって「剣道」の名称が定着してくるのは、1910年代である。そうした流れの中で、大正8年（1919）、武術専門学校校長であった西久保弘道は、それまでの「柔術・撃剣・弓術」を、「柔道・剣道・弓道」に改め、武術専門学校を武道専門学校に改名することに力を尽くした。文部省の用語として「撃剣」が「剣道」に代えられたのは、大正15年（1926）のことであった。

（４）学校武道の拡大—弓道・薙刀

柔道・剣道以外に学校教育で実施されたのは、弓道と薙刀であった。

弓術は、明治維新以後、衰退が著しく、盛り場の遊戯ともなっていた。明治22年（1889）、竹林派で幕臣だった本多利実は「弓道保存教授」を著し練習所を開いた。本多は、明治25年から第一高等学校の師範になり、28年から武徳会にも参加したが、本多が工夫した正面打ち起しの射法は、明治末期から大正期に広まった。明治末期から大学間で競う弓道大会が行われ、大正13年（1924）から各種武道・スポーツの全国大会として始まった明治神宮大会にも弓道が採用されたので、一層盛んになった。昭和4年（1929）に高等学校の教材に弓道が採用された。昭和7年には武徳会で射礼を小笠原流で統一し、射法は「弓道要則」を発表した。昭和11年（1936）には中学校でも弓道が正課採用となった。

薙刀は、江戸時代から武家の婦女子の武芸としても展開していたが、日清戦争前後から婦徳涵養と女子体育の立場から再認識されるようになり、一刀流の小沢卯之助は明治29年（1896）から集団で行う「武術体操法」を工夫していたが、明治41年（1908）「改正薙刀体操法」を出版、本格的な普及を図った。大正2年（1913）「学校体操教授要目」に課外に行う運動として「薙刀（女子）」が示されてからは、

天道流の美田村千代、直心影流の園部秀雄ら女性指導者の下、女子師範学校や高等女学校などで薙刀が行われるようになった。昭和9年（1934）京都の大日本武徳会に、2年後には東京の修徳館に薙刀専修の教員養成所が設けられ、昭和11年（1936）に女子師範学校・高等女学校で、弓道とともに薙刀の正課採用が認められてから急速に普及した。昭和15年（1940）武徳会は「薙刀道基本動作」を決め、翌16年から女子中等学校ならびに国民学校体錬科で必修科目として実施されるようになる。

2. 近代武道の展開

（1）競技会の隆盛

大正末から昭和初期にかけては、外来スポーツが各種導入され、学生を中心として大会や対抗試合が盛んになった。大正13年（1924）明治神宮大会で、各種のスポーツの全国規模の試合が行われた。陸上競技、水泳、野球、フットボール、バスケットボール、バレーボールに加えて、柔道・剣道・弓道・相撲の試合が行われた。武徳会は、「武道は勝負を争うことを本旨としない」として不参加を表明した。以後、毎年大会が開催され、競技が盛んになるに従って、武道のルールが他のスポーツと比較され、スポーツ的な試合方法（対抗戦、リーグ戦、トーナメント法、三審制等）が工夫されるようになった。

昭和4年（1929）の昭和天皇の即位を記念した天覧武道大会は、台湾・朝鮮も含む全国規模で、高段で有名な剣士・柔道家が参加する空前の大会となった。審判員を3名にするなど、試合ルールが明確化された。天覧武道大会は、この後昭和9年の皇太子誕生記念と同15年の皇紀2600年奉祝の大会が開かれている。

この時期、武道の競技化・スポーツ化が非常に進んだと言えるが、逆にスポーツの日本化も進んでいる。特に野球は、朝日新聞に野球評論の健筆を揮った飛田穂州などが精神主義化を進めている。大正4年（1915）に始まった全国中学野球大会は、13年から甲子園球場に舞台を移し、昭和2年（1927）からはラジオで実況放送されて、大人気となった。

この頃、競技化する武道に対して危機感を抱き、精神性をより強調する流れもあった。

柔道では、嘉納自身が、試合で勝利至上主義に向かう柔道を強く憂いて、身体鍛練で技を争うのは「下の柔道」で、精神修養を含むのが「中の柔道」、さらに身心の力を最も有効に使って世を補益するのが「上の柔道」と論じた。大正11年（1922）、「精力善用・自他共栄」を柔道原理として制定している。

剣道では、一ツ橋商業高校の師範であった山田次朗吉は、武徳会に入らず、試合にも批判的で、直心影流の「法定」の形を教え、修心としての剣道を強調していた。

弓道では梅路見鸞^{けんらん}が「弓禅一如」を唱え、阿波研造は「大射道教」の組織を作って独自の指導を行った。阿波の指導を受けたドイツ人のオイゲン・ヘリゲルが後に『弓と禅』（1948）を著すことになる^{（注8）}。

（2）武道の拡大―相撲・空手道

これら武道の発展に刺激され、今までになかった種目が武道に加わるようになる。

相撲は、元来は農耕儀礼や神事と結びついており起源は古い。平安時代の「相撲節会」、鎌倉時代の「武家相撲」、さらに江戸時代の「勧進相撲」などは、いずれも職業的力士が行っていた。農村では宮相撲も行われていたが、流派は作られなかった。丸い土俵ができ、決

まり手が整備されたのは18世紀頃で、18世紀末には谷風など名力士が出、上覧相撲を契機に相撲故実も復活・整備された。明治になって東京会所が設立され職業相撲が公認されたが、力士は髷^{まげ}を結い、行司は烏帽子・直垂姿^{えぼしひたたれ}で伝統性を強調し、度々天覧に浴し、日清戦争後から名力士も出て人気を博し、明治42年（1909）に相撲常設館を「国技館」と呼ぶようになってから、相撲は「国技」と言われるようになった。

こうした職業相撲の隆盛に伴って、嘉納の提唱もあって、明治33年（1900）から体育として課外活動で学生相撲が展開した。明治末期には学生相撲は非常に盛んになった。明治45年（1912）初の学生相撲大会を開催して以来拡大し、大正8年（1919）全国中等学校相撲大会が開催され、大正13年（1924）からの明治神宮競技大会に相撲が取り入れられ、県代表の対抗戦で、競技としての相撲が浸透していった。昭和8年（1933）には全日本学生相撲連盟が組織され、大学、中学、小学校に至るまで相撲部が設けられるようになり、中学校全国大会は、甲子園の中学野球（現在の高校野球の前身）と並んで、全国的な熱狂を呼んだ。ただ戦前には、相撲が学校教育の正課となることはなかった。

また大正末から昭和初期にかけて、琉球王国で発達していた唐手が日本本土に紹介され、日本の武道の影響を受けて改編され、空手道として武徳会に登録されるようになる。

琉球唐手術は、14世紀にまで遡る歴史があり、中国拳法との関係も深く、琉球王国の禁武政策の中で武器を持たない徒手格闘技として民間で秘密裏に修練されていたと言われる。那覇手、首里手、泊手の3系統があったが、明治になり近代化され、沖縄では教育の中に取り入れられていたが、大正11年（1922）に船越義珍^{ふなこしぎちん}が日本本

土に紹介して以降、大学生を中心に急速に広がった。日本の柔術・柔道の形の影響も受け、組手が作られ、教習法や、また競技化した自由組手が工夫された。昭和4年(1929)には、「唐手」に代え「空手」の語を使用するようになった。元来源流が3系統あったが、日本柔術を取り入れて工夫をした派もあったので、それぞれに異なった形を持ち、別の流派として展開した。1930年代後半には、松濤館(船越義珍)、和道流(大塚博紀)、糸東流(摩文仁賢和)、剛柔流(宮城長順)の四大流派が、武徳会に登録されている。



写真5. 空手を指導する船越義珍(1920年代初期)(船越『空手道一路』[産業経済社]より)

(3) 戦時下の武道—銃剣道と戦技化

昭和6年(1931)に満州事変が起き、同12年の日華事変以降は日中戦争が続き、16年からはアジア太平洋戦争に突入することになる。昭和13年には「国家総動員法」が公布され、戦時統制が強まっていった。昭和16年「国民学校令」が公布され、体操科は体錬科になり、武道が必修になった。昭和17年には大日本武徳会も政府の外郭団体になり、銃剣道、射撃道も加えて戦時色を強めた。

銃剣道は、陸軍戸山学校で明治27年(1887)にフランス式の銃剣と日本の槍術を合わせて作られ、軍隊の中で展開していたが、大正14年(1935)から武徳会に登録され、昭和16年(1941)に銃剣道振興会を設立していた。

またこの時代、吉川英治の『小説宮本武蔵』(1935～39)が新聞

に連載され、また講道館の西郷四郎をモデルとした富田常次郎の『姿

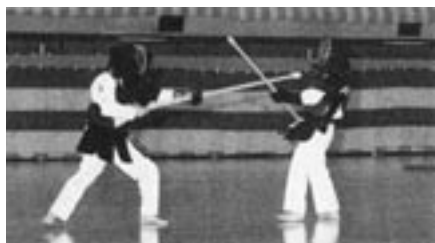


写真 6. 銃剣道の技（戦後は戦技の要素は払拭しスポーツとしての競技となる〔『日本武道館三十年』より〕）

三四郎』（1942）も刊行され、それぞれ映画化されて、精神主義的な武道観を形成するのに影響があった^{（注9）}。これらの作品は、戦中から戦後の武道の復興から普及期に影響を及ぼすことになる。

Ⅲ．現代武道の展開

1．武道の現代化

昭和20年（1945）の敗戦で、武道は戦時下に軍国主義に傾いていたため、占領軍から危険視されて全面禁止になった。大日本武徳会は解散され、学校教育でも社会体育としても禁止された。そのため武道は、以降スポーツ化を進めることで存続を図ることになる。

（1）武道禁止からの復活

相撲と空手道は昭和21年（1946）にいち早く解禁され、柔道も外国人愛好家が多く、講道館の稽古は通常通り行われていた。

アマチュア相撲の日本相撲連盟は、昭和21年に設立され、日本体育協会に加盟し、この年から始まる国民体育大会でも相撲競技が始まっている。

柔道は、昭和24年（1949）に全日本柔道連盟が設立され、学校

教育で柔道が解禁になったのは、昭和25年（1950）であった。

弓道も禁止は厳しくはなく、昭和22年に連盟が結成され、24年に改組し、25年に日本体育協会に加盟し、国民体育大会にも参加、昭和26年に学校教育においても解禁になった。

けれども剣道に対しては占領軍の態度は厳しく、公私の組織的活動が禁止され、「剣道」「武道」の名称も使用禁止とされた。そこで剣道をスポーツ化した「しなない競技」が考案された。稽古着・袴ではなく、シャツとズボンとし、試合も時間制でポイント制として、スポーツ化を印象づけ、昭和27年によくしなない競技として学校教育でも許可を得た。しかし昭和27年（1952）にサンフランシスコ平和条約が発効して日本が独立を回復するや、本来の剣道復活の気運が高まり、全日本剣道連盟が結成された。翌年には「体育・スポーツとしての剣道」を掲げ、社会体育、次いで学校教育でも復活し、昭和29年にはしなない競技連盟も合体して今日につながるのである。

薙刀は、戦前に女子教育で展開していたが、天道流と直心影流の流派の調整が難しく、戦後は競技の面を中心として「なぎなた」として展開した。昭和30年（1955）に全日本なぎなた連盟が発足、同34年から中学校以上のクラブ活動で認められた。同41年には高校の正課として認められる。

銃剣道も、昭和31年に全日本銃剣道連盟を結成し、戦前の戦技の要素を払拭して「武道として国民スポーツとして」の普及を図っている。

昭和33年（1958）には、中学校の運動領域の一つに「格技」を設け、「すもう」、「柔道」、「剣道」を挙げ、いずれか一種目を男子に指導するとされた。2年後には高校にも同様の措置が取られた。

（2）戦後に展開した武道—合気道・少林寺拳法・居合道・杖道

合気道は、すでに大正末期から植芝盛平（1883～1969）が、大

東流合気柔術を母胎とし、神道思想の影響を受けつつ「合気とは愛なり」などを掲げて、大正11年（1932）に「合気武術」を称して、独自の形態を取るようになり、昭和17年（1942）には武徳会にも登録されたが、まだ一般には公開していなかった。戦後の昭和22年に財団法人合気会が発足、昭和30年（1955）から一般公開演武を行って以降、急速に広まっていった。合気道は、競技として競うことを否定し、専ら形による指導をしている^{（注10）}。

少林寺拳法は、中国に特務員として派遣され中国拳法の伝授を受けた宗道臣（1911～80）が、戦後昭和21年に帰国した後、暴力が横行し道義が廃れた社会を見て、中国拳法に創意工夫を加えた技を教えながら人としての道を説き、「拳禅一如」「自他共榮」を掲げて創始したものである。昭和26年宗教法人として出発し、四国を中心に関西圏から展開した。昭和32年（1957）、武道団体として全日本少林寺拳法連盟が設立された。

昭和31年（1956）には、日本剣道連盟に居合道と杖道も入ることになった。昭和41年に、居合道は制定形七本を、同43年には杖道の十二本の制定形を決めている^{（注11）}。



写真7. 合気道の指導をする晩年の植芝盛平 [『植芝盛平伝』[出版芸術社]より]



写真8. 少林寺拳法の剛法の指導をする宗道臣 [『日本の武道』[日本武道館]より]

2. 現代武道の発展

日本の社会は1950年代後半には戦後復興を終え、1960年代の10年間は、産業も農業から工業中心へと大きく転換し、農村から都会へと大量の人々が流れ、社会の様相も大きく変貌した。年に10%以上の高度経済成長を遂げ、所得もほぼ倍増して生活が豊かになり、余暇を楽しむ余裕も増えた。国民体育大会（国体）は、昭和21年以来日本体育協会主催で開かれていたが、昭和36年（1961）のスポーツ振興法によって、文部省も共催し、各都道府県で順に開催されるようになり盛んになった。こうした時代の中で、戦後の武道も発展していった。昭和39年の東京オリンピック大会は、日本のスポーツ界のみならず、武道界にとっても時代を画する事件となった。

（1）東京オリンピック大会

昭和39年（1964）の東京オリンピック大会では、柔道が正式種目になり、その会場として日本武道館が建設された^{（注12）}。柔道は、階級制で試合が行われ、軽量級・中量級・重量級で日本人選手が優勝したが、最後の無差別級ではオランダのヘーシンク選手が優勝したことは、日本社会に大きなショックを与えたが、柔道が世界に広まる大きな刺激となった。またこの時、剣道、弓道、相撲がデモンストレーションを行い、それぞれに国際化へのステップとなった。また流派で異なり対立していた空手道も、この年大同して全日本空手道連盟を結成した。

東京オリンピック後、全国的にスポーツ熱が高まった。昭和43年（1968）は明治百年であり、経済成長により自信を取り戻した日本ではナショナリズムも高まりもあって、武道は、少年や女性にも広がって非常に盛んになった。

（２）日本武道館を中心とする武道の展開

日本武道館は、武道の統一団体としての活動を始め、現代の武道の展開に大きな役割を果たすことになる。昭和41年（1966）武道の指導者養成を主な目的として武道学園を開校、同43年武道団体の広報活動として雑誌『武道』を刊行、昭和46年千葉県勝浦市に日本武道館研修センターを建設するなどの直接関係した事業や施設の他に、後述する日本武道学会、日本武道協議会、日本古武道協会、全国都道府県武道館協議会、国際武道大学などの団体が生まれる母胎となった。

昭和40年（1965）から43年にかけて、日本体育大学、東京教育大学、中京大学、東海大学の体育学部に武道学科が次々と誕生した。昭和41年には、江戸時代の流派武術の伝書を集めた『日本武道全集』（全7巻）が刊行されている。昭和43年（1968）には、日本武道学会が設立され、武道の学術的な研究が行われるようになった。

昭和45年には、学校体育の「格技系の種目」の中で、これまでの「すもう」、「柔道」、「剣道」に加え、「弓道」、「なぎなた」も教えるもよいとされた。

武道が盛んになる一方で、競技化・スポーツ化が進んでいたため、それを憂えて、剣道連盟は、現代に即した理念の確立を目指して昭和50年（1975）に「剣道は、剣の理法の修練による人間形成の道である」とする「剣道の理念」を制定した。



日本武道館（『日本の武道』〔日本武道館〕より）

昭和52年（1977）、柔道・剣道・弓道・相撲・空手道・合気道・少林寺拳法・なぎなた・銃剣道の9種目の連盟と日本武道館の10団体で構成された日本武道協議会が発足した。

昭和53年（1978）には日本武道館の主催で古武道大会が開かれた。46流派が出場して大盛況で、翌年には、日本古武道振興会が設立された。これ以後、この会主催で古武道大会は毎年開催されている。

また昭和40年代終わり頃から全国各地に県立や市町村立の公立武道館が数多く建設されるようになっていたが、昭和54年、646の県立、市町村立武道館が集まり、全国公立武道館協議会を設立したが、2年後、武道館は33都道府県に出来、市町村立は1000を越えたので改組して、全国都道府県立武道館協議会が発足した。

3. 武道の国際化

1980年代は、日本の GNP が世界第二位となり、日本企業の海外進出も盛んで、輸出も順調で、“JAPAN AS No.1”（エズラ・ヴォーゲル：1979）というベストセラーまで出て、日本の国際化が進んだ時期であった。『五輪書』の英訳（1974）が、ビジネス書としても売られ、10万部を越えるベストセラーになった（現在では、英訳7種類、100万部を越える）。こうした中で武道の国際化が急速に進められた。

（1）武道の国際連盟

各武道により国際化の事情はかなり異なる。武道の国際組織は、表2の通りである。

柔道は、創始者・嘉納治五郎自身が何度も海外渡航をした国際人であり、戦前から積極的に国際化を図っていた。第二次世界大戦

後、日本では武道禁止時代の1948年に英・仏・伊・蘭の4カ国が集まりヨーロッパ柔道連盟を設立し、それに7カ国が加わる形で1951年に世界柔道連盟(IJF)が成立した。日本は翌1952年に加盟するとともに、2代目会長に講道館の嘉納履正になった。けれども1965年以降の3代目会長にはイギリスのパーマーになり、オリンピック種目に採用されたので競技化の傾向を強めて、世界5大陸にわたる組織となった。1979年に4代目会長に松前重義になったが、1987年以降、現在の8代目まで外国人会長である。

剣道および空手道で、国際連盟が作られたのは1970年である。1974年に少林寺拳法世界連合、1976年に国際合気道連盟が成立している。70年代後半から、武道の国際化が本格化したと言える。その後の国際化の進展の中で、なぎなたは1990年に、相撲は1992年に、弓道は2006年に、それぞれの国際連盟が成立している。

表2. 武道の国際組織一覧

国際組織の名称	結成年度	発足時の加盟国数	2006年現在の加盟国数
国際柔道連盟	1951	11ヶ国	199ヶ国地域
国際剣道連盟	1970	17ヶ国地域	47ヶ国地域
世界空手道連合	1970	33ヶ国	173ヶ国地域
少林寺拳法世界連合	1974	15ヶ国	31ヶ国
国際合気道連盟	1976	29ヶ国	42ヶ国地域
国際なぎなた連盟	1990	7ヶ国	13ヶ国
国際相撲連盟	1992	25ヶ国	77ヶ国地域
国際弓道連盟	2006	17ヶ国	17ヶ国

各武道の歴史と特性により、国際的な広がりも、また国際化に関する取り組みもさまざまである。

柔道は最も国際化し、国連加盟国より多い190カ国を越え、オリンピック種目であるので、競技化と商業化も進んだが、それととも

に武道としての特性が失われたとする声もある。今や柔道というより、JUDO の時代であるとも言われている。

剣道は、オリンピック種目に入ると独特のよさが失われるとして否定的であるが、空手道や相撲のようにはっきりとオリンピック種目入りを目指しているものもある。設立時の参加国数と現在（2006年現在）の参加国数は表2の通りである。

1978年には訪欧武道団が、ドイツ・フランス・オーストリアを訪問、演武と指導を行った。以後、それぞれの連盟で指導者を派遣している。流派の伝統を残す古武道の演武会も1982年にパリで行われた。

（2）国際武道大学

武道大学の構想が初めて示されたのは、昭和54年（1979）の日本武道館の常務理事会であった。昭和50年以来日本武道館の会長であった松前重義は、53年の訪欧武道団長で、国際柔道連盟会長にも立候補していたが、各国指導者と会う中で国際的にも通用する武道の指導者を養成する大学の構想を口にしたと言われる。55年（1980）には日本武道館の常任理事会で国際武道大学の設立を決議し、翌年、「武道学の確立」と「国際的人材の養成」（設立趣意書）を掲げて設立準備財団が発足した。財界と地元・千葉県と勝浦市からの多額の寄附を得て、昭和59年（1984）、国際武道大学が千葉県勝浦市に開学した^{（注13）}。

昭和61年（1986）には、国際武道大学の隣接地に日本武道館の武道科学研究センターがオープンした。これは、人文系と自然科学系の武道学の確立に向けて、国際武道大学の教員を中心としながら、全国の武道の研究者が利用できる施設たるように、当時の最先端の機器を揃えたものであった。（このセンターは、平成7年（1995）に国際武道大学に移管・委譲され、武道・スポーツ科学研究所となり、現在に至る。）

昭和62年（1987）には日本武道協議会が『武道憲章』を発表した。武道は、「技を磨き、身体を鍛え、心胆を錬る修業道・鍛錬法として洗練され発展し」「日本人の人格形成」に寄与したものであるが、「いまや世界各国に普及し、国際的にも強い関心が寄せられている」ことを自覚し、「単なる技術の修練や勝敗のみにおぼれず、武道の真髄から逸脱することがないように自省するとともに、このような日本の伝統文化を維持・発展させるように努力しなければならない」とし、「目的・稽古・試合・道場・指導・普及」の六か条にわたって「基本的な指針」を掲げたものである。

昭和63年（1988）からは、在日の外国人武道家を対象として日本武道館主催の国際武道文化セミナーが毎年、開催されるようになった。

この1988年に開かれたソウルオリンピックで、女子柔道が公開競技となり、4年後から正式にオリンピック種目となる。

翌1989年は昭和が平成に改まった年であるが、この平成元年には、戦後の学校体育の中で昭和33年（1958）以来の「格技」という名称が、「武道」という本来の名称になった。

こうして1980年代の武道は展開していたが、武道人口は、1985年をピークとして下降線を辿るようになり、少子化の影響もあって、その傾向は現在も続いている。

4. 21世紀の武道—武道の将来

21世紀を迎えると、武道の状況も大きく変わってきている。

戦前の武道を知る世代がほとんどいなくなり、戦後復活して以後に武道を始めた世代になり、雰囲気はかなり変わってきた。古武道も継承者の代替わりが進んだ。国際化はさらに進展し、外国人武道

家は決して珍しくはなくなり、古武道の宗家を継ぐ者も出始めている。また各種目で各国の武道連盟からそれぞれ段位を発行するのが普通になっている。2001年には、英語の武道専門誌“Kendo World”も創刊された。インターネットの普及により、世界中の情報が容易に手に入るようになり、また発信できるようになっている。2003年には武道研究の国際シンポジウムも開かれた^(注14)。

2000年のシドニーオリンピック大会では、篠原・ドイエ戦の判定をめぐり全日本柔道連盟が国際柔道連盟へ抗議文を送付したが、武道の審判のあり方が今後緊要な問題になると思われる。

2006年には、日本の伝統的な要素が非常に強くある弓道にも国際連盟が発足したが、この年の世界剣道選手権の団体戦で日本が準決勝で敗れ、2007年には国際柔道連盟の理事選挙に敗れ、正式理事に日本人が一人もいなくなるなど、いよいよ日本の固有の武道ではなくなり、世界の武道へと移行行く先を示している。

平成18年（2006）には教育基本法が改正され、「日本の伝統文化の尊重」が謳われ、それとともなって学習指導要領も改訂され、平成24年度から中学校で「武道の必修化」が実施されている。

おわりに

武道には伝統文化の面と近代化の両面がある。そのどちらの面を強調するかで武道のあり様も捉え方も大きく変わる。伝統文化を基盤とする部分も多いが、伝統と言われる内容でも近代に作られたものも多く、時代により武道はかなり変化してきている。明治から大正、昭和と進むにつれ、基本的には近代スポーツ化を進めていたが、戦後、禁止から復活する中で、また国際化する中で変遷してきたし、

現代社会の中でさらに大きく変容しようとしている。

武道は今日、外国人の修行者も非常に多くなっている。武道発祥の地の日本で本物の武道を学びたいと来日したら、日本では武道が競技化しているのに、がっかりする人も多い。外国人の方が、古流の武芸を習い、武道の歴史を熱心に調べ、日本人武道家が武道の歴史に無関心でいるという事態も見受けられる。

現代では生活様式がすっかり西洋化し、日常的に和服を着たり、畳で座ることを中心にした生活もなくなった。また昔は遊びの中で行っていた相撲なども行われなくなり、体力低下も懸念される。伝統的な生活の中にあった腰を入れ腹を据えたからだ遣いも大幅に薄れている。

今後、武道がどのように展開していくか、我々が伝統をどう受け継ぐかによると思われる。今日の武道が形成されるまでには、非常に多くの先人たちの努力があったことにも思いを致し、また武道は日本の伝統文化の中でも今日なお国際的に通用する文化であることを自覚して、武道を専門とする大学で学ぶ誇りも持って、どのように受け継ぎ、いかに展開させていくべきか、よく考え、日々努力していけることを切に期待する。

《本文注》

(注1) 石岡久夫「弓道史」(『日本武道大系』第10巻) 116～125頁参照。

(注2) 「墓目」は、大きな音を響かせる鎗矢かぶらやを射て邪を除く神事で、安産祈願を中心に儀式的に行われた。「射礼」は、朝廷で正月に親王以下五位以上、六衛府の官人などが行う競射を観覧する行事。「相撲節会」は、元来神占いの相撲から発展して、朝廷において国々から相撲人すまいびとを招し集め、7月に相撲をとらせ天皇がご覧になる年中行事となっていた。

(注3) 今村嘉雄「武道史概説」(『日本武道大系』第10巻) 13～15頁参照。

(注4) 『五輪書』の内容およびこの時代の剣術の展開については、拙著『定本五輪書』(新人物往来社) 参照。

(注5) 中村民雄『今、なぜ武道か』204～5頁参照。

(注6) 湯浅晃「自由民権運動と剣道」〔『剣道の歴史』(全日本剣道連盟)〕166～171頁参照。

(注7) 中村民雄『剣道事典』(島津書房)190頁参照。

(注8) 拙稿「弓の道—オイゲン・ヘリゲルと師阿波研造」(『国際武道大学研究紀要』第5号所収)参照。

(注9) 井上俊『武道の誕生』155～164頁参照。

(注10) 講道館柔道出身の富木謙治は、乱取り法が必要として競技化した日本合気道協会を組織している。

(注11) 居合道の制定形は、その後、昭和55年(1980)に三本、平成12年(2000)にさらに二本追加されている。

(注12) 東京オリンピック大会は、嘉納治五郎がその誘致に生涯の最後の情熱を傾け、昭和15年(1940)に開かれる予定であったが、戦争のために返上した経緯があった。

(注13) 国際武道大学の建設には、日本武道館から設立財団の基金1億円の支出の他、財界から17億5千万円の募金、千葉県から10億円の補助金、勝浦市から3万坪の土地の無償提供があった。『日本武道館三十年』(日本武道館)139～145頁参照。また教学組織の確立には、元・文部省体育局長・前田充明らが尽力した。『国際武道大学10周年記念誌』参照。

(注14) 国際シンポジウムは、京都の国際日本文化研究センターで11月18日から22日まで、世界各国の武道研究者49名が集まり、発表と討議、さらに一般向けの講演会も開かれた。その記録が、次に挙げる文献9である。

■武道についての主な文献

- 1.『日本武道大系』(全10巻) 今村嘉雄ら編 同朋舎出版 1982

江戸時代の流派の伝書類がまとめて翻刻されている。剣術3巻、弓術1巻、柔術1巻、薙刀・槍術・棒術他1巻、砲術・水術・忍術・馬術1巻、空手道・合気道・少林寺拳法他1巻、武芸随筆1巻、武道の歴史1巻。

- 1.『武術叢書』吉丸一昌編 原版;1915、復刻版;名著刊行会 1978

武芸者150人の伝記を載せた『本朝武芸小伝』(1716)を巻頭に、流派武術の系統図、沢庵『不動智』、宮本武蔵『五輪書』から千葉周作門下の伝書まで、江戸時代の重要な21点の原典を翻刻している。

2. 『武道の名著』 渡辺一郎編 東京コピー出版部 1979
江戸中期から後期の特色ある剣術・柔術・弓術・馬術・槍術・兵学の伝書 20 編について、解説とともに原典とその註解をつけている。
3. 『図説 日本武道辞典』 笹間良彦 柏書房 初版；1982、普及版；2003
歴史的な起りから現代武道まで武道に関して網羅的に項目を立て、図解を多く載せて解説した大冊の辞典。
4. 『増補 武芸流派大事典』 綿谷雪・山田忠史編 東京コピー出版部 1982
武術の流派について、網羅的に挙げて説明している大冊の事典。主な武芸者については簡単な伝記も載せる。
6. 『日本史小百科 武道』 二木・入江・加藤編 東京書籍 1994
1. 武道のおこり、2. 武道の発達（江戸時代の流派武術）、3. 広まる武道（近代から現代の武道の展開）、4. 現代に生きる武道文化（稽古・礼・構えなど）コンパクトにまとめている。
7. 『武道の誕生』 井上俊 吉川弘文館 2004
講道館柔道の成立と発展、海外の普及、また大正後期から昭和前期の武道とスポーツの関係、スポーツの武道化などについて、社会学の観点から論じる。
8. 『今、なぜ武道か』 中村民雄 日本武道館 2007
江戸時代から近代までの武道の身体技法・施設・道具・制度・技の体系についての詳しい武道史を踏まえながら、現代の武道のあり様についての数々の問題提起をしている。
9. 『日本の教育に武道を』 山田奨治・A/ ベネット編 明治図書 2004
2001 年に国際日本文化研究センターで行われた武道の国際シンポジウムの論文集。武道の理念、概念、教育、国際環境、公開講演の 5 部構成で、23 人の論稿と討議のまとめ、講演原稿が掲載されている。（英語版は“Budo Perspectives” Kendo World Press NewZealand 2003）。
10. 『日本の武道』 日本武道館編 2007
日本武道館による日本武道協議会設立 30 周年記念企画。武道の歴史と古武道について論じた後、現代の武道の柔道・剣道・弓道・相撲・空手道・合気道・少林寺拳法・なぎなた・銃剣道の各連盟が、それぞれの歴史や組織・理念・すすめ・指導・当面する課題・将来展望を書いている。また組織・研究機関の概要、資料編には武道近代 140 年の歴史など掲載されている。

第2章

剣道の歴史とその精神

田中 守

はじめに



歴史学的な議論は別にして、剣道の歴史を学ぶ意義は、

- 一、過去を知る（先達の足跡をたどる）
- 二、今を考える（問題意識を持つ）
- 三、将来を展望する（道をつなぐ・人を育てる）

の三つであろう。

剣道は、先達の努力工夫により、闘争の「術」から人間教育の「道」へと昇華を遂げ、現在に至っている。もちろん、そこには時代の変化とともに、技・ルール・用具・社会的位置づけ等々大きな変容が見られる。その実態を知ることが、歴史を学ぶことの中心である。

例えば、流派の発生や盛衰、形稽古の実態や竹刀打込み稽古の台頭、撃剣興行やしない競技の実態を知ることや、大日本帝国剣道形制定や段位称号の歴史、試合審判規則の推移、さらには学校剣道の流れや国際化の歩み等々を追うことで現代剣道の成り立ちを把握することである。

しかし、より重要なのは、それぞれの事象が何故起こったのか（背景にあるもの）、そしてその是非（後世にどのような影響を及ぼしたのか）を考えることである。そこに、はじめて今の剣道を考え、50年後100年後の剣道をつくり上げる（道をつなぐ・人を育てる）ことができるのではないだろうか。その意味で、剣道の歴史を学ぶということは、「人間形成の道」としての剣道の成り立ちを学ぶことに他ならないと思う。

「温故知新」「稽古照今」「不易流行」などは剣道の世界で好んで

使われるが、言葉だけ唱えてみても何の役にも立たない。日々の修行の中に歴史・伝統・文化といった要素をどう捉えるかが重要である。

「歴史は繰り返す」である。試合のあり方や段位称号の問題、愛好者数の減少等々現代剣道は様々な問題に直面しているが、これら諸問題についても、歴史の中に様々な答えが見出せるはずである。今を誤らず、正しく道をつなぐために、剣道の歴史を学んでみよう。

I . 剣道の伝統

1. 剣術の発生

(1) 日本刀と剣術の発達

人類の歴史は、闘争の歴史であるといわれる。地球上に人類が生まれた瞬間から、21世紀の現在まで、人々は様々な戦いを繰り返してきた。また、人類の歴史は、道具の歴史であるともいわれる。生活のための道具の工夫とともに、闘争のための武器も様々な作り出されたのである。

そう考えると、剣道の歴史は、人類誕生とともにあるともいえる。ただ、日本人の祖先が日本列島に生活し始めたといわれる三万年～五万年前や、約一万年前の旧石器時代に、現代剣道の起源を求めることには無理があるだろう。

武器としての刀剣の原型は、弥生時代以降に大陸から輸入された金属器（銅剣・銅鉾・銅戈・鉄斧・鉄刀・鉄剣等々）であり、やがて我が国でもこれらの武器が製作されるようになった。

初期の刀剣は屈刀であったが、紀元1世紀ごろには、平造の直刀が多くなる。これは、斬るよりも突くことに適した武器であり、ま

た、柄や刀身の長さからして、片手で操作したものと考えられるが、その具体的な操作技術は明らかでない。

『日本書紀』(720年)には「^{たちかき}撃刀」、『懷風藻』(751年)には「^{たちうち}撃剣」の表現も見られるが、それがどの程度の技であるのか、その記述から推し量ることはできない。^(注1)

いずれにしても、この時代までの刀剣とその操作技術は、大陸からの影響を強く受けたものであり、我が国独自の剣術のルーツといえるものではないようである。

現代剣道の術理の起源といえるものが成立するのは、日本刀の出現以降だと考えるのが一般的な捉え方である。10世紀後半に誕生したといわれる日本刀は、「^そ反り」と「^{しのぎ}鑄」という特徴を持つ。この直刀から弯刀へ、平造りから鑄造りへの刀の構造的変化は、それまでの片手で突くという技に代わり、諸手で斬るという操作技術を生み出した。中国の青龍刀や西洋のサーベルなど片手操作の剣技とはまったく異なる日本独自の刀法の誕生である。

平安末期から鎌倉時代にかけて、源平合戦など相次ぐ戦乱の中で、日本刀とその操作技術には、様々な工夫が加えられ、やがて南北朝・室町時代(戦国時代)に飛躍的な発展を遂げる。

なお、南北朝・室町時代には、武者修行と呼ばれる廻国修行が盛んに行われた。これには、純然たる剣術修行の旅をする者の他、打ち続く戦乱の中で、禄を離れた者が仕官の口を求めて行う示威行動や敵情視察の隠密行動という目的を持つ者なども含まれるが、このような人の交流が、互いの剣技を磨き合い、やがて新たな流派を生み出す一つの原動力となったのであろう。^(注2)

(2) 流派の成立

一般に、合戦の場（集団戦）においては、先ず、弓矢の攻撃により敵の陣形を崩し、次に馬（騎馬武者）が敵陣を駆け回り、槍を突き入れる。刀は、その後の鎧組討において用いられるものであった。このような流れの中では、刀が最も優れた武器であったとはいえないし、「武芸十八般」（弓術・馬術・剣術・短刀術・居合術・槍術・薙刀術・棒術・杖術・柔術・捕縄術・三つ道具・手裏剣術・十手術・鎖鎌術・忍術・水泳術・砲術）^(注3)の中で、剣術が最も有効な戦闘技術だともいえない。

このような戦いの様子に、大きな転換をもたらしたのは鉄砲の伝来（天文3年、1543）である。長篠の合戦（天正3年、1575）の織田信長軍は、他に先駆けてこれを導入したことで知られる。

この後は、鉄砲による先制攻撃と軽装備の武者による白兵戦を中心とする戦術が広く用いられるようになった。これにより、合戦の場における剣術の存在が、以前よりも重視されるようになったことは間違いない。

鎌倉幕府成立から明治維新まで、700年近い武士の時代が続く中で、その前半約400年は、ひたすら戦に明け暮れた時代である。特に、応仁の乱（1467～77年）以降の戦国時代は、親子・兄弟が骨肉の争いを繰り広げる弱肉強食の時代であり、昨日の主従が今日は敵味方として戦う下克上の世の中であつた。

このような時代に生きた武士に求められたのは、武勇のみであるといってもよいだろう。力ある者のみが勝利者として生き残るのである。そこに戦法の研究と武術の鍛錬が極めて重要となったのである。

生死をかける戦場においては、自己の持つ全ての能力を発揮して

戦い抜くことが求められる。それゆえ、当初はあらゆる得物（武器）や手段を組み合わせて使いこなす総合武術として修練されていた。

しかし、徐々に各武術がより高度な技術内容を備えるようになったため、それぞれが分化した単一の武術として発達していった。その結果、14世紀の初頭には弓術（特に騎射術）の流派が確立された。やがて、14世紀末から15世紀初めには馬術、そして15世紀後半には剣術・槍術・柔術などの流派が誕生し始める。

剣術流派の先駆けとしては、下総国香取の飯篠長威斎いいざさちういさいが創始した天真正伝香取神道流、伊勢国飯南郡射和出身の愛州移香あいすいこうの陰流、鎌倉寿福寺じおんの僧慈音の念流を学んだとされる中条兵庫助の中条流の三つがあげられる。

さらに、16世紀になると、上記の三つを源流として、後世に名を残す剣客が多数現れ、それぞれ新たに流派を確立した。神道流系統では松本備前守（鹿島神流）や塚原ト伝ぼくでん（新当流）、陰流系統では上泉伊勢守信綱（新陰流）や柳生但馬守宗厳むねよし（柳生新陰流）、中条流の系統では鐘捲かねまき自斎じさい（鐘捲流）や伊藤一刀斎（一刀流）などが代表的な存在である。

2. 近世の剣術

（1）剣術の理論的深化

関が原の戦い（慶長5年、1600）に勝利した徳川家康は、征夷大將軍として幕府を開いた。その後約270年にもわたる江戸時代の始まりである。幕府は、「一国一城令」「武家諸法度」等々の法令を制定し、幕藩体制の確立に苦心したが、大坂冬の陣（1614年）夏の陣（1615年）島原の乱（1637年）など、当初は前時代からの緊

張感が続いていた。

家康は武芸を好み、柳生新陰流と小野派一刀流を将軍家の御流儀とした。また、三代将軍家光は特に武芸を好んだようである。各地の兵法者を招き、試合を観戦し、さらに、自らも剣術稽古に精力的に取り組んだと伝えられる。他の各大名もこれにならい武芸は大いに奨励された。大名家では、世に名の通った武芸者を召抱えたり、家臣の中から他家の者に勝る抜群の剣客が出ることを誇った。

この時代には、実戦の中で鍛え、試されてきた必殺の技に新たな工夫を施し、論理化・体系化が試みられ、剣術流派としての内容が飛躍的に進歩した。各流派では、精妙な形を作り上げ、体系的な指導法を確立した一方、流派の奥義を書き記した秘伝書も数多く作成された。

初期の代表的な剣術伝書としては、柳生但馬守宗矩^{むねのり}の『兵法家伝書』（寛永9年、1632）や宮本武蔵の『五輪書』（正保2年、1645）などがあげられる。

（写真1）



（写真1）兵法家伝書上巻序

（２）華法剣法としない打込み稽古の出現

江戸中期は剣術の衰退期である。三代将軍家光のころまでは、戦国時代のなごりが色濃く、武芸が大いに奨励されたが、四代家綱のころから、世の安定につれ尚武の気風も衰えていった。そして、五代綱吉の時代には、著しい文教政策や「生類憐みの令」（貞享４年、1687）なども影響し、武士は文弱華美へと流れていった。

また、このころ幕府は「他流との真剣や木刀による試合は、いたずらに人を殺傷し、遺恨を残す」ということで他流試合を禁止した。これにより、武者修行も含めた流派間の交流はなくなり、ひたすら自流の形を墨守するという消極的な修行姿勢を生み出してしまったのである。

実戦勝負の中で工夫された術理をもとに作り出された形稽古は、本来極めて有効な修行法であったはずである。しかし、泰平の世に泥み、修行本来の目的や姿勢を見失い、遊芸化した剣術稽古の様子、特にただ外見上の体裁を飾るように、むやみに数を増やし、奇をてらうような方向へと進んだ形稽古は「華法剣法」などと評された。

このような危機的状況を打開する新機軸として登場したのが「竹刀打ち込み稽古」である。「しない」の歴史は相当古いものである。初めのころは現在のような四つ割ではなく、細かく割った竹に革袋を被せた袋じないであり、戦国末期に新陰流の流祖上泉伊勢守信綱が、形稽古の際の安全を考慮して考案したものだといわれる。

また、防具についても形稽古に使用するものとして、綿入れ頭巾や籠手など各流派ごとに、早くから様々な工夫がなされていたようである。（写真２）

正徳年間（1710年代）、直心影流の長沼四郎左衛門国郷は、この防具に工夫を加え、形のような約束稽古ではなく、自由に打ち合う



(写真2) 一刀流の鬼籠手

竹刀打ち込み稽古（竹刀稽古・撃剣）を盛んに行なった。さらに宝暦年間（1750年代）には、一刀流の中西忠蔵がより改良した防具（ほぼ現代剣道の防具の原型といえるもの）を考案し、このころから、試合形式の竹刀稽古が急速に広まっていったようである。

その取り扱いは、流派ごとに違いがあり、伝統の形稽古に固執するもの、全面的に竹刀稽古に切り替えるものなどそれぞれであったが、やがて、竹刀稽古が完全に主流をなすようになり、江戸後期になると、竹刀稽古を中心とする新流も多数登場した。

(3) 武芸教育の振興（藩校と講武所）

元禄以降、土風は衰え、風俗は乱れ、華やかな町人文化が栄える

一方で、幕府の力はしだいに衰え、やがて幕末の動乱の時代へと世は移っていく。

このような情勢の中、諸藩は文武教育の充実による土風刷新と、藩政改革のための人材育成などを目的とした「藩校」を設立した。

その教育内容には、藩ごとに多少の違いはあるが、多くは、和学・漢学・洋学の文教育と、兵学・剣術・槍術・馬術・弓術・柔術・砲術など武教育であった。各藩校の記録からも、剣術が武教育の中心であったことは間違いないが、各藩とも砲術の訓練に相当な時間を割いていることは時代を反映したものだといえる。

19世紀に入ると、通商・開国を求める諸外国の動きがいよいよ活発なものとなってくる。諸藩は独自に海防に備えるなど「外圧」に対応した。同時に幕府の衰微の様子もあらわになる中で、嘉永6年(1853)のペリー来航以降は勤皇・佐幕・開国・攘夷と思想的対立も複雑で激しいものとなり、国中を動乱の嵐が吹き荒れる世情となっていた。(注4)

その中で、幕府も遅れ馳せながら武芸振興の具体的措置として安政3年(1856)に「講武所」を創設する。その設立の主たる意図は、諸外国の脅威に備え、様式砲術を調練することであったが、同時に剣術・槍術・水練などの教育にも力が注がれた。

剣術については、流派にはとらわれず、当代の実力者を教授方に登用するなど、精力的な取り組みを見せたが、幕府の衰亡とともに十年余りで幕を閉じることになった。

なお、当時竹刀の長さはまちまちで、中には筑後柳川藩の大石進のように六尺近い長竹刀を用いる者もいた。講武所で、竹刀の長さの上限を三尺八寸とするという「じょうすん定寸」を規定したことは、その後の剣道の技術や指導に大きな影響を及ぼすことになり、特筆すべき

ことである。

藩校や講武所がいわば公的な武術の教育機関であったのに対し、武士階級はもちろん一般庶民をも対象とした私的教育機関としての町道場の存在も無視できない。

幕末期には、他流試合の禁も解かれ、竹刀稽古による試合が盛んに行われただけでなく、道場破りといわれる者も現れるなど江戸の町を中心に町道場は活況を呈した。

中でも、神田お玉ヶ池・北辰一刀流千葉周作の「玄武館」、九段坂上・神道無念流斉藤弥九郎の「練兵館」、築地アサリ河岸・鏡心明智流桃井春蔵の「士学館」は江戸の三大道場（心形刀流の伊庭道場を加えると四大道場）と呼ばれるほどに発展した。

II . 剣道の展開

1. 近代の剣道

（1）明治維新と剣道

明治に入ってから約10年間、社会は目まぐるしく動いた。鎌倉以来700年近くに及ぶ武家社会が終わり、明治元年（1868）より日本は近代化の名の下に急速な改革を推進することとなる。

日本は、永い間の鎖国政策によって、欧米から大きく取り残されたが、この溝を埋めるべく、明治新政府は「文明開化」をスローガンに徹底した欧化政策を断行した。

そこでは、剣術をはじめ武術は武家社会・封建制度・旧体制を象徴するものであり、武士そのものと同様に無用のものとして扱われ、一気に衰退の極みに達したのである。

慶応2年（1866）の講武所廃止に続き、廃藩置県により藩校も廃止され、武芸の公的教育機関は姿を消した。さらに、脱刀令「散髪、制服、略服、脱刀共勝手事、但シ礼服ノ節ハ帯刀可致事」に続く廃刀令「自今大礼服着用並ニ軍人及ビ警察官吏等制アル服着用ノ節ヲ除クノ外帯刀被禁候、但シ違反者ハ其刀取上事」によって一般人の帯刀は禁止されたのである。

武士としての特権をすべて奪われ、なおかつ武士の誇りの象徴「武士の魂」である刀さえも捨て去ることを強要されたのである。多くの武士、中でも我が腕一本を頼りとして生きてきた剣術家達は「武士の商法」もまま成らず、苦しい生活を強いられた。そこに西南の役に代表される不平士族の乱が起こることも必然の道であり、そのことで結果として剣道に新たな光明が射すことともなったのである。

〔撃剣興行〕

幕末期にあって、剣術指南役・町道場主や師範・剣客などと呼ばれた者達はある意味では最も武士らしくその時代を生き抜いたのであるが、同時に多くは新しい時代に対応する適応力に欠けた存在であったのかもしれない。

その生活困窮の状態は目を覆うばかりであったようである。『傳記聚芳』に紹介された榊原鍵吉の生活の様子は、その後撃剣興行を興すに至る事情が読み取れて面白い。

「鍵吉の俠気は誰知らぬ者がなかった。明治後幕臣を初め其の他諸藩の人達で禄に離れて困って居る者が、続々と鍵吉の許を頼って集まった。……中略……明治前は鍵吉も旗下として僅かではあるが三百俵幕府から禄を賜って居たが、明治後は其の禄も全然なくなり、弟子は道場にゴロゴロして居る故、其の生活の苦しきは一方ならぬものであった。」

このような状況下に生まれたのが撃剣興行である。榊原は、撃剣（剣道）の興行化を企画申請し、許されるや明治6年4月11日から10日間、浅草左衛門河岸において「官許撃剣会」と銘打って興行し、大盛況を博した。その概要は、以下の項目をみると大体理解できるところである。

規則大略

- 一、入関錢ハ金一朱ヲ定額トシ、一時モ一日モ同ジ。
- 一、試合編入ヲ望給フ賓客ハ、前日名刺ヲ通ゼンコトヲ請フ。
- 一、試験十日ヲ度トシ等級ヲ評定ス、但竹刀三尺八寸ト定ム。
- 一、試合稽古ハ朝六時ヨリ午前十時ヲ限トス。
- 一、稽古諸道具貸料三百文。



(写真3) 榊原撃剣会の図

江戸時代を通して、剣術は武士の表芸であり、大方の人々にはほとんど無縁のものであり、実際の稽古の様子を目にすることなど皆無であった。入場料は安くはないとはいえ、当代一流の剣客の試合を目の当たりにできるとなると、人々が押し寄せたのも無理はない。

(写真3・4)

また、榊原撃剣会の成功により、これに追随する剣客も少なくなく、東京のみならず全国各地で同様の興行が催されるいわば一大ブームが巻き起こることになる。

さて、撃剣興行の果たした役割とその評価はというと、先ずは所期の目的である剣客達の生活困窮状態の打開策としては、興行の大成功により、一時的なものとはいえ十分な成果を上げたであろう。しかし、この興行が果たした役割の重要性はさらに別な所にある。

即ち、維新からわずか数年の内に社会からほとんど忘れ去られた



(写真4) 榊原撃剣会の図

状態にあった剣術に人々の目を向けさせたことである。もしこの興行が成立せず、あと数年を過ごしていたなら、明治の世の中から剣術が完全に消滅するということになりかねなかったとは、まんざら誇大な表現とはいえない。その意味では、撃剣興行は結果として、江戸の剣術を明治の新時代に「橋渡し」する重要な働きをしたといえる。

その一方で、武士の誇りと権威の象徴であった剣術を見せ物扱いし、また客に媚び、奇抜な演出（異様な掛け声や派手な引き上げ）により撃剣芝居と酷評される興行も現れる。撃剣興行が、剣術の本質を歪め、その後の「当てっこ剣道」「スポーツ剣道」への流れを作ってしまったのだといわれるマイナス要素をはらんでいたのも事実である。

撃剣興行をめぐるのは、この功罪両論が存在するが、どちらも剣道の歴史の一ページであり、そのいずれもが現在の剣道を作り上げたのである。戦後のしない競技とともに、急激な社会情勢の変化が産みだした剣道の一つの姿だと理解すべきであろう。

〔警視庁剣道〕

現代剣道の中心的存在の一つとして、警察組織における取り組みと多くの警察官剣士・指導者の存在がある。その原点となったのが一連の不平士族の乱、取り分けて西南の役における警視庁抜刀隊の活躍である。当時の警視庁大警視川路利良は、警視庁首脳部に対して、「撃剣再興論」を草して、西南の役における抜刀隊の活躍を称え、その上で警察官の育成には剣術が必要不可欠であることを力説した。

(注5)

これが、警視庁において剣術を採用するにあたっての、理論的根拠の中心となったのであるが、その一方で、京都府知事榎村正直が

「撃剣技術ハ無用ニ付論達ノ件」として示したものに代表される「剣術有害論」も根強く存在した。^(注6)

撃剣（剣術）を無用かつ有害とする槇村の論達は、当時の明治新政府が積極的に導入した欧米の合理主義に沿ったものである。世の流れとしては、剣術の存在意義を再評価する方向に進みつつあったとはいえ、新しい時代における剣術の社会的位置づけや評価の微妙な部分を象徴しているようである。事実、その後の剣道の正科導入運動の際に文部省が打ち出す方針と、槇村の論は大きく重なるものであった。

（２）近代剣道の興隆

剣道にとって、明治の前半期は時代の大きな波の中でその存在を暗中模索した時代であったとすれば、後半期は新しい時代における位置づけを確固たるものにするための足固めの時期であったといえよう。

〔大日本武徳会〕

その中で、明治28年（1895）に設立された大日本武徳会の果たした役割は極めて大きいといえる。

この時期、維新から二十年を経て、内政外交とも様々な課題を残しつつも、日本は立憲国家としての第一歩を踏み出した。同時にそれは、次第に国家主義的色彩が色濃く表れ始める時期でもある。

日清戦争（明治27年、1894）は、日本国民のナショナリズムを駆り立て、富国強兵策と相まって、武道への関心は大いに高まった。

平安奠都千百年目に当たるこの年、総裁に小松宮彰仁親王をいただき、会長に京都府知事渡辺千秋、副会長壬生基脩（平安神宮宮司）をもって大日本武徳会は結成された。

その趣意書には、桓武天皇が平安遷都に際し、大内裏に武徳殿を建て武道を奨励し、武徳によって世を治めたるに倣い、維新以来衰退の状況にある武道を再興し、国民の志気を涵養せんとの趣旨が述べられている。

武道の奨励・普及・指導・大会の開催・武道家の表彰など、幅広く武道の普及発展に寄与した武徳会であるが、中でも指導者の養成に力を注いだ点は特筆すべき事柄である。武徳会が明治38年に設立した武術教員養成所(その後、度々改称し、最終的には武道専門学校)は東京高等師範学校とともに、その後の剣道界をリードする指導者を多く輩出することとなる。

〔剣道形の制定〕

また、武徳会においては、剣道の普及発展に欠くことのできないものとして、流派の枠を超えた共通の形の制定に取り組んでいる。渡辺昇を主席とする委員会の検討により、上段(天)・中段(地)・下段(人)からなる「大日本武徳会剣術形」が発表されたのは明治39年(1906)のことである。しかし、この形には異論も多く、結果的に全国に普及するには至らなかった。

その後、剣道の学校体育への正科導入の決定もあり、統一的な形の制定が急務とされるに至る。そこで武徳会は、剣道形制定委員を選定し、根岸信五郎・辻真平・内藤高治・門奈正・高野佐三郎の五名の主査の下、大正元年(1912)に太刀七本、小太刀三本からなる「大日本帝国剣道形」制定した。これが、その後解釈上の問題で解説書に加註・増訂を施しつつも、現代に「日本剣道形」として受け継がれることとなるのである。

(3) 学校教育と剣道

文明開化の名の下、明治初期の剣術をはじめとする武術の衰退は目を覆わんばかりのものであったが、西南の役における警視庁抜刀隊の活躍などをきっかけに、徐々に剣術を取り巻く環境に変化が見られるようになってきた。それは、明治新政府のとった極端な欧化思想への傾斜の姿勢に対する反発や反省の現われであるともいえよう。

このことは、学校教育の場においても如実に現れてくる。明治12年には、早くも学習院に剣術道場が建設され、同じ年、福山誠之館中学においては授業科目の一つとして剣術が採用されており、この他にも、各地の中等学校や師範学校において、剣術を学校教育の一環として位置づける動きが見られるようになる。

さらにこの動きに拍車をかけたのが明治15年(1882)の嘉納治五郎による講道館の開設とその後の柔道の急速な普及発展であることは間違いのないところである。

〔剣道の正科導入運動〕

このような武術復活の気運の高まりに対し、文部省としても具体的な対応を迫られることとなる。

体操伝習所は、アメリカ人リーランドを招聘し、学校教育の中に近代的体育を確立することを目的に明治11年(1878)に設立され、日本の学校体育の基礎を築き上げたのであるが、文部省はその伝習所にこの問題の調査研究を命じた。

明治16年実施の「撃剣・柔術の教育上における利害適否」の調査結果は以下のように整理される。

二術の利とする方

1. 身体の發育を助く。

2. 長く体動に堪ふる力量を得しむ。
3. 精神を壮快にし志気を作興す。
4. 柔情の風姿を去りて剛壯の資格を収めしむ。
5. 不慮の危難に際して護身の基を得しむ。

害若くは不便とする方

1. 身体の發育往々平等均一を失はん。
2. 実修の際多少の危険あり。
3. 身体の運動適度を得しむること難く強壯者脆弱者共に過劇に失し易し。
4. 精神激し易く、ややもすれば粗暴の氣風を養ふべく。
5. 争鬭の念志を盛にして徒らに勝を制せんとの風を成じやすし。
6. 競進に以て却て非なる勝負の心を養ひがちなり。
7. 演習上每人に監督を要し、一級全体一斉に授けがたし。
8. 教場の坪数を要すること甚大なり。
9. 柔術の演習は単に稽古着を要するのみなれども、剣術は更に稽古道具を要し、且常にその衣類道具を清潔に保つこと、生徒の業には容易ならず。

右等の事実を得て、伝習所に於ては之れを教育上の理論に照らし、断定を下せしこと左の如し。

1. 学校体育の正科として採用することは不適當なり。
2. 慣習上行はれ易き所あるを以て、彼の正科の体操を怠り、専ら心育にのみ偏するが如き所に之れを施さば、其利を収むることを得べし。(明治23年文部省発行「本邦学校体操科沿革略」)

すなわち、撃剣・柔術を学校の正科として導入することは不適當であるとの結論である。これは当時の医学・生理学的見地にに基づく体育観そのものの表れであり、体育とは「身体を強健にする」もの

であるという大前提が存在している。それからすれば撃剣・柔術は、身体の発育に「平等均一性」が欠け、「過激・危険」である。さらに、「粗暴」な振る舞いや「徒に勝を制せんと」するあまり「非なる勝負の心」を養うことになりかねないというのである。

これに加えて、衛生管理の問題や施設用具などの経費の問題まで取り上げれば、容易に肯定されるものではない。

なお、もう一点重要な課題として残されるのは、「一斉指導に不向きである」ということである。古来、武道の教習は、師匠と弟子の一对一の関係で成立したものであり、集団指導を原則とする近代体育の実情にはそぐわない面を持っていた。これについては、その後体育としての指導法の確立を目指し、多くの指導者が懸命に取り組むこととなる。

その一例として、武術を「体操化」とするという試みがなされている。この発想は、第二次大戦後のしない競技の考案のモデルとなるものとも考えられるのではないだろうか。明治29年、橋本新太郎が著した『新案撃剣体操法』や30年の『新式武術体操法』（小沢卯之助）など多くの指導書も出版されており、武術としての本質を維持しながらも、児童生徒の発育発達に効果の高い全く新しい「体操」としての位置づけに苦慮する様子が窺える。

明治27～28年の日清戦争の勝利とその後の三国干渉は、日本国民のナショナリズムの高揚とその延長上に尚武の気風の高まりをもたらすこととなる。28年には大日本武徳会が設立され、また各地で撃剣柔術大会が開催されるようになった。さらに、武道を随意科として採用する中等学校・師範学校も急速に増加する。

このような社会情勢と世論を受けて実施された明治29年の学校衛生顧問会の調査の答申もまた「満16歳以上の強壯者に限り正課

外に行はしむるは可なれども随意科とするは不可なり」というものであり、先の体操伝習所の答申と大差あるものではない。

また、有志による国会への請願運動も、この明治29年の第10帝国議会への請願書提出以来、弛まぬ努力が展開される。その中心となった人物としては、民間では柴田克己（長野県）・小沢一郎（茨城県・水戸東武館二代目）、議員では星野仙蔵（埼玉・衆議院）・小沢愛次郎（埼玉・衆議院）などがあげられる。

さて、一連の請願運動が結実するのは明治41年（1908）第24帝国議会における建議案の可決、明治44年（1911）の改正師範学校規程・中学校令規則の発布まで待たねばならない。

師範学校規程第24条

体操ハ体操、教練、遊戲及競技トシ、且ツ教授法ヲ授クベシ。男子ニツキテハ体操中、剣道及柔道ヲ加フルコトヲ得。

中学校令施行規則第13条

体操ハ教練及体操ヲ授クベシ。又撃剣及柔道ヲ加フルコトヲ得。

いずれも「加フルコトヲ得」であり、剣道・柔道の正科必修化を示すものでなく、随意科としての扱いの域を一步も出ないが、明治10年代からの運動の成果がはじめて形になって表れたのである。

その後も事実上随意科としての扱いに変化はなかったが、満州事変勃発の年である昭和6年（1931）の中学校令施行規則において、はじめて正科必修の扱いが明示されることとなる。

日本が世界戦へと向かう状況下において漸く、「質実剛健なる国民精神を涵養し、心身を鍛錬するに適切なを認めたる」とされた辺りに、大戦後の武道の禁止を暗示させるというのは少々うがった見方であろうか。

昭和12年（1937）の日華事変を境に、日本全体が軍国主義へと

傾く中、「体錬科武道」が形作られることになる。17年、体錬科は体操と武道の二本立てとなり、武道は五年生以上の男子に必修となった。また、剣道の教授内容においても、「打突」は「斬突^{ざんとつ}」と改められるなど、旺盛な気魄・攻撃精神を強調する戦時色が色濃く表れたものであった。

2. 戦後の剣道

(1) 禁止と復興

昭和20年(1945)8月、日本の全面降伏により、第二次世界大戦は終結する。これにより、日本は占領軍の統治下に置かれることとなった。

連合国最高司令官総司令部(GHQ)はマッカーサー元帥を最高司令長官として、日本の国家主義・軍国主義思想やその体制除去にあたったのであるが、特に「学校教育の場から、封建的日本を排除すべし」の指示の下、武道とりわけ剣道は極めて厳しい立場にさらされることとなる。

文部省は終戦直後から次々と訓令・通牒を発し、戦時色の払拭に努めた。特に体錬科武道の取り扱いについて、最高司令部民間情報教育部(CIE)との折衝を繰り返し、

国民学校では武道の取り扱いを中止する。

中等学校以上では課外活動とし、正課の扱いは中止する。

という最終案を提示したが、受け入れられず、昭和20年(1945)11月6日、「文部次官通牒(発体80号)」によって、学校における剣道は禁止されたのである。

戦後の民主日本の再生・教育改革の動きの中にあって、柔道・剣道・

弓道を中心とする武道関係者は、文部省や CIE への陳情・嘆願を繰り返し、武道の復活への道を模索し続けた。しかし、昭和22年（1947）極東委員会の「日本教育制度改革に関する指令」が発表され、「剣道のような精神教育を助長するような昔からの運動もすべて廃止せねばならぬ」とされるに至り、剣道存続への道は完全に閉ざされることとなった。

〔しない競技〕

終戦後、一時中断を余儀なくされた剣道であるが、竹刀の音が全く途絶えてしまうことはなかった。戦後の混乱期にあって、食料確保もままならぬ状況下で、人目を憚りつつも各地で有志の稽古は続けられており、その中から復活への新たな取り組みが始まったのである。

まず、昭和23年（1948）年5月23日には関東配電本社道場にて、フェンシング並びに剣道交歓試合と称する大会が催されるなどの動きが始まっている。そして、翌24年9月には東京の学生連盟 OB を中心とした「東京剣道倶楽部」が誕生し、新剣道としてのスポーツ剣道についての研究が進められた。

その結果として考案されたのが「しない（撓）競技」である。従来の剣道の運動形式を基礎に、スポーツ化を強調した内容は以下のようなものである。

1. 使用する撓は従来の四つ割の竹刀と異なり、全長の先の方の三分の一は三十二本、次の三分の一は十六本、次は八本というように細かく割り、その全部或いは鍔から上を、布、革などで包んだ。
2. 防具は軽装で感覚的にもスポーツ的なものとし、殊に費用を安くすることに主眼をおいた。

3. 稽古着、袴の必要はなく、シャツ、ズボンを使うこととした。
4. 競技は一定の制限された区域内で行う。
5. 競技は時間制を採用し、一定時間内で得点の多少で勝負を決めることとした。
6. 一定の行為を反則とし、反則者には罰則を科すこととした。
7. 足捌み、体当たり、自然発生的以外の掛声を禁止した。
8. 審判制を合理化するため三人制とし、その多数決によって採否を決定することとした。(写真5)

こうして作り上げられた「しない競技」では、全国組織の「全日本しない競技連盟」も結成され(昭和25年)、大会や研究会の開催など精力的な普及活動に努め、ついに昭和27年(1952)には、中学校・高等学校の正科として採用されるに至った。



(写真5) 撓競技の防具

その後、昭和28年(1953)から、高等学校以上の学校において剣道が実施できるようになり、次いで昭和32年(1957)には、しない競技と剣道を統合した「学校剣道」となった。その結果、しない競技は剣道復活の過程における最も重要な存在としての役割を終え、やがて姿を消すこととなる。

(2) 現代剣道の発展と課題

昭和27年（1952）、全日本剣道連盟が結成された。翌28年には京都大会（現全日本剣道演武大会）、全日本都道府県剣道大会、全日本剣道選手権大会を開催するなど一気に剣道復活の動きが活発となっていた。

昭和39年（1964）には、東京オリンピックが開催されるにあたり、柔道が正式競技種目として採用されたのと同時に、剣道は弓道・相撲とともに日本武道館でデモンストレーションとして演武を披露した。

ここにおいて、剣道は柔道をはじめ他の武道とともに世界に認知されたといつてよいであろう。その後の国際剣道連盟 International Kendo Federation（略称 IKF）の結成（昭和45、1970年）をはじめ、剣道の国際的発展は周知の通りである^(注7)。

昭和40年代以降、剣道は一種のブームを呼び、競技人口も飛躍的に増大（2007年3月現在の有段者登録人数は約147万人）した。各種大会も多数開催され、発展の一途をたどったかに見える。

しかし、そこには競技偏重・勝利至上主義の蔓延、商業主義の介在、国際化への課題等々が浮かび上がり、「剣道の本質や如何に」を明らかにする必要に迫られることとなった。

昭和50年（1975）全日本剣道連盟は、「剣道は、剣の理法の修錬による人間形成の道である」という「剣道の理念」を制定した。人間形成の道という表現に、剣道のあるべき方向性や伝統文化としての存在意義が集約されているのであるが、問題は一人一人が日々の稽古修行の中で、いかにしてそれを具現化していくかである。

多様化の時代といわれる21世紀、剣道に対する評価や認識も全く同様で、剣道を愛好する者が、それぞれの価値観に基づいた取り

組みをすることが求められる時代である。各自の「ニーズ」にあった剣道が存在してよい時代である。そのような時代だからこそ、剣の理法を正しく受け継ぐその過程を大切にして、自己を磨くことが求められるのであろう。

おわりに

これまでみてきたように、現代剣道は、闘争の術として誕生し体系化された剣術が、平和な時代の到来とともに「殺傷の術理」から「人間形成の道」へと発展昇華したものである。

この歴史的経過と、術理や思想の伝承内容を合わせて剣道は「伝統文化」であるといわれるのである。

今日、「スポーツ化」の名で表現される剣道の実態は、はたして「道」や「人間形成」そして「伝統文化」の名にふさわしいものだといえるのだろうか。

剣道の永い歴史の中では、社会の情勢に翻弄され、あるべき姿を見失ったと思われる時代もある。今我々が、剣道はいかにあるべきかをしっかりと見極め、正しく次代に伝えていかなければ、やがて剣道は「道」や「人間形成」「伝統文化」などとはかけ離れたものになってしまうのではないだろうか。

試合に勝った負けた、昇段したと一喜一憂するだけの剣道でいいのだろうか。勝負や段位などは修行の一過程であり、一断片である。先達が我々に遺した「剣の道」とはいかなるものか、よく噛み締めながら日々精進したいものである。

《本文注》

(注1)『日本書紀』崇神紀四八の条に、

崇神天皇の皇子豊城命が夢の中で御諸山に登り、東に向って八回弄槍し、八回^{ほこゆげ}撃刀した、という記述がある。

(注2)『甲陽軍鑑』には、「つか原ぼくでんは、兵法修業仕るに大鷹三もとすゑさせ、のりかへ三疋ひかせ、上下八十人計召つれありき、兵法修行いたし、諸侍大小共に貴むやうに仕なす。ぼくでんなど、兵法の名人にて御座候」とある。これなどは、かなり誇張されているように思うが、当時の修行者にとって、武者修行がいかに重要なものであったかを知る逸話の一つであろう。

(注3) 武術・武芸のうち、その主たるもの18種類をいう。その種目は時代や撰者により、多少の異同はある。なお、三つの道具は突棒^{つくぼう}、刺股^{さすまた}、袖搦^{そでがらみ}をいう。

(注4) 当時の落首「泰平の眠りをさます上喜撰（蒸気船）たった四はい（四隻）で夜もねむれず」などには、幕府と江戸庶民の混乱の様子がよく描かれている。

(注5) 川路利良の「撃剣再興論」（抜粋）

一、維新以来殆ど無用ニ属スルガ如クニシテ、一般功験ヲ顕スモノハ日本刀ノ接戦也。予此術ヲ再興シテ弥盛ニセン事ヲ希望ス。今迄撃剣ハ開明ノ国ニ於テモ当時専ラ修練スル所也。今我国之ヲ廃スルモ自然再興セザルヲ得ザルベシ。然ル時ハ吾美玉ヲ棄テ、他ノ瓦片ニ易フルモノ也。惜マザルベケンヤ。

一、巡査ハ文筆ヲ以テ直チニ大政ニ参与シ、四方に指揮スルノ素志ニアラズ。平常一身ヲ以テ事ニ当リ、国ニ報ズル赤心アレバ自然昇進スルト。斯道ヨリ外ニ近道ナキモノ故ニ、総ジテ剣客トナルモ決シテ開化ヲ妨グルノ害ナシトス。

一、巡査ハ平生現場一身ヲ力道シテ事ニ当ルモノナレバ、剣客ノ如キ常ニ身ヲ鍛練セル者ヲ用フベシ。

(注6) 榎村正直

「撃剣技術ハ無用ニ付論達ノ件」

近来往々撃剣之技行ハレ候處、右ハ目今文化之日ニ方リ、功ヲ成ス可キモノニ非ス。却テ人心ヲ傲慢過激ナラシムルヲ以テ、輒モスレバ人ヲ傷ヒ其身ヲ誤ルノ具トナリ易ク、諺ニ曰フ、ナマ兵法ハ大疵ノ基ナリ。況ンヤ人身中ノ最も大切ナル、精神ノ府タル脳髓ヲ打チ擲キ、呼吸の原タル胸部或ハ咽喉顔面等ヲ突衝シ、妄リニ身体ヲ飛躍シ、短氣息迫ノ苦痛ヲ凌キ、努声ヲ発スル等甚タ健

康ニ大害アリ。故ニ此ノ如キ有害ノ事ニ貴重ノ時日ヲ費シ、心志ヲ苦シメ身体ヲ勞センヨリ、寧ロ他ノ職業ニ従事勉勵セバ、只其一身一家ノ修斉ノミナラズ、汎ク国ノ益トナルヘシ。各宜シク此意ヲ解了シ方向ヲ誤ルコト勿レ。右之通管打無洩論達スル者也。

(注7) 国際剣道連盟 International Kendo Federation では設立以来、IKF の略称を使用してきたが、2006 年 5 月これを FIK に改めた。

《主要参考文献》

- 『剣道百年』 庄子宗光著時事通信社 1956
 『現代剣道講座第 1 巻剣道の歴史』 中野八十二監修、坪井三郎・中林信二著百泉書房 1971
 『剣道の復活』 原園光憲著書房高原 1972
 『史料近代剣道史』 中村民雄著島津書房 1985
 『財団法人全日本剣道連盟三十年史』 全日本剣道連盟 1982
 『一つの戦後剣道史』 山本甲一著島津書房 1998
 『傳記聚芳』 玉林晴朗著日本青年教育会出版部 1942

《剣道歴史年表》

年 代	剣 道 関 連 事 項
10 世 紀 後 半	反りと鐔をもつ日本刀が出現。
平治 1 (1159)	源義経、鞍馬山僧正ヶ谷で鬼一法眼に剣を学んだといわれる。
弘和 4 (1384)	中条兵庫助長秀、將軍足利義満に召され剣道師範となる。
応永 15 (1408)	僧慈音、信州波合に長福寺を建立、念大和尚と称す。
文正 1 (1466)	愛洲移香、陰流を開く。
大永 2 (1522)	塚原卜伝、新当流を開く。
享禄 2 (1529)	上泉伊勢守、愛洲移香より陰流を授かる。
永禄 8 (1565)	柳生宗厳、上泉より一国一人印可を授かり、柳生流を創始。
天正 4 (1576)	伊藤一刀斎、一刀流を創始。
文禄 3 (1594)	徳川家康、柳生石舟斎・宗矩父子に起請文を差し出す。
寛永 9 (1632)	柳生但馬守宗矩、「兵法家伝書」を著す。
正保 2 (1645)	宮本武蔵、「五輪書」を著す。
天和 2 (1682)	伊庭是水軒、心形刀流を開く。
正 徳 年 間 (1710 年 代)	直心影流の長沼四郎左衛門国郷、防具を工夫改良、面・小手を用いた稽古を始め、これが大いに流行。

宝 暦 年 間 (1750 年 代)	一刀流の中西忠蔵、防具をさらに改良し、ほぼ現代剣道の防具の原型が完成。竹刀防具を用いた試合剣術を始める。
寛政 4 (1792)	幕府は武芸奨励の令を発布。
文政 5 (1822)	北辰一刀流、千葉周作が「玄武館」を開設。このころ、町道場が隆盛。
安政 3 (1856)	幕府は築地に講武所を創設。剣術師範として男谷精一郎信友が就任。
明治 4 (1871)	廃藩置県、散髪脱刀勝手の令発布。
明治 6 (1873)	榊原健吉、浅草左衛門河岸で撃剣興行。
明治 7 (1874)	警視庁設置。佐賀の乱。
明治 9 (1876)	廃刀令の公布。神風連の乱(熊本)、秋月の乱(福岡)、萩の乱(山口)など不平士族の反乱が相次ぐ。
明治 10 (1877)	西南の役。警視庁抜刀隊の活躍でこれを鎮圧。剣術が再認識される。
明治 12 (1879)	警視庁大警視川路利良、「撃剣再興論」を発表。その後警視庁は武術世話係りを採用。 学習院で剣道道場建設。榊原健吉が指導にあたる。また、福山誠之館中学でも剣術を採用。
明治 13 (1880)	京都府知事榎村正直、「撃剣無用」の論達。
明治 16 (1883)	文部省、体操伝習所に対して、「撃剣・柔術の教育上における利害適否」の調査を諮問。
明治 17 (1884)	体操伝習所は、撃剣・柔術の学校採用は時期尚早との答申を出す。
明治 28 (1895)	大日本武徳会創立。このころ、日清戦争による尚武の気風の高まりから、各地で武術大会が盛んに催される。
明治 29 (1896)	文部省、学校衛生顧問会に「剣術及び柔術の衛生上における利害適否」の調査を諮問。同会議は、15 歳以上の強壯者に対する課外運動としてのみ可と認める。 小沢一郎・柴田克己など、第 10 帝国議会に「撃剣を各学校の正課に加ふるの件」請願。その後、度々国会への請願は繰り返される。
明治 35 (1902)	大日本武徳会、「武術家優遇例」を定め、範士・教士の制を設ける。
明治 38 (1905)	大日本武徳会、武術教員養成所を開設。その後、武徳学校・武術専門学校・武道専門学校と改称。
明治 39 (1906)	大日本武徳会剣術形を制定。
明治 44 (1911)	「中学校令施行規則」一部改正により、撃剣及び柔術が正課として体操科の中に加えられる。
大正 1 (1912)	大日本帝国剣道形が制定される。
大正 2 (1913)	京都帝国大学主催、第 1 回全国高等専門学校剣道大会が開催される。このころより、大学主催の剣道大会が盛んに行なわれる。
大正 7 (1918)	武術家優遇例を武道家表彰例と改称。
大正 13 (1924)	第 1 回明治神宮競技大会において、剣道大会も開催。
大正 14 (1925)	第 50 議会において、武道が中学校の必修独立科目として可決される。
昭和 6 (1931)	「中学校令施行規則」が改正され、柔道・剣道がはじめて科目となる。「師範学校規程」が改正され、武道を尊重すべき旨がうたわれる。
昭和 9 (1934)	武道家表彰例が改正され、新たに錬士を設ける。 済寧館において、皇太子殿下御誕生奉祝天覧武道大会が開催される。

昭和 12 (1937)	学校教練教授要目改正。 国民精神総動員実施要領を閣議決定。
昭和 13 (1938)	日独伊親善のため、学生武道使節団（剣道 6 名、柔道 6 名）をドイツ・イタリアへ派遣。
昭和 14 (1939)	「小学校武道指導要目」制定。小学校 5 年生以上男子児童に対し、武道が準正課となる。
昭和 15 (1940)	国民体力法発布。
昭和 16 (1941)	「国民学校令」公布、体操科は体錬科となり、剣道は体錬科一種目として必修となる。
昭和 20 (1945)	「終戦に伴う体錬科教授要綱取扱に関する件」が発せられ、学校における武道は、課外も含めて全面的に禁止される。 「学校体錬科関係事項処理に関する件」の通牒により、学校敷地内での武道は、学生一般人を問わず全面禁止となる。
昭和 21 (1946)	大日本武徳会の自主解散は認められず、文部省より解散命令が下される。
昭和 23 (1948)	フェンシング並びに剣道懇親大会が関東配電本社道場で開催される。
昭和 25 (1950)	全日本撓競技連盟創立。新しいスポーツ剣道として、撓競技が誕生した。
昭和 27 (1952)	全日本剣道連盟結成。
昭和 28 (1953)	第 1 回全日本剣道選手権大会を蔵前国技館で開催。 全日本学生剣道連盟結成
昭和 32 (1957)	全日本実業団剣道連盟結成
昭和 36 (1961)	全日本学校剣道連盟結成
昭和 39 (1964)	日本武道館落成。オリンピック東京大会のデモンストレーションとして武道（剣道、弓道、相撲）の演武が日本武道館で行なわれる。尚、柔道は東京大会から正式種目として採用される。
昭和 45 (1970)	国際剣道連盟（IKF）が結成され、第 1 回世界選手権大会が開催される。

■剣道についての主な文献

- 『剣道』高野佐三郎 1915 初版発行、島津書房 1982 復刻新版発行
近代剣道指導者にとってのバイブル的存在となった一冊。剣道の術理、指導法、歴史等々を網羅的に解説している。特に、明治 44 年に中学校の正科としての取り扱いが決定されたこと受け、剣道の位置づけや指導のあり方を方向付ける存在となったものである。
- 『大日本剣道史』堀 正平 1934 初版発行、体育とスポーツ出版社 1985 復刻新版発行

剣道の発生から昭和初期までの通史とともに、流派と代表的剣士を地方別に整理し解説している。

- 『現代剣道講座第1巻 剣道の歴史』中野八十二監修 坪井三郎・中林信二著 百泉書房 1971

剣道の歴史事象を追うだけでなく、その背景となる社会の変化に論及している。剣術から剣道へと変化する過程や、剣道の社会的位置づけについて詳しく論じられている。

- 『剣道五百年史』富永堅吾 百泉書房 1972

膨大な資料の徹底検証に基づく剣道歴史研究の大著。用語の規定に始まり、各時代の流派と代表剣士、伝授の実態、道具の変遷等々細部にまで論及している。

- 『史料 近代剣道史』中村民雄 島津書房 1985

明治以降の剣道の変遷を知る上で重要なもの。大日本武徳会、剣道の正科編入請願運動、剣道試合審判規則、形、称号段位制度と現代剣道の基礎となる事柄について史料に沿って解説が加えられている。

- 『剣道講話 正眼の文化』井上正孝 講談社 1981

剣道の本質は人間教育との視点から、指導者のあるべき姿について論及している。また、術語・用語について踏み込んだ解説がなされている。

- 『剣道と人間教育』井上正孝 玉川大学出版部 1994

剣道の特性について、精神的側面・身体的側面・頭腦的側面・教養的側面から論述。また、剣聖の垂訓として採り上げられた事柄は、何れも現代剣道を学ぶ者にとっても金言として心に響く内容である。

- 『人を育てる剣道』角 正武 日本武道館 2006

剣道は教育であるとの信念に基づき、入門期から鍛錬期、そして成熟期へと進む中でいかに修行すべきかを具体的に論及したもの。冒頭の勝利至上主義は「百害あって一利なし」ですの一行に著者の剣道観と問題意識が集約されている。

第 3 章

なぎなたの歴史とその精神

アレキサンダー・ベネット

は じ め に



日本の伝統武道は世界中に愛好者がいる。実は、武道は日本の文化輸出品の中で最も成功している例であろう。柔道、剣道、空手道などに比較したら、なぎなたはまだまだ国内外においてもマイナーな武道といわざるを得ないが、1000年以上の歴史を有した貴重な文化遺産であることは否定できない。

その長い歴史の中で、なぎなたは武芸として3回ほど絶滅の危機に瀕している。順番にいうと、①戦国時代に、一騎打ちから集団戦略に変化させた槍と火縄銃の導入②明治維新後の近代化に伴う伝統武術の拒否③最後に、第二次世界大戦後の「武道禁止令」によるものであった。しかし、なぎなたは各時代の社会的事情に沿って進化し続け、現在、全日本選手権大会、国民体育大会、世界大会などが開かれるなど「競技スポーツ」の面と、稽古、試合などを通しての「人格形成の道」として、国内はもとより世界中の多くの老若男女に愛される「生涯スポーツ」の面としての両面相まって普及し、今日に至っている。

この章では、薙刀が人を殺傷する戦闘技術から、近代的なスポーツに進化してきた過程を考察する。概要を三部に分ける。第一部の「薙刀の伝統」では、明治までの薙刀の歴史的な流れを描く。第二部は、明治以降「薙刀の近代化への展開」を探り、明治後期から教育制度への薙刀の導入、第二次世界大戦と薙刀の必修化、戦後の武道禁止令と戦後の「新しいなぎなた」の誕生と、学校教育について考察する。第三部「なぎなたの特性」では、競技としてのなぎなたとその特性や、修練から得られる心身の利得について触れることにする。

I. 薙刀の伝統

1. 起源と薙刀の構造

「薙刀（なぎなた）」という武器が史料に現れたのは、平安時代中期頃からである。『本朝世紀』（1146年）の条に、「奈木^{なぎ}奈多^{なた}」で示されている。平安時代から室町時代までは「長刀^{ながなた}」という文字が一般的であったが、室町時代以降、七尺に及ぶ「長刀^{ながなた}」と区別するために、敵やその馬を「薙ぎ払う」という動作を表現し「薙刀^{なぎなた}」が頻繁に使われるようになる。『和漢三才圖會』（1712）にも「奈伎^{なぎ}那^な太^た」という字で表されたが、稀な例である^(注1)。戦後になってからは、文部省の指導によって古流薙刀術以外は、競技名称と武器のどちらも平仮名で「なぎなた」と書くことになっている。

薙刀の起源については、異なる説があり必ずしも定かではない。中国の武器が元であったとする学者もいるが、一般的に日本独特の武器だと考えられる^(注2)。初期に登場した薙刀らしき武器として、例えば、北九州地方の筑紫長刀^{つくしなぎなた}がある。木製の柄に反りのある刃（おおよそ58cmの長さ）を取り付けた単純な武器であった。さらに原型としてあげられる鉈長刀^{なたなぎなた}は、木製の柄に刃を差し込んで取り付ける武器であったが、農民兵の農具兼武器として機能していたと考えられる。証明することは困難であるが、手鉾^{てほこ}という奈良時代に発達した武器から変化したとも推測できる。手鉾は比較的短く軽い武器で、奇妙な形をした刃が太い木製の柄にはめ込まれている。奈良の正倉院に所蔵されている5本以外にはもう存在せず、戦闘用に作られたのか、儀式用に作られたのかも定かではない。

その後薙刀は11世紀中期までに、特に僧兵や足軽の間で広く使用

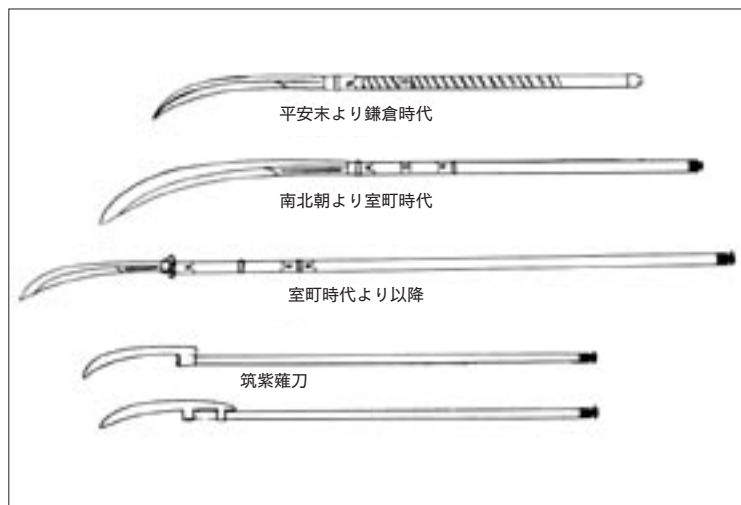
された。時代が経つにつれ、バランスの良い頑丈な武器として発展し、刃が刀と同じ方法で鍛えられた切れ味の良いものだった。初期のものは、柄が1.2 m という短いものから2.4m に及ぶ長いものもあり、湾曲した刃はおおよそ30 cm から60cm まで及んだ。中子^{なかご}は楕円形の櫛の柄に挿入され、竹製の目釘で固定されている。

薙刀の特徴として、刃だけではなく、「石突」^{いしづき} いわれる柄部の先も効果的に使用した。「石突」^{いしづき} は、さまざまな形や大きさの鉄で覆われており、強く打ち据えることによって、落馬して起き上がろうとした敵に致命傷を与える。このように薙刀は、馬の足を薙ぎ払い、落馬した敵を安全な位置から切り、突き、接近戦で倒れた敵を石突で突きを繰り出すという使い方である。

薙刀の刃部は、時代を重ねるごとに厚みを増し、長くなり、反りはさらに顕著になっていった。時代が経つにつれ、長さや形状は変化し、柄部が長くなると同時に刃部が短くなり、その長さで「大長刀」と「小長刀」に、文献上では区別されるようになった。

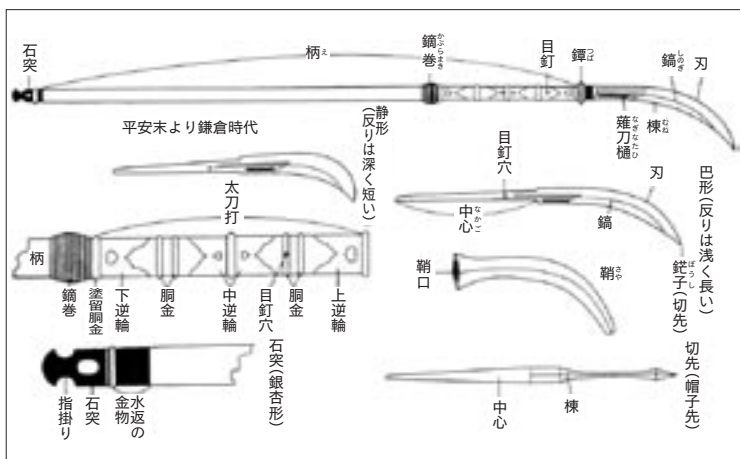
鎌倉時代に、3 尺以上の長さであれば大長刀と呼ばれていたが、南北朝時代から同じ長さが小長刀といわれるようになる。大長刀として『太平記』に、刃が4 尺（121cm）から6 尺3 寸（190cm）あまりのものが記録され、江戸初期の『大友興廃記』には1 丈の柄に6 尺（合計約4.82m）という、決して実用的だと思えない超大長刀^{（注3）}もあった。ともかく、室町時代からの薙刀は、以前のものより柄が長くなったことが通説である。また、15世紀以降にはつば鐙が付けられ、刃部がより短く広いものを用いた薙刀も見られる。この時代から鍵薙刀という、特殊な刃止め用の棒が柄の上部に横に突き出していたものも現れた。

各時代の薙刀 (注4)



柄部に関しては、各時代の素材と見た目にいろいろなスタイルがあった。例えば、『平家物語』には白木の「白柄」や「蛭巻柄」、『桂川地蔵記』には「銀柄」、『由良家伝記』には「朱柄」など、さまざまな名称が見られる (注5)。

14世紀には似通った武器である長巻 ながまき も使われるようになったが、標準的な薙刀よりも長い刃部を用い、柄部は短いため、薙刀と異なる武器として考えられる。



薙刀の構造 (注6)

2. 薙刀と中世の戦^{いくさ}

先述したように、戦場の武器としての薙刀の全盛は平安後期から鎌倉時代であったといえる。どれほど頻繁に使われていたかは、『平家物語』のような軍記物語に精通することによって知ることができる。例えば、『平家物語』の「橋合戦」の章において、浄妙房という僧兵の戦いぶりを「長刀に向ふ敵五人なぎふせ、六人にあたるかたきにあふて、長刀はかよりうち折ッて捨ててンげり…」^(注7)と描いている。

おそらく、薙刀を使う最も有名な戦士は武蔵坊弁慶（?～1189）であろう。周知の通り、弁慶は僧兵で源義経の忠実なボディガード的な存在として知られている。『吾妻鏡』に弁慶という人物が出ており歴史上の人物であるが、有名なのは『義経記』や『弁慶物語』

などで、あまりにも伝説化されているため、その人生に関する情報は虚構が多い。通説によると、弁慶は武術に優れ、義経と共に源平合戦に参戦し、最後には平泉で藤原泰衡軍に包囲された時に奮戦し「立ち往生」して義経が自害できる時間を稼ぎ、日本の最も有名な悲劇のヒーローのコンビといえる。弁慶の「忠誠心」と武術能力が能楽や歌舞伎、テレビドラマでも描写され、今日までその人気を博している。現代に至るまで「なぎなた」といえば、まず弁慶が浮かんでくるであろう。

弁慶のような勇猛な戦士が、薙刀を振り回すと畏敬いけいの念を起こしたに違いない。武器の特徴として長い柄があり、切る、薙ぐ、また刃先と柄の先（石突）のどちらでも突くことができるため、弓矢での交戦後、一騎打ちの接近戦が主な戦闘方法であった平安・鎌倉時代の戦場では、非常に効果的な武器であった。しかし、戦国時代からは戦術の変化が見られ、一騎打ちではなく、新しく発明されたより長くかつ使いやすい槍を活用した集団戦略の導入と、さらに16世紀の半ばごろから鉄砲などの火器の導入が薙刀使用の衰退をもたらした。戦国時代末期以降は、薙刀は戦場でほとんど見られなくなった。

3. 江戸時代の薙刀

現在、薙刀は主に女性が使う武器として知られているが、戦場で薙刀を使用したという女性を描く文献はほとんど見当たらない。

軍記物語を飾る巴御前ともえごぜん（1157年?~1247年?）と板額御前はんがごぜん（生没年未詳）という2人の武将とされる女性戦士がいる。興味深いことに、彼女たちの主要武器は決して薙刀ではなかったようである。板額御前は弓の腕前として記録され、巴御前の場合は薙刀を持ってい

る姿は絵巻物などで描かれているが、それを証明する文献は見当たらない。長野県の長福寺には、巴自身が所有したといわれている薙刀が保管されているが、それが本当か否かは定かではない。

江戸時代に入り、内戦も外戦もほとんどない「天下泰平」の世に、薙刀は女性の自己防衛・自己啓発の手段として修練されるようになった。その理由として、長物である薙刀の特徴を生かした遠心力を活用することにより、女性でも男性との体力的な差を乗り越えることができるからである。時代が進むにつれ、実戦的な要素が薄くなり、薙刀自体が軽く短く作られるようになり、また、柄部が真珠などで装飾され、武家の婦女子の嫁入り道具の家宝として、母から娘へと代々受け継がれる、武家女性の「魂の象徴」といってもよい存在に変わっていった。

この時代には、薙刀術の稽古の大部分はほかの武芸と同様に、^{かた}型（形）の反復稽古に重点を置いていた。実戦の機会がほとんどなくなったため、武芸流派が急激に増加し、次第に実戦的でない派手な技が増える傾向が見られるようになった。このような風潮を「華法剣法」と貶され、軽視されている。特に、剣術の状況を改善するために、自発性と直接攻撃のある新しい「^{うちこみけいこほう}打込稽古法」が、18世紀^{ながぬましろうざえもんくにさと}に長沼四郎左衛門国郷らが始めたのがきっかけであるといわれている。現代剣道となぎなたで使用されている防具と竹刀の原型はこの時代から現れ、相手を傷つけないことを配慮したフルコンタクトの稽古法が一般的になっていった。

『千代の友鶴』（1682）という画集の中に、切っ先にタンポのついた槍と薙刀と面、胴、垂れを着けて仕合をしている武士が描かれている^{（注8）}。この画集を見ただけでも、江戸時代に薙刀術が槍術や剣術と同様に修練されていたことが明らかであるが、薙刀だけを主



流とする武芸流派の記録は意外と見当たらない。

今村嘉男編の『日本武道大系』で、主な薙刀流派として天道流、新当流（穴沢流）、先意流、正木流、常山一刀流、月山流、戸田流、根岸流、米田流、武甲流、留田流、柳剛流、直心影流、巴流、静流、静貫流、富樫法神流、三和流、真影流などを挙げているが^(注9)、『本朝武芸小伝』（1716）には、兵法・諸礼・射術・馬術・刀術・槍術・砲術・小具足・柔術の流派に関する記述はあるものの、薙刀だけの流派に関しては全く掲載されていない。また、1844年に出版された『新撰武術流祖録』でも、槍術の見出しの下に穴沢流、先意流と正木流の薙刀術の技が紹介されているが、現在の薙刀術流派として知られている天道流でも剣術の流派として紹介され、薙刀の技には一切触れていない^(注10)。

神道流（穴沢流）、念流、荒木流、楊心流などのような、あらゆる武器を修練する総合武芸流派のカリキュラムには薙刀の技も組み込んでいたが、剣術の副次的な技として稽古され、薙刀自体の技を

向上させる動機は薄かったといえる。

この点について湯浅晃は、江戸時代における薙刀の稽古は「武家の婦女子の心得として、礼儀・作法の見習いや、和・順・貞・節という婦徳の涵養^{かんよう}を目的」としていたが、武家の男子が修行した武芸を「表芸」としたら、薙刀術は「裏芸」で、「人知れず稽古をするという、奥ゆかしさで教授された」と述べている。「裏芸」だったということで、江戸時代の薙刀術は具体的にどのような修行をしたかは定かでない^(注11)。

II. 薙刀の近代化への展開

1. 明治時代の薙刀—衰退と復活

明治初期には、薙刀術は他武芸とともに衰退の一途をたどった。1853年にペリー提督率いる「黒船」が浦賀に来航し、2世紀以上にわたる鎖国時代^{しゅうえん}が終焉を迎えた。

武士の教育手段として発展してきた伝統的な武芸流派は、完成度の高い精神主義を兼ね備えた、価値のある「芸道」として成熟していたが、西洋諸国の破壊的威力を持つ武器には敵わ^{かな}ないため、実戦性に欠ける伝統武術は不要であると見なされた。日本が諸外国に追いつくには、新型銃、大砲、そして新しい徴兵制度を導入し、武装しながら「和魂洋才」や「富国強兵」というようなキャッチフレーズに基づいて近代国家が築かれていった。

1866年に幕府武芸訓練機関であった講武所が廃校になり、1871年には藩と武士階級の廃止に伴い、藩校や町道場で行われていた武芸教育の姿が消えていった。元武士であった士族は少しずつ特権を

失い、1876年の廃刀令で、「侍の魂」であった刀を帯に差すことすら許されない時代がやってきた。多くの士族は、新しい教育制度の教員や新政府の役人に任用されたが、社会の激変の中で特に打撃を受けたのは幕府や諸藩に雇われていた武術指南役や道場主であった。収入がなくなり、道場に門弟も集まらず、生活的に苦しい状態に陥った。

武術がこの厳しい状況から脱出することができたのは、「撃剣興行」と呼ばれる公開試合・デモンストレーションの開催がきっかけであった。困難を極めた1870年代～80年代において、武術復興と無職・貧困に窮した武芸専門家に、少しでも収入を得るための方法として開発された撃剣興行は、元講武所剣術師範で直心影流の榊原健吉によって1873年4月に東京で始められ、次第に全国に広まった。剣術家が大半の「選手」を占めていたが、佐竹茂雄（直心影流薙刀術十四代佐竹艦柳斎の夫人で、美貌の女薙刀使いともいわれていた）や、千葉貞女などが薙刀を持って戦う女性の姿も観客の目を引いた^(注12)。

撃剣興行の画期的なところは、社会的身分を問わず、入場料を払えば演武が見物でき、多くの新聞社で大きく取り上げられ、伝統武術に対する意識が大いに復活した。例えば、1877年8月18日付の『読売新聞』に「薩賊が乱暴を始めてより〔西郷隆盛による西南戦争のこと〕、官軍に抜刀隊といふが^{これ}でき、是が元で府下も遠国も急に剣術の稽古が流行だした事ハ、先頃も新聞に出ましたが、此節ハ榊原健吉氏の家へ、七ツ八ツから十五六までの娘たちが^{しき}がりをして、頻りに武芸を励むといふから、今に女隊を組で薙刀でも^{かつ}擔ぎ出し、西郷^{こうがん}の^{りょうけん}擧丸でも打切る了簡か知らんハテ合点のゆかぬ」（句読点は筆者）と、掲載されている。

また、1893年6月27日付の『読売新聞』にも、「撃剣会に外国人飛入す一日下横浜松ヶ枝町に興行中の撃剣会に於て、一昨夜の試合

中日下某と云へる婦人（長刀）と、宮川某（剣）との試合ありしに
一外国人ハ初めより力瘤^{こぶ}を出して見物し居たりしが、団扇が宮川に
揚ると同時に外国人ハ日下^{あだ}の仇でも討って遣らんと思ひてや、突然
日下の持てる長刀を奪ひ取って上段に振り構へ、勝誇^{かつこ}つたる宮川に
打て掛りしかバ、宮川も驚きながら一二本受流しつゝ隙を窺^{うかが}って其
左肩を突きたれば、何ぞ堪らん外人ハ忽ち尻餅^{しりもち}を舂^ついて打倒れ、見
物^{はや}ハ嘸^{はや}し立てる大騒ぎの所へ巡査出張して取り鎮めたりといふ」と
いう面白いハプニングを描く記事がある。

しかし、この年ころから撃剣興行という活字が、ほとんど耳にし
なくなっていた。なぜなら、西南の役が終わると不安定な時代に入
り、治安を任せられる警察官の増加が必要になり、撃剣興行に出場
した剣術家の多くは、警察剣術世話係という新しい職に就くものが
出てきた。武術家にとっては運命的な方向転換になったが、撃剣興
行は封建社会と近代社会を生き抜いた武芸の懸け橋の役目を果たし
たことで、評価すべき試みだったといえる。

2. 近代教育と「学校薙刀道」

新しく編成された明治警察隊は、剣術が体力を保つのに良い方法
だと発見するが、伝統武術の教育的価値も同時代から改めて考えら
れるようになった。

1870年代に、教育制度の西洋化の抑制を訴え、カリキュラムに「日
本伝統文化」を残しておきたいと考える教育者・政治家がいた。例
えば、講道館柔道の創立者である嘉納治五郎もその中の中心人物で
あった。学校における武術の教育的価値を探るため、文部省が調査
を開始した。しかし、1883年に体操伝習所、1896年に学校衛生顧

問会が行った調査では、学校カリキュラムに武術を導入することは不適切だという調査結果が出た。

不適切という理由に、知識を重視されていた学校教育で、武術が精神形成を補うことができるので、非常に有益であると評価されたが、他方で、体育の授業から期待されている医学的・生理学的利益に逆行するのではないかと指摘した。つまり、武術はバランスの取れた体の発育に有害であり、暴力や対立的競争心を促し、危険で、各武術流派の共通する指導手段を確立することが難しく、費用がかかるなど、マイナス面が多く、しかも、多人数の生徒を一斉に教える方法が確立されていなかったことから、近代的教育環境において指導が不可能だと判断された。

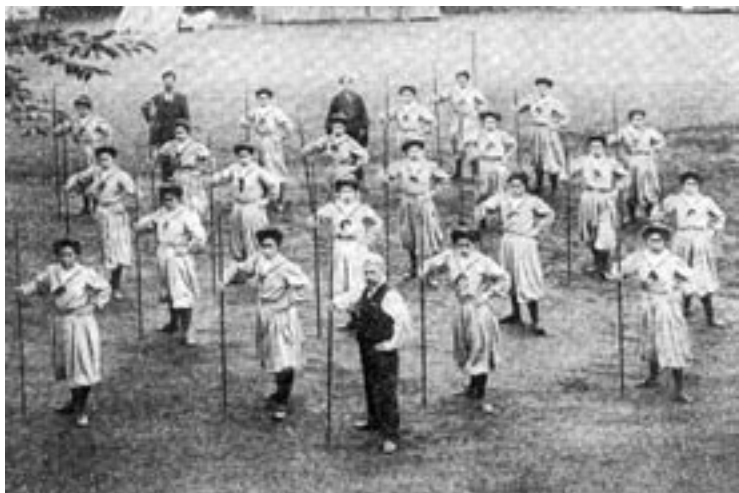
不適切と指摘された点の一つの解決方法として、木刀または木薙刀を使った「武術体操」があった。その中心人物で、小学校の校長で北辰一刀流を学んでいた小沢卯之助が、健康を促進し、集団的ゲーム性を含んだ効果的な教育法として「武術体操」を考案した。スポーツ性に重点をおいた「武術遊戯」と、形に近い「武術体操」の2種類の体操法である。「武術遊戯」としては、「薙刀遊戯」、「棒術遊戯」、「剣術遊戯」、「射撃遊戯」を、「武術体操」として「薙刀術」、「棒術」、「剣術」、「槍術」、「懐剣術」という、伝統武術をモデルにして学校で容易に教えられる内容を考え出した。

また小沢は、普及するために『武道改良教授武術体操論』（1896）、『武術体操法』（1897）、『改正薙刀体操法』（1906）、『体育流剣術薙刀術』（1918）などの教授本を数多く出版した。小沢以外にも、武術を基にした日本独特の体操システムの研究をする人たちがいた。特に、注目する人物として中島賢三が取り上げられる。中島は、団体教育の訓練法に焦点をあて『長刀体操法』（1909）や『木刀及び

薙刀体操法』(1918)などの教本を出版している。

「武術体操」は、少しずつ日本各地で広がったが、刃筋(刃の角度)を無視した非現実的な技や、派手な動きが多いことによって、当時流行していたバトン・トワリングとの違いが分からない、という厳しい批判もあった。しかし、「武術体操」は費用のかかる道具を使わず、流派を超えた武術の技が、多人数のグループに対して教えられるということを証明できた観点から、後に発展する武道教育における初心者教授法に、重要な影響を与えたといえる。

その後、体育のカリキュラムで何を教えるべきか、という困惑と熱い議論が数十年間続き、1911年の高等中学校規程第13条で、「撃剣及び柔術を加うる事を得」(事実上は随意科)、1913年に中学校と師範学校の男子生徒には「撃剣及び柔術」を加え、「正課」とし



東京女子音楽体操学校生徒の薙刀体操(小沢卯之助『改正薙刀体操法』学海指針社より)

て受け入れるようになり、新しい「学校体操教授要目」の導入とともに「武術体操」の役割を終えることになった。

ただし、新しい「学校体操教授要目」の中に薙刀術は含まれていなかったが、奨励する学校は割と早い時期から見られた。例えば、女子の武術教育の提唱者であった星野慎之助は、北辰一刀流と柳生流の薙刀の形を東京明治女学校で1889年から指導し、天道流第十四代宗家で美田村顕教は、1899年に京都の同志社女学校で指導。1901年に矢沢いさ子は、武甲流を日本女子大学の体育部で、1908年に直心影流薙刀術第十五代宗家である園部秀雄は、姫路師範学校で指導、さらに1911年より新井つたは奈良女子師範学校で鏡心流を教える^(注13)など、全国各地で教育現場に薙刀を取り上げる学校が増えてきた。また、1910年5月に女子の「良妻賢母」を目的とする教育問題を文部省が全国会議で取り上げ、体操の適切な課外活動として、薙刀、水泳、弓術、アイススケートとテニスが提案された。その結果、1913年に「課外活動」として薙刀も中等・高等学校に取り入れることが認められた。しかし、薙刀が「正課」になるまでには、まだまだ遠い道のりであった。

もう一つ、薙刀の近代化に大きな影響を及ぼしたのは大日本武徳会の設立であった。日清戦争（1894～1895）によって日本では急速に愛国主義が奨励され、「武士道」と「伝統武術」への関心が高まっていった。1895年に、日本の伝統武術を研究・保存・普及することを目的に大日本武徳会が京都に設立され、1899年には平安神宮に武徳会本部道場「武徳殿」が創建された。1904年7月31日に、武徳会の「奨励武術」に「薙刀術」が加えられ、剣術部の付属とすることになったが、1910年に開校した武徳会の武徳学校（後に武術専門学校→武道専門学校に改称）には含まれず、時を経て1934

年に「薙刀術教員養成所」を開設した。

以上のように、武術体操、大日本武徳会や星野慎之助らの努力の成果によって「学校薙刀道」の教育的基礎が徐々に固まっていた。

1936年の「学校体操教授要目」の改正によって、女子教育に「体操」・「教練」・「遊戯及び競技」・「弓道」と「薙刀」も正課として指導してもよいことになった。しかし、剣道と柔道と違って、統一した教授内容と方法がまだ定められていなかった。1941年の「国民学校令公布」によって、初等科、高等科の両科とも「体操科」が「体錬科」と改められ、その中で「体錬科は之を分かちて体操及び武道の科目とす」ることになり、その目的は「武道の簡易なる基礎動作を習得せしめ、心身を錬磨して武道の精神を涵養するに資せしむるものとす。初等科においては男児に対し剣道及び柔道を課すべし。高等科においてはその程度を進めて之を課すべし。女児に対しては薙刀を課することを得」となった^(注14)。

「体錬科」の時代は、修行者の数からいえば薙刀の黄金期であった。ただし、1930年代の教育制度はますます愛国主義・軍国主義化が進み、武道教育が効果的な軍事的思想の導入を確固とする方法として、利用されるようになっていった。当時の薙刀の修行目標は、「心身の鍛錬と技術の習熟を目的とし、以って武徳を涵養し（中略）。また、その修錬を通して全人格を陶冶するに重きをなし、したがって強靱なる身体^{とうや}の鍛錬となり（中略）。また、吾々の修める所は薙刀術にあらずして薙刀道にあり」と、『大日本薙刀道教範』^(注15)（美田村邦彦著）に示されているように、精神的な修行を主な目標としていた。「精神教育」というのは、日本の少年、少女たちを、国家と天皇のための「没我」精神を養うために用いたということは事実であり、薙刀も軍国主義の道具として利用されたことは否定できない。

このように、1930年代から40年代初頭にかけての薙刀の流行にもかかわらず、乗り越えなければならない問題が数多くあった。1936年の正課導入を機に、文部省が全国の薙刀に関する普及調査を行った。1933年には薙刀が指導されていた学校は21校にも満たなかったが、1937年には149校にも増加していた。指導者数は直心影流が一番多く、天道流がそれに続いていたが、深刻な指導者不足は解消されていなかった。このままでは、薙刀が近い将来に正課必修科目になることは不可能で、指導者の養成が早急に必要とされた。

武徳会はすでに1934年に美田村千代、西垣 きん、美田村邦彦を講師に、天道流薙刀術の指導者養成コースを設立していた。また、「修徳館」という直心影流の指導者養成学校が1936年に園部秀雄によって設立された。天道流は『大日本薙刀道教本』（1940）、『女子武道天道流薙刀術解説』（1940）、直心影流は『学校薙刀道』（1936）、『国民学校薙刀精義』（1941）、『女子武道薙刀の使い方』（1942）などの教本が、両流派から出版された^(注16)。

3. 薙刀同士の稽古法の工夫

指導者不足以外にも普及の壁があった。例えば、薙刀の稽古は主に形であったため、もっと「競技性」を求める声も高まってきた。それは、女性が競技に参加することは一般的に「女らしくない」と考えられる傾向が確かにあったが、指導者から生徒が継続的に薙刀に興味を持たせるためには、競技による面白さが必要だと訴えた。戦前の薙刀試合は薙刀同士ではなく、ほとんど対剣道であった。

この問題を何とかして解決しようとしたのは、榊田八重子という若い教育者であった。武道専門学校で美田村千代から天道流を修練

したが、反抗的で改革的な性格の持ち主として有名だった。武専卒業後、榊田は地方で薙刀を普及した献身的な姿勢は高く評価されていた。当時の薙刀に対する最大の課題は、一度に多人数を教えることが難しいということと、生徒は有意義な稽古をするために、薙刀だけでなく太刀の使い方も学ばなければならないということであった。榊田は、薙刀同士の統一された稽古法の開発に心血を注いだ。

1982年6・7月に出版された月刊誌『剣道日本』に、榊田が当時の言葉で綴った「人生と薙刀への貢献」についての興味深いインタビューが掲載されているので、ここで引用する。

「薙刀を教えて見て、つくづく思ったことは、一、二、三、ヤーエイ！の、薙刀は形ばかりや（中略）。剣道は、竹刀一本あれば全国いたるところでだれとでも楽しくけいこできるではないか。それをなんぞや、薙刀は形をならっても一、二、三、ヤーエイ！で、宙を突くしかない（中略）。『薙刀対薙刀』で、稽古できるようにならんもんか…」^{（注17）}

榊田は教育的観点からも不満を感じ、薙刀同士の稽古法はないかと思いをめぐらしていた。その他の問題として、武徳会では主に天道流を指導していたが、初等部で直心影流の形を、

高等部で天道流を学ぶことに、生徒も指導者も困惑した。榊田は個人的に、新しい教育用薙刀教育に関する疑問点を文部省に報告した結果、1942年に榊田が文部省体育局体育課長の石井道則に直接会うことになった。面談後、榊田は文部省体育研究員という役職を与えられ、学校用の新しい薙刀修錬法を調査し、作成するように依頼された。

また、榊田は1940年2月27日に、大日本武徳会が流派を超える統一された武徳会制定の形を検討する13名の委員にも委嘱された。

1941年1月21日に、薙刀術調査研究委員会より「薙刀術基本動作用案」が提示されたが、研究員であった美田村千代が納得できず、長年勤めた武徳会と武専のポストを離れることになり、結果として武徳会の薙刀制定の形は実現しなかった。

榊田が統一された修錬法を作成するために、異なった多くの流派の指導者と会い、各流派の特徴を参考に、教育にふさしいものを念頭に草案を作成した。その草案は、文部省、その他の教育機関と軍関係者の前で発表するように求められた。榊田は、国会議員で剣道家であった笹森順造という非常に影響力のある人物の支援を受け、文部省制定形の正式な公開という結果をもたらした。榊田によると、「まあ、そういう苦心が実って、小学校5年生以上、女子師範までの体錬科武道として薙刀を正課として教授する、という文部省制定形の発表になったのです。これが薙刀同士でやる薙刀の始まりで、それから全国に伝達講習が行われたんです。しかし、九州や東北の先生がたを集めて講習しているうちに、とうとう終戦になってしまった……」(注18)

1945年に文部省は、「終戦に伴う体錬科教授要項(目)の取扱に関する件」並びに「武道の取扱に関する件」を通牒したうえ、「体錬科武道」(剣道、柔道、薙刀及び弓道)の授業、課外活動が禁止となった。薙刀の文部省制定形はお蔵入りし、それから10年間、日の目を見ないはめになった。

Ⅲ．戦後の「新しいなぎなた」

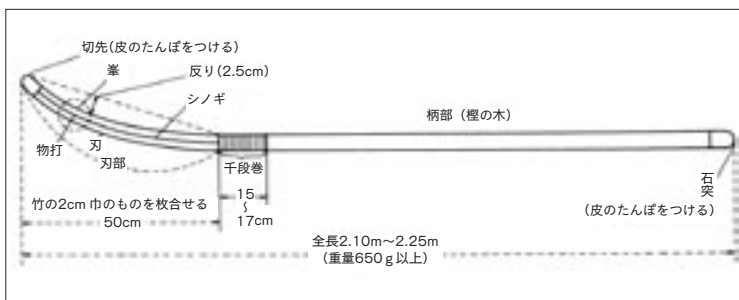
1945年の終戦後、日本は連合国軍総司令部（GHQ）の支配下に置かれた（1952年のサンフランシスコ講和条約まで続いた）。武徳会は終戦後すぐに解散に追い込まれ、武道は「武道禁止令」によって新しい教育制度に組み込まれることはしばらくなかった。1950年代の初めから武道禁止令が徐々に解除され、1953年5月に園部秀雄、美田村千代、吉村セキ、園部繁八、西垣きん、守屋くの、園部朝野、榊田八重子らが、薙刀復活を目指して集まり、1955年の5月に全日本薙刀連盟が結成された。連盟本部は、兵庫県伊丹市の小西酒造の修武館道場内に置かれ、元侯爵夫人山内禎子が初代会長に就任した。そして1956年に、宮城県仙台市の野球場特設会場で第1回全日本薙刀選手権大会を開催している。1960年に山内が勇退し、副会長の小西静子が会長となった。

文部省が全日本薙刀連盟に、漢字の薙刀ではなく、ひらがなの「なぎなた」と変更し普及するようにと指導した。理由は、薙刀という字が当用漢字になかったこと、漢字に含まれる「薙刀」の軍事的イメージを取り除くためであった。天道流や直心影流などの伝統的流派は、「薙刀」という字を使用しているが、全日本薙刀連盟は1963年に、「薙刀」を「なぎなた」に統一している。

1954年に、榊田、徳永千代子らが「学校薙刀指導者研究協議会」を立ち上げ、1956年に「学校薙刀」を完成させ文部大臣に陳情。1957年に「学校薙刀」の実技を文部省関係者と体育審議委員に披露し、1958年に文部省体育局長に薙刀の正課教材採用の懇願書を提出した。1959年の7月に、文部省体育局長に「学校薙刀」実施の改善経過報告書を提出、そしてついに同年12月に文部省次官通達で、なぎな

たが中学校以上にクラブ活動として承認された。

この「新しいなぎなた」は、民主的な社会に応えるスポーツとして、榊田が戦前に考案した制定薙刀に手を加えられた内容であった。すなわち、戦時中に文部省が制定した形を元としているが、全日本なぎなたの形は「しかけ・応じ」と称し、なぎなた対なぎなたの8本の技から成っている。なぎなたも、刃部には竹を割った2本が取り付けられ、手軽で危険性を排除したものが一般的に使われるようになった。



このように組織、形などを統一したことにより、なぎなた愛好者は剣道家のように、全国各地で自由に試合や稽古を行うことができるようになった。榊田著の『新しいなぎなた：指導の手引き』(1960)が、長年にわたり標準的な教科書として使われた。以下、新しいなぎなたの戦後の発展に関係する主な出来事の年表である。

年	項 目
1945	終戦後に「武道禁止令」
1953	武道修錬解禁、薙刀連盟組織委員会発足
1955	全日本薙刀連盟発足
1956	第1回全日本薙刀選手権大会開催（宮城県仙台市で）
1958	文部省への学校薙刀の申請過程で「なぎなた」表示に変更
1962	第1回全日本学生なぎなた選手権大会開催
1966	「高等学校における弓道・レスリング・なぎなたなどの実施について」 通達、正課教材として実施可能
1968	全日本なぎなた連盟、財団法人として認可
1970	高等学校の体育でなぎなた指導が許可
1971	第1回全国演技大会
1973	「理念作成準備委員会」設置、「錬士・教士・範士」の称号と「初段 から五段まで」の段位制に改定
1977	全日本なぎなた連盟の形が7本完成
1978	財団法人日本体育協会に加盟
1981	「なぎなたの理念」及び「指導方針」を発表
1982	島根県で開催された国民体育大会で、なぎなた競技が公開競技として参加
1983	群馬県で開催された国体から正式種目として実施
1988	全日本学生なぎなた連盟発足
1990	国際なぎなた連盟の結成
1992	全国高等学校体育連盟へ加盟
1993	第1回全国中学生なぎなた大会開催
1995	第1回世界なぎなた選手権大会開催
2002	第1回全日本男子なぎなた選手権大会開催

学校教育におけるなぎなたの復活は、1959年に文部省次官通達で、中学校以上のクラブ活動として復活した。また、1966年には「高等学校における弓道・レスリング・なぎなた等の実施について」の通達で、高等学校体育課目として採用されることになった。

近年、「新しいなぎなた」と古流薙刀の両方を修錬する愛好者もいるが、ほとんどが近代競技である「新しいなぎなた」を中心に稽古を行っている。現在、なぎなたの国内競技人口が4万人に及ぶと

いわれている。2002年から毎年開催されている全日本男子なぎなた選手権大会を開催するほど、男性の競技人口が著しく増加しているが、大半の修行者は女性である。また、国際なぎなた連盟（INF）も1990年に結成され、世界選手権大会も4年ごとに行われている。現在、国際なぎなた連盟の加盟国は10カ国以上になり、国際的には少しずつであるが確実に増えている。

しかしながら、日本国内の普及に関しては、他武道や競技スポーツに比べて競技人口が少なく、4万人という数字は少し多いような気がする。というのも、全国高等学校体育連盟加盟種目別登録部員数（女子）を見ると、2005年度の時点でなぎなたは1,713人しかいない。1993年から、高校生の競技人口が全種目ともほとんど増加せず、他武道を見ると2005年度の空手道部の女子部員は5,003人、柔道は6,601人、剣道は20,120人、弓道は34,908人、そして武道でないバスケットボールは64,196人とバレーボールは73,970人である^{（注19）}。ただし、2012年から中学校体育で、武道必修化が始まっているので、次の世代になぎなたを普及させる最大のチャンスだと思われる。

Ⅳ. なぎなたの特性

1. なぎなたの特性

なぎなたには、防具を着装して行う方法と、防具を着装しないで行う、しかけ・応じと全日本なぎなたの形という、二つ分けることができる。勿論、道場やクラブや年齢によって違うが、一般的ななぎなたの稽古内容の前半は防具を着装しないで行い、礼、準備体操、

八方振り、号令による空間打突、しかけ・応じで終了する。後半は、防具を着けて打ち返し、基本打ち、掛り稽古、互角稽古、打ち返し、礼で終了する。なぎなた教習課程は以下の通りである^(注20)。

項 目		内 容		
理論	なぎなたの概説			
技術	基礎	自 然 体	なぎなたを持って立った姿勢	
		礼 法	立礼、座礼	
		構 え	中段の構え、下段の構え、八相の構え、脇構え、上段の構え	
		体さばき	送り足・歩み足・開き足・踏みかえ足・継ぎ足	
		打 突	打突部位	正面、側面、脛、胴、小手、咽喉
			打 法	振りあげ、もちかえ、振り返し
			突 き 方	直突、繰り込み
		受 け 方	刃部、柄部	
		振 り 方	上下振り、横振り、斜め振り（下からも）、振り返し＝八方振り	
	打ち返し	連続打ち（正面→側面→側面→脛→脛→正面） 一手の内、間合い、体さばきなどを学ぶ		
	技	しかけ技	払いわざ	表・裏よりの払い、刃部・柄部の払い
			踏み込みわざ	開き足を使って踏み込み
			出ばなわざ	先、相手がわざを起こそうとする瞬間を先に打つ
			二段わざ	二つの技の連続（面→脛、小手→脛など）
			三段わざ	蜜の技の連続
		応じ技	受けわざ	刃部・柄部で相手の攻撃を受ける
			抜きわざ	相手の技を抜いて打ち返す
			受け流しわざ	体さばきを使って刃部で相手の打突を受けて流す
			打ち落としわざ	刃部・柄部で相手のなぎなたを打ち落とす
			巻き落としわざ	刃部のそりを利用して相手のなぎなたをまき落とす
		応用	しかけ・応じわざの組み合わせ	相対で行う
		競 技		1. 試合競技—個人戦・団体戦 2. 演技競技—指定技・自由技（しかけ・応じ、形）

なぎなたの修行の目標は、基礎技術を磨き、積み上げていくことにより、心身の調和がとれた人材になるための「人格形成」であるといわれている。全日本なぎなた連盟では、なぎなたを通しての理念並びに指導理念を明らかにするため、1981年に「なぎなたの理念」と「なぎなたの指導方針」を作成した。

なぎなたの理念

なぎなたは、なぎなたの修練により、
心身ともに調和のとれた人材を育成する

なぎなたの指導方針

なぎなたの正しい指導により、技を錬り、心を磨き、気力を高め、体力を養うと共に、なぎなたの特性の中に生きる、日本の優れた伝統を守り、規律に従い、礼譲を尊び、信義を重んじ、毅然として広く平和な社会に役立つ人を養う

言い換えれば、なぎなたは「競技スポーツ」・「生涯スポーツ」として人格形成の修行法として普及している。試合競技は、なぎなたの修練過程において重要な要素ではあるが、勝敗に拘るのではなく、修行の成果を計ることが目的とされている。競技者は、勝ちたいという気持ちがなくてはならないが、正々堂々と競技し、謙虚な気持ちで相手に感謝できるようになることが強調されている。

なぎなたは多くの面で剣道と似ている。武器が長いことと下半身のターゲット（脛）を除けば、防具や試合などは、剣道とほぼ同じである。また、試合競技では3本勝負とし、面・小手・胴・突き・

脛を攻撃し、「有効打突」(1本)を相手から奪うことが目的で、「有効打突」基準も剣道に近い。「有効打突は、なぎなたの打突部で打突部位を充実した氣勢と適法な姿勢、部位を呼称しながら確実に打突し残心のあるものとする」と、全日本なぎなた連盟試合規定に明記されている。

打突部位	なぎなた
面	物打(切先から15cm～20cm)
側面	面の中心より25°～30°横
小手	物打(切先から15cm～20cm)
胴	物打(切先から15cm～20cm)
脛	刃部での打突時は物打柄部での打突時は、石突より約20～25cm
咽喉	切先

注意: 高校生以下は突きを禁止、また石突での突きは完全に禁止されている

剣道との違いは、なぎなたでは右・左半身の構えがあり、左右の動きと技が多く、なぎなたの繰り込みや繰り出しによって打つ間合いが多様で、構えの持ち替えなども大きな特徴である。また、脛を保護する脛当てが追加され、指が分かれている小手を使用されることで剣道具と異なる。

なぎなたの防具^(注21)

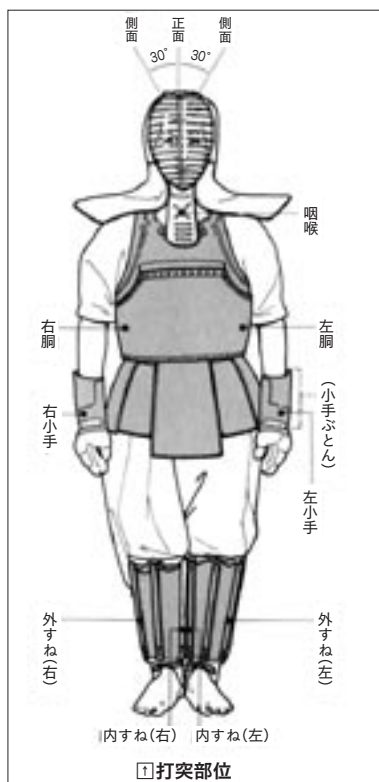
試合があるにもかかわらず、日本の伝統武道としてのなぎなたは、西洋スポーツとの相違点がよく強調されている。スポーツの定義にもよるが、なぎなたは他武道と同じで「生涯修行の道」で、勝負を超える次元がある。

全日本なぎなた連盟が定めている、修行の過程において守らなければならない項目が、次のように明記されている。

1. 正しいなぎなたを学ぶこと
2. 礼儀作法を重んずること
3. 気力を高め体力を練り、^{ふとうふくつ}不撓不屈の精神を養うこと
4. 技能上達のための工夫研究すること
5. 健康管理・安全面の留意をすること (注22)。

そうすることによって、身体的な効果として、均整な身体の発達、正しい姿勢、体力増加と健康の増進を維持すると同時に、精神面の効果として集中力・判断力の養成、気力の根気、礼儀と公正な態度、積極性・自尊心・^{つな}忍耐力などの人格形成に繋がる利点が挙げられる (注23)。

そして、なぎなたの昇段審査の学科問題のためのハンドブックによると、体力・精神力を鍛えると同時に、「正義」(なぎなたの修練を通じてその心を正し、態度を正し、行いを正し、正しい道理を学ぶことにより正義の徳が養われる)、「廉恥」(修練の中の善悪の条理を知り、義を重んじ、自己の利害を思わず、人道の為につくすことを学び、恥を恥と知ることを学ぶ)、「勇氣」(稽古の中で物に怯じけず、心身





なぎなた競技（著者撮影）

の全能力を発揮して当たる為に自然と勇気が養われる）、「礼節」（礼に始まり礼に終わるといわれるように、礼を根本として物事を行うので、自然に礼の心、また尊敬の心を養う）、「克気」（稽古によって四戒《驚・

懼・疑・惑^き・惑^{わく}》を克服し、心身を鍛錬することにより自然と養われる）、「忍耐」（種々の稽古方法で、心身を極限まで鍛錬することにより、物に打ち勝とうとする忍耐力が自然に養われる）という、なぎなたの稽古や試合だけではなく日常生活においても役に立つさまざまな「徳」や「平常心」などが身につく（注24）。

2. しかけ・応じ

防具の稽古以外に、戦時中に開発された文部省の形が原型となっている初心者から上級者まで一連のなぎなたの技や理合を学ぶ方法として、「しかけ・応じ」が不可欠な稽古法である。

しかけ・応じは競技でもあり、また、昇段審査でも必須の科目である。しかけ・応じは、防具の稽古・試合で使う同じ木製の柄と竹製の刃部を使用する。8つの決められている基本動作から構成されているが、

「しかけ」は動作を開始し、「応じ」はそれに対して「応じながら反撃」する。しかけ・応じの目的は、なぎなたの基本技を教えるだけではなく、すばやい動きと、いかなる状況にも対応できるような技術を身につける。繰り返し練習することによって、なぎなたの正しい礼儀作法、構え、体さばき、手の内、間合い、呼吸、打つべき機会、残心、攻防の理合、正しい姿勢、気合などが体得できる。なぎなたすべての基本要素が含まれ、初心者が最初に手ほどきを受けるものであり、また、上級者がさらに技を磨くことができる。

演技競技の試合では、一般的に2組のペア（赤または白のリボンを腰周りに付ける）が技を競い合う。しかけ・応じには8本の技があり、その中から指定された3本を披露することが、一般的な競技形式である（大会によって本数が違う）。演技終了後、選手が試合場から出、主審が笛を吹くと同時に、全審判（5人）が「赤」または「白」の審判旗を揚げ、優勢な組を判定する。近年は見られないが、「採点方式」という方法やミスをするとポイントが引かれる判定法もある。

なぎなたは美しい形に重点が置かれ、しかけ・応じはその典型である。技の迫力や正確さというまでもないが、競技者は服装や髪の毛がきれいに整えられているか、試合場への入退場、開始、礼、構えを取るタイミングなどが求められている。また、しかけ・応じの演技競技は、競技態度、打突の正確さ、修練の奥深さなどが審判の判定基準となっている。

3. 全日本なぎなたの形

全ての武道は形に重点を置き、「形に始まり形で終わる」とまで

いわれている。形は、それぞれの古流武術の教えの真髓が取り組まれ、決められた技のシークエンスである。全日本なぎなたの形は、1977年と比較的最近に作られたものである。見てきたように、戦後日本の新しい民主主義の浸透にともなって、古流武術からスポーツ化した「新しいなぎなた」は、全国に普及するとともに、競技性がますます強調されるようになり、試合に勝つための技が流行するようになりつつあった。

全日本なぎなた連盟は、なぎなたの本質がもはや忘れ去られてしまうとの危機感を抱き、1973年に形作成委員会を設置し、根本となる精神のおよび技術的原理の確立を目指し、「新しなぎなたの形」の製作に励んだ。日本中の古流指導者が集い、なぎなたの理合や美しさを表す7本のなぎなた対なぎなたの形を工夫した。形が完成するまで約5年の歳月を費やし、多数の伝統的流派の技を巧みに取り入れたものになった。

形用のなぎなた^(注25)

使用される木なぎなたは、通常使用される竹刃のなぎなたよりさらに形が巧妙である。形をするためには正しい知識と、彫刻されたような木製の刃部の洗練された棟や鐔^{しのぎ}などを使いこなすだけの技術が必要とされた。しかけ・応じより洗練された技と精神性の理合を取り入れ、原則として三段以上でないと学ぶことができない。全日本なぎなたの形（2002年に全日本なぎなた連盟の形から改名）は、四段以上の昇段審査に含まれ、また、国体や全日本選手権大会などのレベルの高い大会で、競技またデモンストレーションとして披露されている。

形の演技競技は、しかけ・応じと同じように行われる。ペアを組

んだ2組が試合場に入り、指定の形を3本打った後、5人の審判が赤または白の旗を揚げ勝敗を決する。審判は、気合、技の正確性、タイミング、調和、理合、または形の理念に関する理解度を示しているかどうかなどで判定を下す。

4. 異種試合とリズムなぎなた

戦前のなぎなたは、剣に対する使い方の稽古が主流であった。薙刀対薙刀の形はほとんどなく、修行者が防具を着装して試合をする時は稀であったが、相手はほとんど剣道家で、「異種試合」と呼ばれている。今日、なぎなたの公式試合は、なぎなた対なぎなたで構成されているが、京都の武徳殿で毎年5月に行われている京都大会などでは、時々異種試合を見ることができる。また、公式ななぎなたの大会でも、剣道対なぎなたの異種試合が行われることがある。

あまり見られることがないが、なぎなたにはもう一つの部門がある。大会などでデモンストレーションとして披露される「リズムなぎなた」である。リズムなぎなたは、演武者がグループとなり、なぎなたの技を音楽に合わせながら披露するダンスに近いものである。特にルールはなく、演じる人たちの芸術的品位に委ねられている。なぎなたの持っている特性を十分に取り入れ、また剣道にはない左右の持ち替えなど、技の多様性を応用できるチャンスでもあり、なぎなたの正しい理合を取り入れながら、チームワーク、呼吸の一致、タイミング、距離、そしてもちろん、リズム感、創造力と想像力が求められる。

おわりに

なぎなたの技を通して、真剣に戦う中から相互の人格を尊重しあう心が生まれ、その心を表したものが礼である。心のこもった礼儀や態度は、自己の人間性をも豊かにする。また、なぎなたの作法などを学びながら、防具、稽古衣、なぎなたの取り扱いを通して、物に対する感謝、道場での立ち居ふるまいを身につけることにより、自己の人間性をも涵養し、人間関係をより豊かにするものである。

また、運動の法則にかなう、左右自在に持ち替えて打突をしたり、繰り出しや繰り込みなど、なぎなたをすばやく操作する多様な技を習得し、使いこなすことにより、注意力、集中力が養われ、気力が充実し、奥ゆかしさの中に芯^{しん}の強い活力溢れる人格形成に役立つのである。

しかし、なぎなたが21世紀に生き残るために、解決しなければならない課題が山積していることも確かである。最大の課題は、武道、スポーツ界の共通課題でもある人口の減少と武道離れである。人口の減少については、国レベルの行政に頼るしかないが、武道離れは、各武道団体で知恵を絞りながら対処しなければならない。

また、先に述べたが「薙刀術教員養成所」や「修徳館」などで、なぎなた専門教員となった人々はすでに70歳代後半というご高齢になられ、なぎなたの技や精神などについて、果たして後世に正しく継承できるかは問題である。戦後生まれの多くは、趣味程度の感覚で始められた方が大部分なので、なぎなたの歴史をどこまで深く継承できるか疑問である。近年、「新・新しいなぎなた」感覚で、変化を望む若い指導者が多々見受けられる。技の一つひとつ、なぎなたの精神は、戦中、戦後の危機を乗り越え、古流武術の真髄を結

集した「新しいなぎなた」を創造してきた人々の血と汗の結晶であることを、決して忘れてはならないと思う。

今年、国際なぎなた連盟が設立してから18年目を迎えるが、「国際化する」ということをもう一度考える時機に来ているような気がする。国際化とは、人種、宗教、言語などを超え、同じ土俵に上がることである。国際化では柔道が一步先に進んでいるが、柔道発祥の日本には、不満なことが多々あるかもしれない。一概にはいえないが、多くの国が満足であることが国際化なのである。そのためには、日本人の中に国際感覚を持った人材を一人でも多く育てることが大事だと思う。武道発祥の地・日本の代表者が、「日本武道の心」をせめて英語で主張する語学力や、海外でよくいわれるパーティー外交での渉外力を身につける必要があると考えられる。

多くの課題を克服するには、指導者一人ひとりが魅力ある人材になることである。なぎなたは、日本固有の文化として歴史と伝統に培われたもので、日本の伝統的なものの考え方、所作を内包しているすばらしい運動文化でもある。よって、指導者のみならずなぎなた愛好者は、「なぎなたの理念」「なぎなたの指導方針」に向かって日々精進し、心身とも調和のとれた人材の養成に努め、広く平和な社会に役立つ人を世に送り出すことが、結果としてなぎなた人口の減少、国際化問題などの解決に繋がると確信している。

《本文注》

(注1) 二木謙一、入江康平、加藤寛(編)『日本史小百科武道』(東京堂出版) 204頁

(注2) Ellis Amdur, "The Development and History of the Naginata" in *Journal of Asian Martial Arts*, Vol 4. No. 1, 1995, Via Media Publishing Co.

33-49 頁

- (注 3) 稲垣源四郎 (他)『日本の武道 6. 弓道・なぎなた』(講談社) 258 頁
(注 4) 笹間良彦『図説日本武道辞典』528 頁
(注 5) 同上 529 頁
(注 6) 稲垣源四郎 (他) 前掲書 255 頁
(注 7) 梶原正昭、山下宏明『平家物語 上』(『新日本古典文学大系 44』) 242 頁
(注 8) Nakamura Tamio, “The History of Bogu”, *Kendo World*, Vol. 1 No. 1 より
(注 9) 今村嘉男 (編)『日本武道大系』416 頁
(注 10) 中村民雄「近代薙刀小史」(『近代なぎなた名著選集』第 8 巻所収)
7 頁
(注 11) 湯浅晃『武道伝書を読む』289 頁
(注 12) 中村民雄前掲書 8 頁
(注 13) 二木謙一 (ほか) 前掲書 203 頁
(注 14) 日本武道館 (編)『日本の武道』506 頁
(注 15) 日本武道館 (編)『日本の武道』より引用
(注 16) 中村民雄前掲書 17 頁
(注 17) 石原卓馬「なぎなた八重子、一途に稽古する話」(下)『剣道時代』
1982 年 7 月号 67 頁
(注 18) 同上 70 頁
(注 19) 中村民雄『今なぜ武道か』361 頁
(注 20) 全日本なぎなた連盟 (編)『新・なぎなた教室』13 頁より作成
(注 21) 同上 28 頁
(注 22) 全日本なぎなた連盟『なぎなたハンドブック』30 頁
(注 23) 同上 31 頁
(注 24) 同上 37 頁
(注 25) 全日本なぎなた連盟『全日本なぎなたの形教習書』76 頁

■なぎなたに関する文献リスト

- 中村民雄 (編)『近代なぎなた名著選集』本の友社、2004 (10 冊 : セット)
内容一戦前のなぎなたに関する最も貴重な文献が数多く含まれており、近代

なぎなたの発展を研究するに当たって非常に重要なコレクションである。内容は以下の通り。

第1巻—第2巻『体操化の試み』

第3巻『薙刀道の歴史』

第4巻—第7巻『学校薙刀道』

第8巻『近代薙刀小史（中村民雄）、称号受有者一覧・大会記録（I）』

第9巻—第10巻『大会記録』

- 徳永千代子『私の歩んだなぎなたの道』日本武道館、2003
内容—戦前の薙刀術教育養成所に始まり、戦後苦難の復興期を経て、現在の隆盛に至るまで、著者自身が歩んだなぎなたの道を振り返る。著者の徳永千代子は戦後なぎなたの発展において中心人物の一人である。
- 月刊「武道」編集部『贈る言葉—なぎなた範士からのメッセージ』日本武道館、2007
内容—全国各地のなぎなた範士25名が、後世のなぎなたの人へ贈るメッセージ。近代なぎなたの史料ともなる各範士の歩みを綴った半生記集。
- 全日本なぎなた連盟（編）『新・なぎなた教室』（スポーツVコース）大修館書店、1984
内容—なぎなたの指導書として使われ、なぎなたを始めようとする人、より上達を望む人に対応できるよう、多くの写真とわかりやすい解説でなぎなたの基本技を紹介する。
- Alexander Bennett『Naginata: The Definitive Guide』KW Publications, 2005
内容—なぎなたの歴史・技術・精神面を英語で詳しく説明する広範囲な著書である。前半がなぎなたの「文化性」を追究し、後半はその「技術性」を分析する。

第4章

弓道の歴史とその精神

松尾 牧則

は じ め に



現代武道は、格闘技術から発展し、素手または用具を介しての対人的運動形態をもち、自己の動き、また相手の動きに相対して、身心を有効に活用する方法を習得することを通じて、人間形成に資することを目標にしている日本の伝統的な運動文化である。弓道の場合は、安全確保の観点から対人にかわり「的」という不動の目標物に向かって矢を発射する形態をとっている。的中制の試合においては、対戦相手とは的中比較を通じて対戦しているわけであるから、「相手の動きに応じて……」という応対技術は現代弓道の競技には必要とされない。結果に対する原因、すなわち「的に中るか外れるか」ということの原因は、用具に不備がない限りはすべて自己に帰着するのである。精神的なものは別にして、自己の行射は相手に左右されないために、結果によって、より厳格な内省が求められる武道といえるかもしれない。

用具として使用する弓・矢・ゆがけは、各人に適合したものが選択可能で、規則上も単一規格ではなく、許容される範囲が充分にある。そのことは、体力に応じた用具を選択できることとなる。特に使用する弓の強さ（弓力）に制限がないことは、老若男女が同一の規則のもとに安全に競技が可能な種目ともなる。現に、男女混成のチームが許される大会や、男女の種別のない全国大会なども実施されている。また、古来からの竹弓・竹矢に加え、新素材を用いた弓具が開発されていることは弓道普及に大いに貢献している。弓は木と竹を貼り合わせたものが古来の様式であるが、現在はカーボンフ

アイバーやグラスファイバーの薄い板を木竹と貼り合わせたものも多く使用され、学校の部活動や一般の初心者用としてのニーズが高い。矢も竹製のものに加え、ジュラルミン製・カーボン製も普及している。弓も矢も学校部活動や初心者は新素材の弓具を利用して弓道学習を開始しており、その利用は100%に限りなく近い状況にある。



■写真1) 現代弓道の稽古 (著者撮影)

I. 弓道の伝統

狩猟の道具であった弓矢は、恵みをもたらしてくれる神聖なるものとしても取り扱われ、儀礼・祭礼でも使用されたと推定される弓矢の遺物も多く発見されている。また武器としての弓矢は、実用的にも装飾的にも製作方法が工夫・改良され、威力・耐久性も少しず

つ向上していった。7世紀後半頃には宮中の儀式として「射礼」^{じらい}が恒例化する文射的側面が見られる。これは中国文化の影響を強く受け、儒教の精神と弓が結びつき儀式に発展していったもので、貴族階級の弓術に影響を及ぼした。中国においては、弓（射）は武の表芸であり、六芸（礼・楽・射・御・書・数）^{りくげい}の1つにも数えられ、人間修養の道として重要視されたが、日本の弓術はその思想から大きな影響を受けたと考えられる。

中世の戦乱時代において弓は武器として最も重要視され、武射的側面を強くもつようになる。弓矢による狩猟は、古代は主として生活のためであったが、古代貴族にはレクリエーション的であり、鎌倉武士にとっては鍛錬的な意味をもっていくようになる。弓が武器としてもっとも隆盛をみたのもこの中世戦乱時代である。

平安頃の弓の名人としては、弓矢の神として祭られている源義家、1矢をもって船を沈めた豪勇無双の鎮西八郎為朝、鶴退治の源三位頼政があげられる。平安末期には、源平合戦屋島の戦いにおける那須与一宗高が有名で、平家の舟に掲げられた扇を射落として敵も味方もその技を賞賛した物語がある。物語には尾鰭^{おびれ}がついて、全てが真実とは考えられないが、ロマンある物語である。

武家政権の確立された鎌倉時代においては、弓の修練は武士の必須であり、流鏑馬^{やぶさめ}・犬追物^{いぬおもの}・笠懸^{かさかけ}など弓馬術の鍛錬が盛んに行われた。馬上で弓を引くことを「騎射」^{きしゃ}というが、流鏑馬・犬追物・笠懸は馬上弓術の代表的なもので「騎射三物」^{きしゃみつもの}（注1）と称される。武芸訓練として行われたのであるが、競技や儀礼的の神事としても行われた。

小笠原長清を祖とする小笠原流は、宮中、将軍家の儀式・礼法をつかさどり、弓馬術の伝統を持っている。騎射・歩射ともに技を伝え、現代弓道の礼法も小笠原流が伝える方法を多く取り入れている。

1. 弓術流派について

弓矢の製作方法や使用方法は、はじめは親から子へと伝えられる程度のものであったが、長い年月を経て、試行錯誤により優れた機能・性能を有するものへと改良されていき、射術にも工夫が加えられていったと考えられる。生命にかかわる実戦を経ることにより、弓の技術・弓具は更に研究が進み、効果的な技と高性能な弓具が求められるようになる。そして、独自の技法で優れた成果をあげることに成功した革新的な名人の出現が流派の発生の源となってゆくのである。

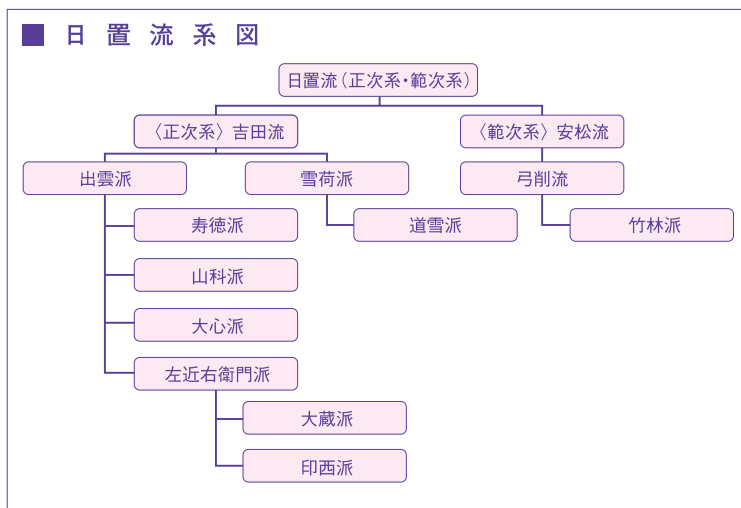
弓術流派の成立ということを見て行く場合、弓射の古実的な面と技術的な面に注目しなければならない。弓術は他武術よりも早い時期に流派が成立したという見方もされているが、技術体系が確立され文化され、伝達様式が整っていった時期を弓術流派の成立時期とみると他の武術と比較しても決して早かったわけではない。やはり日置流の祖、日置弾正正次へきだんじょうまさつぐが現れ活躍した室町中期～後期が、弓術流派の成立の時期であるとの解釈が適当である。すなわち15世紀後期から16世紀頃と考えられる。

日本流、鹿嶋流、八幡流、逸見流、伴流、紀流、秀郷流、太子流など日置流以前にあったとされる流派は、実際には日置流が成立してからその流名を称したものであったり、日置流諸派の流派としての体系整備にならって確立されていったものである。したがって、現在我々の認識している流派というものではなく、その家々に伝えられてきた「やり方」「様式」といったもので、家を中心として伝えられたものといえる。

日置流の祖である日置弾正は日本弓術中興の祖とも称される。日

置弾正は室町の人であるが、非実在説もあり、「八幡の化身^{けしん}」とされている伝書もある。日置弾正に伝を受けた吉田上野介重賢(道宝)^{しげかた}・重政父子は吉田流を興し、吉田出雲守重政は吉田流出雲派（吉田重政の嫡子重高を祖とする説もある）を興した。

■ 日 置 流 系 図



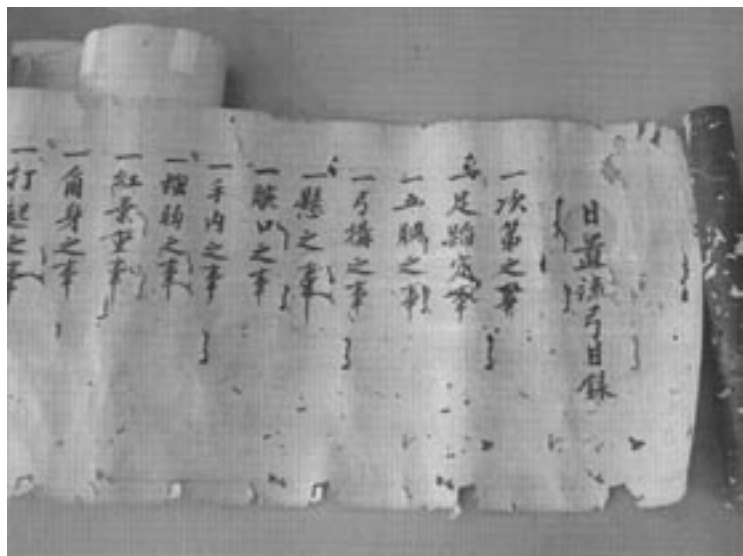
日置流^{せっかは}雪荷派は重政の4男吉田重勝（雪荷）を祖とし、本系を藤堂藩に伝え、仙台、会津、広島などにも伝流。日置流道雪派は重勝の高弟伴喜左衛門一安（道雪）を祖とし、本系は大和郡山藩に伝えた。

左近右衛門派は出雲派から分かれ、吉田左近右衛門業茂（重高3男）を祖とし、金沢藩に栄えた。寿徳派は吉田重高・重綱の門人木村寿徳庵宗祐を祖とし、大心派は吉田重高の高弟田中大心秀次が興した。山科派は吉田重高の高弟片岡平右衛門家次を祖とし、子家延、孫家清（家清^{じょせい}2男）へと相伝した。家延は吉田茂氏に学び、家清は吉田左近茂武の女婿（娘の夫）となり吉田茂氏にも射術を学んでいる。

日置流印西派は吉田いっすいけんいんさい一水軒印西を祖としている。印西は本姓を葛巻源八郎重氏といい、吉田重綱嫡女と婚し、重綱に射を学び、のち叔父吉田業茂(左近右衛門派祖)に学んだ。印西派は江戸本系のほか、岡山、広島、熊本、遠州、越前、会津、薩摩などに伝流した。大蔵派は左近右衛門派より分派したもので、吉田大蔵茂氏を祖とし、加賀前田藩弓術を代表する流派である。山科派と大蔵派とは数代にわたり親密な交流があったとされる。

日置流竹林派は竹林流ともいい、石堂竹林坊如成を祖とする。伝系については諸説があり、更なる研究を要する。尾州、紀州で有力な道統が栄えた。堂射で優秀な射手を排出した流派の1つである。

このように、日置流の流れを汲む道統の分派が江戸時代に至る前



■写真2)『日置流弓目録』(片岡家清署名 著者蔵)

に見られた。一方、江戸時代初期に発生した流派もある。森川香山を祖とする大和流は、諸流を集大成したものとされる。大和流では目録を最初に渡すなど、新しい伝授様式を持った流派であったが、諸流を集大成したとはいえ、基本的には日置流系統の流派といえる。江戸時代において、日置流系統の流派は各藩で複数が栄えていったが、日置流の流れを汲む流派の弓術は、一般武士階級・庶民の弓術として隆盛を極めたのである。



■写真3）江戸時代の的場（著者蔵）

2. 日本弓術の射術目的による分類

日本の弓術は射術の目的から分類すると3射法（歩射・騎射・堂

射)に分けることができる。いずれも、その射術目的を達成するために、長年に渡り、多くの先人が工夫研究を重ね、積み上げられた技術体系である。今日の科学に照らし合わせてみると、先人の経験にもとづいた教えは驚くほど洗練されたものであることに気づく。

(1) 歩射^{ほしや}

歩射は本来「ぶしや」と読むが、現在では「ほしや」と読んで武射^{ぶしや}と区別している。歩射は、奈良時代には朝廷で大射^{たいしや}が行われ、大射は平安時代には射礼^{じらい}と呼ばれた。鎌倉時代、歩射の三物には草鹿^{くさじし}・円物^{まるもの}・大的^{おおまと}があったが、騎射三物と違い、武術訓練としてではなく遊戯的要素が多く、庶民の間でも行われた。

また、歩射は実戦の場(戦場)において大いに進歩し、威力(貫



■写真4) 戦場で使用された矢の根(矢尻・鏃。著者蔵)

徹力)のある矢を確実に目標物に命中させるための技術が研究された。この歩射の射法は現在いう斜面打起こし法である。歩射射術は、15世紀後半日置弾正正次によって技術が体系化され「日置流弓術」として栄え、多くの分派が発生した。歩射弓術の根本は皆同じであるが、甲冑着用の実戦射術から、時代が下がり素肌で弓を射るようになったこと、また新しい工夫・考案、思想的裏付けの変化などにより、弓術に対する考え方が改良された結果、多くの流派に分派していったといえる。

(2) 騎射^{きしや}

馬上で弓を引くことで、弓術と馬術、両方の技が必要なため、弓馬術ともいわれる。小笠原流や武田流は騎射の伝統を持っている。鎌倉時代、騎射三物(流鏑馬・笠懸・犬追物)は武技鍛錬として行われたが、後には娯楽的にも行われるようになった。戦国時代以来衰退していた騎射は8代将軍徳川吉宗の時代に武術奨励で復興され、騎射挟物^{はさみもの}という名で実施された。後に新儀流鏑馬^{しんぎやぶさめ}と称されるが、その様式が今日目にするところの流鏑馬である。流鏑馬は、目標物(的)



■写真5) 犬追物(揚州周延画。ウィキメディアコモンズより)

が馬を馳せて行く前方にあるために、弓構え、打起こしを体の前面で行い、両腕の間に目標物(的)を見ながら引き分けるという方法をとっている。現在いう正面打起こし射法と似た形式のものである。

(3) 堂射^{どうしゃ}

堂射は、京都三十三間堂の縁の端から端まで1昼夜にわたり矢を射通す「大矢数」や「千射」「百射」「半堂」「継縁^{つぎえん}」などの射術である。江戸時代に盛んとなり、「通し矢」とも言われる。三十三間堂とはいうものの実は堂の長さは66間あり、縁の長さは121,7m、縁上から軒までは約5m(場所により相違)、縁の幅は2.36mである。その制限された空間で矢を飛ばさなければならない。慶長11年(1606)浅岡平兵衛が51本を射通してから、次々と記録が更新され、次第に藩をあげて天下一を争うようになった。財力のない藩からは出場が困難となるほどにエスカレートしていった。寛文9年(1669)、尾州藩星野勘左衛門8000本(総矢数10,542射)、貞享3年(1686)、



■写真6)『浮絵和国景跡京都三拾三軒堂之図』(哥川豊春画。ウィキメディアコモンズより)

紀州藩和佐大八郎8133本（総矢数13,053射）の記録が打ち出された。堂射の特性から、矢飛びの良さや、射手の疲労軽減に主眼を置いて射術・道具が工夫された^(注2)。

II．弓道の展開

1．近代以降の弓道

文久2年（1862）に幕府の弓術上覧の儀が廃止され、講武所の教科目からも弓術が除外されることとなった。時代の流れとともに弓術が実用の術としては認められなくなったということである。明治新政府が誕生し、武士の時代が終わり近代化の流れの中で、弓術をはじめ武術は急速に衰退してゆく。廃藩置県により、藩校の武術教育は姿を消していった。士農工商の身分制度がなくなり武士階級の弓が一般庶民へも開放になった一方、弓術は急速に遊戯化・娯楽化してしまう。弓は賭博・戯れの対象となり、低俗な矢場^(注3)も多数出現した。

弓術衰退のうちにも、古来の伝統を正しく引き継いでいった真摯な弓術家によって明治期の弓術は支えられ、なんとか次代に伝統を伝えていった。武道が注目されるのは日清・日露戦争の頃で、国家主義思想の台頭のなかで、ナショナリズム高揚・富国強兵政策に武道が利用され大きな関心をもたれることとなる。明治28年（1895）、武道の総合団体である大日本武徳会が設立され、武道の振興がはかられた^(注4)。

武道の習得レベル評価法は、大日本武徳会では流派を越えた評価の方法が定められた。柔術では「段」を用い、剣術では「級」を用

いた。称号制度として、明治35年（1902）に大日本武徳会で「武術家優遇例」を制定し、「範士・教士」の称号が設けられたが、これが今の武道の称号制度に至る基盤となった^(注5)。

学校教育の中では課外活動として、明治30年代後半に慶應義塾、早稲田、第一高等学校、第二高等学校などで弓術が部活動として行われた。明治41年（1911）5月、一高対慶應の競射会は弓術における学校対抗の始まりとされている。大正15年（1926）「学校体操教授要目」にて、柔術は「柔道」に、剣術は「剣道」に、弓術は「弓道」にそれぞれ名称が変更され、「柔道」「剣道」「弓道」などの名称が公式に用いられるようになった。この大正15年の要目改正により弓道は授業時間外で行うべき種目として採用された。昭和5年（1930）には、日本学生弓道連盟が設立され、翌年に第1回学生弓道選手権大会を開催するなど、学生弓道界も少しずつ活発化していった。

学校教育の中で弓道を取り扱うことに関連して、流派による射法相違が問題点として浮かびあがってきた。そこで、流派を中心に普及してきた弓道を見直し、統一射法を創り上げようという動きが生じた。昭和9年（1934）に弓道射形統一調査委員会が設置され、日置流系統の特徴である斜め打起こしと、小笠原流や本多流^(注6)の特徴である前打起こしの統一を検討した。各流派を代表する者と武徳会役員が参集し2日間にわたって議論したが、どちらも譲らず結論には至らなかった。昭和10年になって妥協案として正面に構えてから斜め打起こしの位置（肘力・大三）へ徐々に移行させるという「大日本武徳会弓道要則」（俗称：中間打起こし・武徳会流）が定められた。この弓道要則には賛否両論があり、大論争となったが、妥協的に創り上げられたものであったため、反対者たちからは酷評されたのである。弓道要則射法を広め、学校弓道でも統一的に実施し

ようとしたが、弓道要則射法を実施する人は次第に少なくなっていた。伝統ある流派の一貫した射法を妥協的に統一することには無理があったのである。新結成された武徳会では、昭和19年（1944）、弓道要則射法を認めながらも射法統一は白紙に戻され、いわゆる正面打起し射法も斜面打起し射法も認めることを決定した。

昭和10年（1935）、佐藤洋之助らにより「弓道を男女中等学校の正科に」ということが帝国議会審議にのぼった。これが可決され、昭和11年（1936）6月「第2次改正学校体操教授要目」の中に男子師範学校・男女中学校・男子実業学校において弓道を正課教材として用いてもよいことが認められる内容が折り込まれるに至ったのである。また、女子の師範学校、高等女学校、女子実業学校においても弓道、薙刀を加えることができるようになった。弓道が普及されるために大きな1歩となった。しかし、学校教育全体をみると、非常時に対応するための動きが活発となり、昭和12年（1937）の日中戦争でさらに加速し、戦力のための精神教育・体力錬成を目的とする教育内容に移行していつている。弓道もその精神教育に利用されていったと考えられる。ちなみに、昭和13年（1938）、4,060余校男女中等学校のうち680校（正課としては97校）で弓道が実施されるという状況であった。

昭和16年（1941）12月、太平洋戦争が勃発し日本は戦時下におかれる。昭和17年（1942）3月、大日本武徳会が改組発足した。会長には、内閣総理大臣東條英機が就任し、戦時下において武道は注目を集め、更に盛んな活動を行うようになっていったのである。

■近代～終戦までの弓道年表

明治 1	1868	明治維新以後、各地の弓術ようやく命脈を保つ
明治28	1895	4月17日、大日本武徳会（京都）に設立（会長渡辺千秋） 10月、第1回弓道演武大会実施
明治32	1899	3月、武徳殿（京都）完成
明治35	1902	大日本武徳会で「武術家優遇例」を制定
明治41	1908	3月、武道正課案提出 5月、一高対慶応の競射会
大正 7	1918	4月、「武術家優遇例」を「武術家表彰例」と改称。 「武術階級例」を制定
大正10	1921	段級制度を設け審査実施（大日本武徳会）
大正12	1923	4月、弓道にも階級例が適用され、段位発行
大正15	1926	「柔道」「剣道」「弓道」などの名称が公式に用いられる
昭和 5	1930	4月29日、日本学生弓道連盟結成（会長小山松吉）
昭和 6	1931	10月、第1回学生弓道選手権大会開催
昭和 9	1934	3月、「武術家表彰例」改訂（「錬士」の称号と、 初段～10段の階級を定める） 射形統一調査委員会設置
昭和10	1935	「弓道要則」制定
昭和11	1936	6月、男子師範学校・男女中学校・男子実業学校 において弓道を正課教材として認める
昭和16	1941	12月、太平洋戦争勃発
昭和17	1942	4月、大日本武徳会改組発足（会長東條英機）
昭和19	1944	射形統一が白紙に戻され、正面打起こし・斜面打 起こし射法も認める
昭和20	1945	8月、第2次世界大戦終戦

2. 戦後の弓道復活

昭和20年（1945）、第2次世界大戦終戦に伴い、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）命令によって武道の活動は制限される^{（注7）}。「武道」という言葉が軍事的な意味も含むと考えられたため、その使用も控えられるようになる。改組発足していた大日本武徳会も昭和21年11月に解散となり、戦後の武道界は厳しい状況におかれた。武道は、戦時におけるイメージを払拭し、新たな出発をしなければ社会に受け入れられない状況であった。有志の努力により復活にむけて新たな組織作りがなされていったが、スポーツ的要素を強調する必要があった。

昭和22年（1947）、全日本弓道連盟が設立したものの翌年に解散。かわって日本弓道連盟が昭和24年（1949）に創立した。翌年には第1回全日本大会（京都）を開催し、第5回国民体育大会（愛知）に弓道が正式種目として加えられ、日本弓道連盟は日本体育協会に正式加盟が承認された。昭和32年（1957）、財団法人全日本弓道連盟へ名称変更し、弓道を統括する団体として組織を整えていって、現在に至っている。昭和24年8月より発刊された月刊『日本弓道』は、昭和28年（1953）11月に『弓道』に継承され、連盟の機関誌として現在、通巻760号（2013年9月号）に至っている。

昭和24年7月、段級審査規程・競技審判規程が施行され、新規定による第1回弓道技能審査が実施された。昭和28年（1953）には全日本弓道連盟の指導指針となる『弓道教本第1巻』が、戦後の射法混乱を改善すべく、弓道の大綱を明らかにする意図をもって発刊された。各流各派の長所を生かして骨格とし、現代弓道の指標が示された。これにより、特定の流派に所属しないでも弓道の大綱を

学ぶことができるようになった。「射法八節」を定め、酷評された打起し統一をやめ、2つの打起し方法を採用した。体配(弓道の所作・作法)は、小笠原流の作法・動作を中心に取り入れ、流派ごとにまちまちであった体配をこの連盟方式に統一することにより、大会運営、審査実施上の混乱を是正し、全国的に普及させた。

学校における弓道は、昭和26年(1951)、中学校以上の体育教材として弓道の実施が認可(中学・高校の選択教科に採用)され、再び学校教育に取り入れることが許可された。これを受け、文部省主催、学校弓道講習会(済寧館弓道場)が開催されるなど、この頃より学校弓道開始の波紋がひろがっていった。大学では、全日本学生弓道連盟を結成(昭和28年7月)し、第1回全日本学生弓道選手権大会が開催された。全国高体連弓道専門部は昭和31年に新設され、第1回全国高等学校弓道大会を中央大学弓道場で開催している。全国高等学校弓道大会競技規則を制定(昭和34年)するなど着々と体制づくりをしていった。また、教職員で組織する全日本教職員弓道連盟を創立(昭和45年8月)し、第1回全国教職員弓道大会も開催した。教職員弓道家たちの努力により、高校部活動としての弓道は大いに発展をとげてゆき、第1回全国高等学校弓道選手権大会(昭和58年3月)、いわゆる高校選抜大会も開催されるようになった。このような、大学・高校の部活動弓道の普及に比べ、中学校の弓道はあまり顧みられず、地域差が大きいという状況であったが、現在では中学生への弓道普及にも力を入れ、中学生の全国大会も軌道に乗り始めてきた。

高校における部活動としての弓道は発展を見せているが、正課としての弓道は厳しい状況である。昭和42年(1972)「高等学校における弓道、レスリング、なぎなた等の実施について」の通達により、

弓道が高校正課体育種目として指導することが可能となった。しかしながら、正課体育として弓道を取り入れるには指導者や施設・用具の問題があり、積極的に実施しようとする高校はきわめて少なかった。そして、平成元年（1989）、高等学校学習指導要領改訂にともない、「格技」は「武道」に改められ、これまで「格技」に含まれず「個人種目」領域に位置づけられていた弓道は「武道」領域に含まれることとなった。平成6年度より学年進行をもって順次実施され、改訂は大きな前進ではあったが、現実問題としては対応できる高校は極めて少なく、弓道界の期待する状況は生まれなかった^(注8)。

戦後、一般の弓道は各地域の公私のだ場における指導者に支えられ復活していった。戦前の指導は、特定の流派なり、そのだ場の指導者が学んだ射術を指導して、その指導者からの評価が主であったものが、全日本弓道連盟が組織だてられ、段位という評価基準が尺度として広く通用するようになる。段位取得のために『弓道教本』に基づく射法を学習する弓道家が増えたことは、地域性を少なくし、全国的な射法の平均化につながっていった。講習会の開催により、だ場ごとの特性も少なくなり、稽古するだ場が変わっても同様の指導を受けやすい環境ができた。地域の弓道支部組織づくり、地域の大会の開催などは底辺拡大に寄与し普及が進んでいったのである。戦後、女子の弓道も大いに発展し、昭和39年（1964）には、全国女子弓友会（昭和41年に全日本弓道連盟女子部と改称）が結成された。弓道人口の推移を見ても、近年特に女子の増加が目立つところである。

■終戦以降弓道年表

昭和20	1945	8月、第2次世界大戦終戦 11月6日、文部省発体80号「終戦ニ伴フ体錬科教授要目ノ取扱ニ関スル件」 12月26日、文部省発体100号「学校体錬科関係ノ処理徹底ニ関スル件」(学校における武道授業は全面禁止、課外活動としての実施も禁じられる)
昭和21	1946	11月9日、大日本武徳会解散
昭和22	1947	全日本弓道連明結成(会長宇野要三郎)
昭和23	1948	12月、全日本弓道連盟解散
昭和24	1949	5月22日、日本弓道連盟設立(会長樋口実) 6月30日、日本弓道連盟が日本体育協会に加入 7月、段級審査規程・競技審判規程を施行。第1回弓道技能審査実施 8月『日本弓道』発刊
昭和25	1950	5月3日、第1回全日本弓道大会(京都)開催 第5回国民体育大会(愛知)に弓道が正式種目となる
昭和26	1951	中学校以上の体育教材として弓道の実施認可(中学・高校の選択教科に採用)
昭和27	1952	2月、文部省主催学校弓道講習会実施。文部省編『弓道指導の手びき』刊行 5月、弓道競技規則を制定
昭和28	1953	6月20日、第1回全国勤労者大会開催 7月11日、全日本学生弓道連盟結成。第1回全日本学生弓道選手権大会開催 8月、全日本弓道連盟編『弓道教本射法篇』刊行 11月『日本弓道』を月刊誌『弓道』へ継承

昭和31	1956	5月、全国高等学校体育連盟に弓道部会設置 7月、第1回弓道指導者中央講習会実施 8月11日、第1回全国高等学校弓道大会開催
昭和32	1957	1月、財団法人全日本弓道連盟へ名称変更
昭和33	1958	10月1日、柔・剣道を中学校の必修教材とし弓道は随意教材に決定
昭和34	1959	全国高等学校弓道大会競技規則を制定
昭和42	1967	3月29日、「高等学校における弓道、レスリング、なぎなた等の実施について」通達により、弓道が高校正課体育種目として指導可能となる
昭和45	1970	8月、全日本教職員弓道連盟（会長高崎米吉）創立
昭和55	1980	欧州弓道連盟（EKF）発足
昭和58	1983	3月、第1回全国高等学校弓道選手権大会開催
平成12	2000	全日本弓道連盟中央道場（明治神宮内第2道場）の竣工式
平成18	2006	5月、国際弓道連盟（IKYF）が発足
平成19	2007	中学校保健体育に武道必修とする案が中央教育審議会教育課程部会から提出される
平成24	2012	中学校保健体育で武道必修を実施

3. 現在の弓道

現在の弓道は全日本弓道連盟を中心に、都道府県の各地連組織が形成され、さらにその傘下には市町村や職場などをベースにした支部が形成されて、弓道の普及・発展に努めている。登録会員は約13万人であるが、潜在的愛好者も多数いる。競技としての弓道は、個



■写真7) 海外弓道愛好者も増加

人戦・団体戦があり、多くは的中制によって競技が行われている。的中制のほか、得点制や審査員による採点制の大会もあり、全日本弓道選手権大会などでは採点制と的中制が併用されて個人戦が実施されている。都道府県や市町村レベルの弓道競技は盛んに開催されており、競技としての弓道普及は、弓道人口の底辺拡大に大いに貢献しているといえる。また、段級の審査は弓道修練到達度の目安として、世間でも認知され、昇段を目指して修練する弓道家も多数ある。

一般弓道実施者は、このような競技志向、段位志向のほか、精神修養、生涯スポーツ、レクリエーションなど様々な志向をもって若年層から高齢者まで、また男女を問わず、幅広い愛好者層をもっている。組織作りにおいても、偏った志向の組織ではなく、広く受け入れられる組織作りが望ましいと考えられる。

1980年に7カ国をもってスタートした欧州弓道連盟は現在15カ国となっている。アメリカ弓道連盟は1996年に発足した。平成18年（2006）5月には17カ国参加のもと、国際弓道連盟（IKYF）が発足するなど、現在着実に国際化に向かっている。

昭和30年（1955）から全国を中心道場を建設を実現しようとする運動が展開されたが長年念願はかなわずにいた。平成に入って中央道場建設計画が再び活発化し、最終的には明治神宮との交渉にはいった。中央道場建設運動から半世紀近くたって、平成12年（2000）に全日本弓道連盟中央道場（明治神宮内第2道場）の竣工式を迎えたのである。中央道場と既存の至誠館と2つの弓道場で大規模な大会運営も効率よく行うことが可能となった。しかし、国際化が進み、新しい時代に向かおうとする弓道が、中央道場の立地上において宗教的な関わりを断ち切らなかったことは、弓道普及上、何らかの影響を及ぼす可能性を残してしまった。国際化と共に、弓道と宗教的問題、世界選手権大会と競技規定、審判の問題、ドーピング問題、弓具の規定、環境関連問題（矢羽）など、新たな検討課題も生じ、弓道の母国として伝統と文化を踏まえた日本弓道のスタンスを明確にしてゆかなければならない。また、国際組織としての国際弓道連盟には世界の常識にしたがっての組織運営が求められることとなるのである。

■ 表 1) 国際弓道連盟発足時の各国弓道人口 (国際弓道連盟発表)

団体名	会員数 (人)				
	範士	教士	錬士	段級位	合 計
全日本弓道連盟	107	1,794	4,361	124,005	130,267
ドイツ弓道連盟		1	5	1,126	1,132
フランス弓道連盟		1	12	345	358
アメリカ弓道連盟			9	233	242
イタリア弓道連盟		1	4	146	151
スイス弓道連盟			2	109	111
ベルギー弓道連盟			1	81	82
英国弓道連盟		1	2	77	80
オランダ弓道連盟		1	2	67	70
オーストリア弓道連盟				68	68
フィンランド弓道連盟				58	58
スペイン弓道連盟				52	52
ノルウェー弓道連盟				25	25
スウェーデン弓道連盟				21	21
ポルトガル弓道連盟				15	15
アイスランド弓道連盟		1		13	14
ルクセンブルク弓道連盟			1	13	14
計	107	1,800	4,399	126,454	132,760

※各段位には無段を含む

2005/10末現在



■写真8) 全日本弓道連盟中央道場（全日本弓道連盟提供）

Ⅲ. 弓道の技術と精神

1. 弓道射法八節

現代弓道における基礎的な射法を「射法八節」として称している。古来、七道とか十二品であるとか、流派により射術の区分けは異なるが、1本の矢を射るための一連の動作を便宜上区分したものである。現代弓道は的前を想定し、各流各派の長所を生かして七道をベースとし、それに残心（残身）の項目が加えられた。流派にかかわらず、現代弓道を学ぶ上での射法の骨子・指標が示されたものが「射法八節」であるといえる。

的前射法は弓術史上、歩射・騎射・堂射の観点からも基礎となる射法であったものと考えられるが、現代弓道では、的前射法「射法八節」が弓道修練の基礎であり全てともなっていて応用射術はほとんどない。

その射法八節は、足を踏み開くことにはじまり、姿勢を正し、矢を^{つが}番えて構え、両拳をいったん頭上に上げてから左右に引き分け、引き絞った状態で発射の機に至り放ち、放った後の姿勢までをいう。便宜上8つに分けられてはいるが、相互に関連する一連の動作であることが大切なところである。「射法八節」の概略は以下の通りである。

(1) 足^{あし}踏み

射を行う上での基礎・土台づくりとなる。「1足」「2足」の2種類の足踏みがある。両方の爪先を結んだ線が的の中墨（仮想中心線）に向くようにし、踏み開く広さは身長^{やつか}の約半分（自己の矢束）となる。両足の角度は60度程度とする。

(2) 胴^{どう}造り

姿勢を正し、重心を総体の中央に置き、心気を丹田におさめる。
足踏みの線、腰の線、肩の線を平行にする（三重十文字）。

(3) 弓構え

弦と矢を保持（取懸）した後に構えることで、「斜面打起し」「正面打起し」の2種類がある。顔の向け方（物見・頭持ち）を正しくする。

(4) 打起し

肩が上がらない範囲で両拳を頭上に上げる。

(5) 引分け

左右均等にバランスを確認しながら引き分ける。

(6) 会

自己の矢束（身長^{やつか}の半分）を引きおさめた状態のことで、ねらいをつけ、矢を頬につけ（頬付け^{ほおづ}）、弦を胸につける。左右に伸合い、発射の準備をととのえる。

(7) 離れ

胸の中筋より左右均等に離れることで、強く鋭い離れが望ましい。

(8) 残心（残身）

胴造りは残身まで崩れないこと。
心気のこもった離れ、残心であることが望ましい。姿勢を変えずに矢所を注視する。



■写真9) 射法八節「残身」（著者撮影）

2. 弓道の理念と精神

弓道の修練に励み、三位（身体の安定、心気の安定、弓技の安定）一体の妙境に到達するためにはどうしたらよいのかについて、宇野要三郎は『弓道教本』の中で、中国の書物『礼記』と江戸時代の弓術家吉見順正の遺訓『射法訓』の2つの文献をあげて「研修の参考に供する」としている。この2つの文献は講習会等でも唱和されることもあり、現代弓道家によく知られるものとなっている。

礼 記 一射 義一

射は進退周還しゅうせん必ず礼に中り、内志正しく、外体直くして、然る後に弓矢とを持つこと審固なり。弓矢を持つこと審固にして、然る後に以って中ると言うべし。これ以って徳行を觀るべし。

射は仁の道なり。射は正しきを己に求む。己正しくして而して後発す。発して中らざるときは、則ち己に勝つ者を怨みず。
かえ反ってこれを己に求むのみ。

吉見順正 射 法 訓

射法は、弓を射ずして骨を射ること最も肝要なり。心を総体の中央に置き、而して弓手三分の二弦を推し、妻手三分の一弓を引き、而して心を納む是和合なり。然る後胸の中筋に従い、宜しく左右に分かる如くこれを離つべし。書に曰く鉄石相剋いわ てっせきあいこくして火の出ずる事急なり。即ち金体白色、西半月の位なり。

弓道は実用の射から遠ざかっても、武士の教養・修養としても修練され、各流派でも技と精神が連綿として受け継がれてきた。現代弓道において、全日本弓道連盟が発行する『弓道教本』には「理念」として以下のことが記載されている。

- 射法、射技の研修
- 礼に即した体配の修練
- 射品、射格の向上
- 人間完成の必要

この4点は、宇野要三郎範士が弓道修練において強調していたものであり、現在では、「現代弓道の理念」「現代弓道の修練の眼目」と称されるに至っている。また、弓道が体育的であること、健康の保持・増進として大切なことはもちろんであるが、「人生をより豊かにするもの」でなければならないことや、弓道を通じて学ぶ「^{しつけ}躰や^{つつし}慎み、^{わけい}和敬、^{こつき}克己、反省などの徳目」を体得し身につけることが大切であることが『弓道教本』に記載されている。弓道における的は自己の射と精神の良否を映し出す「鏡」とたとえられる。競技として行われる弓道は、対戦相手と的中を勝負をする形式をとるが、試合（試し合い）を行ってくれる相手を尊重する精神が大切である。また、勝敗をきわめる大切な1射であっても、自己の精神が乱れることなく行射できるよう、技も心も「車の両輪」のごとく修練を極め、追求し、ひいては人間としての理想に向かって努力しようとする精神に弓道修練の大切な方向性がある。

戦後、新たなスタートを切り、現代弓道の指針ともなる『弓道教本』を発行した際に、「弓道の最高目標」として「真・善・美」ということが記載された。しかし、その考え方の基礎となったものは何であるのかはよくわかっていない。「真・善・美」という言葉は

日本古来の伝統弓術の中には見あたらない言葉であり、戦後、弓道が新たなスタートを切った時点で『弓道教本』に記載された弓道の思想としては比較的新しいものである。西洋思想の影響をうけた考え方も知れない。弓道の最高目標とされるが、これは弓道に限らず、人間としての最高目標でもある言葉であり、人間の理想としてとらえた言葉といってよいのではなかろうか。現代弓道の理念の中にある「人間完成の必要」ということに通じるものであることには違いない。

おわりに

平成19年（2007）、中学校保健体育において、ダンス・武道を必修とする考えが中央教育審議会教育課程部会から提出され、平成20年3月28日、文部科学省は新しい中学校学習指導要領を公示した。平成24年（2012）4月から完全実施されている。弓道普及には追い風と期待されるが、現状では弓道を保健体育授業として実施できる中学校は極めて少ないであろう。中学校の部活動さえも発展途上であり、施設・用具、指導者など体育授業としての弓道実施には障壁が多いのが実状である。期待とは裏腹に授業としての弓道実施にはかなりの時間を要するに違いない。しかし、武道への関心が高まることは、若い世代への弓道普及には大きな刺激剤となるであろうから、まずは地域差の依然として残る部活動の全国的発展をはかりつつ、弓道授業の担当ができる保健体育教員養成、指導法の工夫、用具の改善なども視野に入れて弓道授業が展開できるよう体制を整えて行かなければならない。

弓道の修練では自己を省みて常に反省し、よりよい方向を見いだ

し、再びチャレンジをするという反省と実践の繰り返しの連続が弓道の修練である。その修練を通じて弓の道を求め、ひいては人としての道を求めてゆく、求道的な哲学精神をも内包している。その道にはおそらく終点はなく、終着点と思っていた所にたどり着いてみれば、人間の探求心は更なる道を見いだし、更に進もうとするに違いない。生きているうちにパーフェクトな完成には到底至るとは思えないが、人間完成を目指して、更なる探求心を忘れずに弓道の修練に励んでゆきたいものである。

現代弓道は大衆の弓道である。今後更に、日本国内外ともに弓道の愛好者はますます増えてゆくことが期待される。弓道を実施する目的は各人の興味・関心によって違いがあるであろうが、弓道の修練が日常生活に生かされ、豊かなものとなるよう、現代弓道、そして将来の弓道を考えてゆかなければならないであろう。血と汗により先人が遺してくれた正しい弓道の伝統を大切に多くを学ぶと同時に、将来の弓道の発展のために、曇りなき目で弓道を見つめ、将来に伝えてゆく責務を現代弓道家は担っている。たゆまぬ修練とともに弓道について科学的な解明や理論を構築してゆくことが国際化する弓道の母国としての役割ではないだろうか。

《本文注》

(注1) 流鏑馬は7世紀末には行われていたが形式や作法が完成するのは平安時代で、藤原秀郷によるものである。軍記物語や絵巻物によって騎射の様子をうかがい知ることができるが、平安・鎌倉時代には騎馬戦を主とした戦闘が行われ、騎射が発達していった。流鏑馬を描いた最も古い史料は『鳥獣戯画』^{ちようじゆうが}丁巻流鏑馬の図であるが、至近距離的を射る姿が描かれている。現在の流鏑馬は約218mの直線馬場で行われ、3つの角的を順に射てゆくものである。笠懸には、

遠笠懸と小笠懸があり約 109 m の直線馬場からの的を射る。遠笠懸は約 20 m 先の円的を射る。小笠懸は至近距離にある角的（約 24 cm 的、地上約 36 cm）を射る。犬追物は約 160 m 角に竹垣を張り巡らせた馬場に 4 騎で犬を追って射る。犬射墓目いぬいひきめという特殊な矢を使用する。犬追物は騎射の訓練としてはより実戦的であり、すぐれた訓練方法であって、室町時代に至るまで行われた。これらは騎射の練習法でもあるが、実施方法やルールが定められ、競技としての性格もおびていった。

（注 2）食事・休憩時間を考慮に入れて計算すると、5～6 秒に 1 本の割合で矢を発射するようなスピードで引いたものと推測されている。堂射は 4 つゆがけまつやにを使用し、弓手には押手ゆがけをつけ、松脂を引いて滑り止めとし、時間のロスのないよう弓返りをさせない射法を用いている。現在行われる的前射法とは大きく異なる。しかし、この堂射のために工夫改良された弓具は、現在の的前の用具にも大きな影響を与えているのも事実である。

（注 3）江戸後期から明治にあった弓の遊技場。楊弓ようきゆう（小型の弓）で的を射て遊ぶ遊技場で、客の相手をする矢取りの女性（矢場女）がいた。表向きは楊弓場でも売春を行う店もあった。明治 10 年（1877）の記録では、浅草 6 区に楊弓店（射的場・矢場）は 18 軒を越え、矢場女（売春婦）全盛となり、この頃東京警視庁は楊弓店取締り規則を布達した。

（注 4）明治 28 年（1895）10 月には、第 1 回武徳祭演武大会が開催されている。明治 32 年（1899）3 月には大日本武徳会の本部となる武徳殿（京都）が完成し、5 月 4 日に落成大会が開催された。大日本武徳会は演武会の開催、指導者養成、会報の発行など武道の振興をはかるべく組織を整備拡大してゆき、各地にも大日本武徳会支部武徳殿が置かれた。大日本武徳会が成立してから 10 年後の明治 38 年（1905）には会員数 100 万人を越えたといわれる。

（注 5）この「武術家優遇例」は大正 7 年（1918）4 月に「武術家表彰例」と改称され、また「武術階級例」も定められて、称号・階級制度が整備された。大正 12 年（1923）4 月には弓道にも階級例が適用されるようになり段位が発行されるようになった。「武術家表彰例」は昭和 9 年（1934）3 月に更に改訂されて、従来の「精錬証」せいれんしょうを廃して「錬士」の称号と初段から 10 段の階級も定められた。改訂された「武術家表彰例」を見ると「会長ハ初心者ノ為段外ニ若干ノ階級ヲ設クルコトヲ得」とあり、段位に至らない初級者のための階級も与えられるように含みをもった内容が記載されている。

(注6) 大正末から昭和初期に成立した新興流派^{ほんだとしぎね}。本多利實とその弟子により前打起こしによる射法が大正から昭和の初期にかけて流行した。本多利實は、大正6年(1917)10月に不慮の事故にて没しているが、後に弟子たちにより本多流祖と称された。現在行われる打起こしの方法の1つ、いわゆる正面打起こし射法にも本多利實による新射法の影響が少なからず継承されている。

(注7) 昭和20年(1945)11月6日文部省発体80号「終戦ニ伴フ体錬科教授要目ノ取扱ニ関スル件」、12月26日文部省発体100号「学校体錬科関係ノ処理徹底ニ関スル件」により、学校における武道(剣道、柔道、薙刀、弓道)の授業は全面的に禁止され、課外の部活動としての実施も禁じられた。文部省(現、文部科学省)は学校教育における戦時色の払拭に努め、武道に関する免許状も無効の扱いとした。

(注8) 平成12年度の調査では8県13校のみが弓道を授業で実施しているだけである。しかも専任の保健体育教員が授業を担当しているのは13校中8校のみである(全国高体連弓道専門部『平成12年度正課体育弓道実施校実態調査報告』)。弓道授業を担当できる保健体育専任教員の少ないことをはじめ、施設、用具などの諸問題から正課として実施する高校は極めて少数と言わざるを得ない。課外活動としての弓道は2,100校で実施され、部員数も64,975人(平成19年6月30日現在、全国高体連弓道専門部調査)というように、大いに普及されたが、正課としての弓道普及は今後の課題といったところである。

■弓道についての主な文献

- 『日本武道全集第3巻弓術・馬術』：今村嘉雄、他 人物往来社 1976
各流派の解説があり、それぞれの流派を代表する伝書を掲載。
- 『現代弓道講座全7巻』：宇野要三郎監修 1968初版 雄山閣 1982第2版
弓道史から弓道科学に至るまで、充実した内容で、弓道を研究する上でおいに参考となる書籍。
- 『弓道資料集全15巻』：入江康平編 いなほ書房 1986~2001
編者の論文・解説と、各流派の伝書を掲載。
- 『近世日本弓術の発展』：石岡久夫 玉川大学出版部 1993
各流派発展の様相、通し矢競技について詳しい。資料として年代矢数帳も掲載。
- 『紅葉重ね・離れの時機・弓具の見方と扱い方』：浦上栄著、浦上直・浦上博

子校注 遊戯社 1996

弓具の取り扱い・製法を史的観点からも理解することのできる充実した内容。射術についても理論的で詳しい。

- 『近代弓道書選集全9巻』：入江康平編 本の友社 2002

近代弓道における貴重・希少文献を復刻したもの。明治～昭和の弓道史を知る上で参考となる。

- 『弓道人名大事典』：小野崎紀男 日本図書センター 2003

弓道史上の人名を調べる際におおいに役立つ事典。

- 『日置の源流－備中足守藩吉田家弓術文書－』：岡山大学体育会弓道部 OB 会編 太陽書房 2005

足守藩に伝わる弓術とその伝書の解説を含み、地方の弓術の歴史を知ることのできる書籍。

- 『日本弓道史料第1～10巻』：小野崎紀男編 太陽書房 2006～2013

弓道歴史年表形式の書籍。弓道研究上有益。10巻は昭和45年まで掲載。

第5章

柔道の歴史とその精神

柏崎 克彦

は じ め に



今日、世界で「柔道」と呼ばれているものは、正確には嘉納治五郎（1860～1938）によって創始された「日本伝講道館柔道」のことである。

柔道の世界的統轄組織である国際柔道連盟（IJF）の規約第1条には「国際柔道連盟は、嘉納治五郎により創始された心身の教育システムであり、かつオリンピック実施種目としても存在するものを柔道と認める」と記されている。

その嘉納が柔術諸流を学び、講道館を創立したのは1882年（明治15年）5月、東京の永昌寺においてである。

それから120数年を経た今日、柔道は世界199の国と地域に普及した（IJF 加盟国）。

現在、国際柔道連盟の会長はオーストリアのマウリス・ビゼール氏であり、世界一の柔道大国は、日本の3倍の登録柔道人口を持つフランスである。また、競技面では、2007年9月リオデジャネイロで開催された世界柔道選手権大会には、138ヶ国748名の男女の選手が参加したが、日本選手の優勝は、男女共8階級中、男子1名、女子2名という結果であった。あらゆる面で日本の柔道が世界の「JUDO」になったことが窺える。

一方国内に目を向けると、2006年度、全日本柔道連盟への登録者数は、総数で約20万人。その内訳は、指導者及び一般登録が約5万2千人、大学生1万5千人、高校生3万5千人、中学生以下10万人であり、全国2,914の高校に男子柔道部が、1,616の高校に女子

柔道部が存在する。

また、文部科学省は、2011年度から中学における武道の必修正課化をスタートする予定である。求めているのは、武道に対する伝統的な考え方を理解し、それに基づく動作を身につけることである。武道の伝統的な考えとは「武道は、社会に貢献できる人間作りを目指している」という事であり、特に礼儀作法とその意義及び生活化は武道教育に大いに期待されている。当然柔道も重要な役割を担うことになる。

このように、柔道は競技スポーツとしても、また教育システムとしても、広く世界に受け入れられ社会的役割を果たしている。



2004年アテネオリンピック

I. 柔道の伝統

1. 柔術から柔道へ

柔道は、嘉納治五郎の手によって1882年（明治15年）に創始されたが、その基礎となったのが日本古来の「柔術」である。さらにこの「柔術」の起源を探ると平安後期（11世紀末～12世紀末）の源平時代の「組み討ち」にあったといえる。

当時の戦（いくさ）は、まず遠くから矢を打ち合い次いで接近して槍や刀で戦う。それで相手をうち負かすことが出来なければ最後

は組み合ってトドメをさすか取り押さえる。この「組み討ち」が体系化され思想や伝承方法が確立されてできあがったのが「柔術」である。柔術はその流派によっては、小具足、捕手、羽手、拳法、和術、柔、柔術体術、骨法、組討等の名称で呼ばれているが、江戸中期頃からは一般に柔、柔術の名称で呼ばれるようになる。

現在、この柔術の源流と見なされているのが「竹内流小具足腰の廻」である。竹内流の開祖は竹内中務大夫久盛(1503～1593)であり、『本朝武芸小伝巻の九』によれば1532年にこの柔術を創ったとされている。この流派もその後、竹内畝流、竹内三統流、高木流、力信流等30数派に分流・支流し幾つかの流派は現在もなお伝承されている。

ちなみに、熊本藩に広く普及した竹内三統流も今日まで受け継がれている流派であるが、本学創立者松前重義博士もこの流派の継承者の一人であった。

江戸末期になると多くの流派がさらに枝分かれし167の柔術流派があったとされている。

嘉納が最初に学んだ柔術は「天神真楊流柔術」である。この柔術は磯又右衛門正足(1804～1863)が真之新道流と楊心流の柔術を修行して幕末期に作ったものである。

嘉納は、東京大学文学部に入学した1878年、初めて福田八之助に天神真楊流柔術の手ほどきを受ける。しかし、福田が亡くなったことにより20才の嘉納は天神真楊流三代目磯正智の門を叩く。天神真楊流は当て身、固め技に優れており「形」による稽古が中心であった。嘉納は講道館創立後数年を経て真剣勝負の形13本をつくるが、これは、天神真楊流の当て身、捕縛術系の形を基につくられたものであり、これを僅かに手直ししたものが今日行われている「講道館極の形」である。

嘉納は1881年（21才の時）さらに「起倒流柔術」の飯久保恒年にも入門し異なった柔術を学ぶ。起倒流は江戸初期に茨木又左衛門俊房が創始した鎧組み討ちの柔術である。当初は起倒流乱と呼ばれたが後に起倒流柔術、江戸中期以降は起倒流柔道とも名付けられた。起倒流は投げ技に優れた柔術であり、その形は高度な術理を示すことから嘉納は「古式の形」と名付け講道館の形に定め現代に受け継いだ。

嘉納は二つの流派を学ぶことで、流派によって技法や指導法に大きな差のあることを知る。同時に教育的価値の高いことと、柔術が我が国に伝わる重要な文化財であることを自覚する。この柔術に若干の改良を加えたなら、体育、精神の修養、さらには処世を学ぶ方法としても役立つと信じた嘉納は、東京都下谷区北稻荷町の永昌寺の書院に講道館という名の道場を開く。広さはわずか12畳であった。



『天神真楊流柔術極意教授図解』（明治26年）より

2. 講道館柔道の発展

東京大学を卒業した嘉納は、学習院に勤めるかたわら起倒流柔術を学ぶと共に自ら創設した講道館で弟子と共に柔道の稽古と研究に明け暮れる。もっとも、講道館創設と同時に多くの弟子が集まったわけではない。入門者は、最初の年である1882年が9名、翌年は8名、3年目も10名と3年間で30名にも満たない。ところが、間もなくその後の講道館柔道発展の大きな要因となる嘉納による柔術の「近代化」、すなわち、技術の体系化、指導法の確立、段位制度、教育的価値の強調等が功を奏し始める。同時に門人が他流との試合で活躍し始めたことも相まって門人の数が一気に増えることになる。

そのため、年表1に見るように、道場を富士見町に移した1886年頃から道場の広さが段階的に拡大化している。1920年には門人の数の累計は2万3千人におよんでいる。

嘉納の推し進めた主な柔術の「近代化」は以下の通りである。

① 技術の体系化と指導法の確立

今日の柔道の名称と分類方法を見ると明らかなように、柔道の技は、術理にかなうように分類され体系化されている。投げ技は、主に体のどの部分を使うかによって手技、腰技、足技、真捨て身技、横捨て身技に分類され、固め技は、抑え技、絞め技、関節技に分かれる。名称はそれまでの「鍾木（しもく）」「下り藤」「矢はず」といったものから多くの人が容易にイメージできる「送り足払い」「背負い投げ」などの名称に改められた。同時に、指導段階を示した「五教の技」^(注1)や目的に応じた「形」^(注2)を作り指導法を確立した。

② 試合審判規定の制定

柔術の「スポーツ化」ともいえる。安全で公平に競技が出来るよ

うに審判規定^(注3)を作り、当身技など危険な技は、乱取りや試合からは除外し「形」として残した。

③ 段位制度の導入

講道館創立の翌年（1883年）、嘉納は富田常次郎と西郷四郎に講道館初段を授与した。これは、修行者のモチベーションを高めるための制度と言える。もちろん、竹内流柔術などでも習熟度によって「達者」「目録」「次臈」「免許」「印可」などと昇格する制度があったが、さらに分かり易くし区分を多くした。段位制度は、囲碁将棋の世界には以前からあったが、武道の世界への導入は嘉納が最初である。後に全ての武道がこの制度を導入することになる。ちなみに、今日有段者の象徴ともいえる黒帯を締めるようになったのは段位制度を導入した3～4年後であった。

④ 教育的価値の強調

講演、雑誌の発行^(注4)などを通して、柔道は「体育（健康）」「勝負（技術の習得）」「修心」の目的を持って行うものとし、その道標となる思想は「精力最善活用」と「自他共栄」であることを強調した。

以上のような柔術近代化への努力が、今日の柔道普及の礎を築いたものといえる。

●嘉納治五郎と柔道の略歴年表（年表1）

- 1860年 10月 兵庫県御影（現在神戸市）に嘉納治朗作希芝の三男として生まれる
- 1870年 新政府に出仕した父に伴われ上京
- 1878年 天神真楊流柔術を福田八之助に学ぶ
- 1881年 7月 東京大学文学部卒業
- 1882年 1月 学習院講師

- 2月 嘉納塾創立（～1919）
- 3月 英語学校「弘文館」創立（～1889）
- 5月 講道館創立 永昌寺道場 12畳
- 1883年 10月 起倒流柔道の免許皆伝を受ける
- 5月 道場を移転 上二番町道場 20畳
- 1885年 4月 学習院幹事兼教授
- 1886年 6月 学習院教授兼教頭
- 道場を移転 富士見町道場 40畳
- 1889年 講道館「柔の形」「固の形」「五教の技」制定
- 4月 道場を移転 真砂町道場 60畳
- 1891年 8月 第五高等中学校長
- 1893年 1月 文部省大臣官房図書課長
- 6月 第一高等中学校長
- 9月 高等師範学校長
- 12月 道場を移転 下富坂道場 107畳
- 1895年 大日本武徳会設立
- 1896年 6月 清国よりの留学生を受入開始
- 1898年 6月 文部省普通学務局長
- 1907年 11月 道場を新設 下富坂、大塚坂下併置道場 207畳と
107畳
- 1909年 11月 国際オリンピック委員会委員
- 1911年 7月 日本体育協会創設（会長に就任）
- 1912年 7月 第5回オリンピック大会日本団長
（日本初参加・ストックホルム）
- 1920年 1月 東京高等師範学校校長退任
- 1926年 11月 講道館女子部発足
- 1930年 11月 第1回全日本柔道選士権大会
- 1933年 1月 道場を移転 水道橋道場 514畳

1938年 3月 IOC 総会にて1940年東京五輪誘致に成功
 帰路、肺炎のため氷川丸船中にて永眠（享年77才）
 南郷次郎（嘉納治五郎の甥、門人）二代目講道館長
 就任

《本文注》

（注1）投げ技指導の要目。42本からなり、1895年（明治28年）に制定される。その後、1920年（大正9年）改正され40本となり今日に至る。

（注2）形による稽古法は我が国伝来の修練方法といえる。乱取（自由練習）で使われる技の理論と實際を学ぶ「投の形」「固の形」は、明治17.8年の頃制作される。「投の形」は最初10本からなり、後に15本となった。

（注3）最初の講道館柔道乱捕試合審判規程は1900年（明治33年）に制定された。これによって、指、手首、足首、首の関節技が禁止となる。最初の改正は1916年（大正5年）に行われ、胴絞め、足蹴（あしがらみ）などの危険な技も禁止された。

（注4）嘉納が主宰、監修した雑誌は多い。明治31年～36年『国土』、大正3年～7年『柔道』、大正8年～11年『有効乃活動』、大正11年『大勢』、大正13年～昭和13年『柔道』など。現在は『柔道』として引き継がれている。



嘉納治五郎（右）と三船久蔵十段『柔道百年の歴史』（1979/講談社）より

II . 柔道の展開

1. 学校柔道の展開

柔道の展開を学校柔道を通して見てみたい。

1883年（明治16年）、文部省は学校体育に武術を取り入れることの是非を検討した。依頼を受けた体操伝習所は、10月、実習の際危険であり、粗暴に成り易いなど9の理由を上げて、正課としては不適当だとの答申をおこなった。

これに対し嘉納は1889年（明治22年）「柔道一班并ニ其教育上ノ価値」と題した講演をおこない、柔道の持つ優れた教育性について述べる。

1911年（明治44年）7月、中学校令施行規則改正に伴い、撃剣及び柔術が体操科教材として正課に加えられる。ただし選択科目である。

1926年（大正15年）5月、学校体操教授要目が改正になり撃剣及び柔術は剣道と柔道に改められ、競技においては特に礼節を重んじ勝敗にとらわれないことが明記された。

1931年（昭和6年）1月、文部省令の改正により柔道、剣道は選択科目から必修科目となる。

1939年（昭和14年）5月、戦争気運の高まる中、尋常小学校5年以上と高等小学校男児は課外授業において武道（柔道・剣道）を行うことになる。

第二次世界大戦に入ると、武道は戦闘技術としての面のみが強調された。

このことにより、戦後（1945年）GHQ（連合国軍総司令部）は

学校武道を禁止することになる。

しかし、本来の柔道は高い教育的価値を持つものであるとの認識は、すでに多くの駐留外国人もよく理解しており、社会体育の場、すなわち講道館や町道場では終戦直後から柔道は行われていた。ちなみに、もっとも激戦地となった沖縄でも終戦の昭和20年、いち早く沖縄柔道連盟を立ち上げている。

1950年（昭和25年）10月、GHQの許可により文部省は中学校以上の柔道復活を認める。昭和26年からは、レスリング、ボクシング同様の選択教材となり、昭和33年から中学では柔道、剣道、相撲は「格技」の領域に分類される。

この「格技」から本来の「武道」に名称が改められたのは1989年（平成元年）のことである。

そして、2007年9月、中央教育審議会の専門部会は、中学校の保健体育の授業の中で武道とダンスを男女とも必修とする案をまとめた。

これは、2006年12月改正された教育基本法で、教育の目標に「伝統と文化の尊重」が掲げられたことから、「武道は日本の伝統や文化を知るために役立つ」と判断したからである。

新指導要領は、早ければ2011年から実施される予定である。

2. 柔道国際化の要因

柔道の展開を、国際化の流れを通して見てみたい。

柔道の高い教育性が理解され、戦後間もなく解禁されたことと、世界に広く普及した背景には幾つかの要因があった。
嘉納の活動から順に項目をあげて述べたい。

(1) 嘉納自身の海外における普及活動

嘉納が海外に赴いて最初に柔道を紹介したのは1889年(明治22年)のことである。フランスのソロボンヌ大学等で柔道の紹介がなされたことが記録に残されている。

その後、嘉納は11回の海外渡航を行っているが、そのつど、卓越した語学力を駆使し柔道の原理と思想を世界に知らしめた。

嘉納の渡航歴は以下の通りである。

回数	年	期 間	主な訪問先	主 な 目 的
1	1889	約1年4ヶ月	欧州諸国	・教育事情の視察と柔道紹介
2	1902	約3ヶ月	清国	・教育と柔道を紹介
3	1905	約3ヶ月	清国	・教育と柔道を紹介
4	1912	約8ヶ月	欧州・米国	・第5回オリンピック日本選手団団長 ・欧米の教育事情視察と柔道紹介
5	1920	約8ヶ月	欧州	・第7回オリンピックに役員として出席 ・欧米の教育事情視察と柔道紹介
6	1921	約3週間	上海	・第5回極東競技大会にIOC委員として出席
7	1928	約4ヶ月	欧州	・第9回オリンピックに役員として出席 ・欧米の教育事情視察と柔道紹介
8	1928	約1週間	上海	・各国陸戦隊に柔道を指導 ・日本人学校の柔道大会出席及び講演
9	1932	約2ヶ月	米国	・第10回オリンピックに役員として出席 ・柔道指導と紹介

10	1933	約 6 ヶ月	欧州	<ul style="list-style-type: none"> ・柔道の紹介（国際柔道連盟構想発表） ・第12回オリンピックの東京誘致活動
11	1934	約 4 ヶ月	欧州	<ul style="list-style-type: none"> ・IOC 委員会出席 ・柔道の普及活動
12	1938	約 2 ヶ月	カイロ	<ul style="list-style-type: none"> ・IOC 委員会出席（第12回オリンピックを東京に誘致することに成功） 帰路氷川丸船上にて病死

（２）若い柔道家による普及活動

古くは、海軍軍人であり講道館門人であった広瀬武夫（1868～1904）が、ロシア駐在武官として赴いていた1897年（明治30年）から1902年（明治35年）の間、ロシアにて柔道を披露している。また、軍人湯浅竹次郎も1897年、豪州のメルボルンに寄港した際サヴェージクラブで柔道を実演し紹介している。1902年には、同じくメルボルンに軍艦「比叡」が寄港した際、後に講道館2代目館長となる南郷次郎が市議事堂で形を披露している。この他にも、この時期に柔道を学んだ軍人の手によって海外に於いて講道館柔道が紹介されたことが予想される。

しかし、嘉納の命によって正式に講道館柔道の海外普及のために渡航したのは、1903年9月、夫人と共に渡米した山下義韶（1865～1935）が最初である。

山下は、講道館四天王の一人で最初に講道館柔道十段を授与された人物である。小田原藩武芸指南役の家に生まれた山下は、1884年8月講道館入門、順調に段位を進め1898年に6段に昇段。この間、東京帝国大学柔道教授囑託、警視庁柔術世話係掛、慶應義塾囑託となっている。当時山下は相当の実力者だったと考えられる。

北米の鉄道王と呼ばれたサミュエル・ヒルの招きで渡米した山下は、1907年に帰国するまでに時の大統領セオドア・ルーズヴェルトを始め各階の名士に柔道を教えると共にハーバード大学やアナポリス海軍兵学校においても指導している。

次いで講道館の派遣により渡米したのは、1904年の富田常次郎(1865～1937)、前田光世、佐竹信四郎である。後に、前田と佐竹は富田と別れ世界各地でボクサー、レスラー達と他流試合を行い柔道の強さを伝え歩いている。グレーシー柔術の父エリオ・グレーシーに柔道を教えたのは前田である。

1906年にはハンガリーからの招聘を受けて、東京高等師範学校師範、助教授の佐々木吉三郎が講道館から派遣されブタペストにて柔道を指導している。

この他にも、この時代、講道館の正式派遣ではないものの、小泉軍治、谷幸雄が英国を中心に、大野秋太郎、伊藤徳五郎がブラジルを中心に演武や他流試合等で柔道や、柔術を紹介している。

1920年に入ると、英国のロンドン武道会の指導者として會田彦一が嘉納の命によって渡英する。その後、會田はフランスに渡りフランス柔道の基礎を築くことになる。

アジアに於いては、1922年には高垣信造が講道館の派遣によりインド、ネパール、アフガニスタンで柔道の指導普及に務めている。

この後も多くの柔道指導者が海外に赴き柔道の魅力を伝えている。当時の資料から柔道は優れた格闘技であり護身術として高い評価を受けたことがうかがえる。

(3) 日本人移民による普及活動

日本人移民による影響も大きなものがある。日本から移民した人々の数は、米国だけでも1895年(明治28年)には6千人を数え

たとの記録がある。1900年代になるとさらに多くの日本人がカナダ、アメリカ、ブラジル等に移民をしている。

日本からの移民の中には、柔道や剣道など日本の武道を通して、子弟に日本文化を教育すると共に、地元民とのコミュニケーション手段として道場を開設する人々もいた。

カナダを代表するスチーブストン柔道クラブもその一つである。このクラブは、これまで多くのナショナルメンバーを輩出した名門である。その歴史を以下に紹介する。

1900年初頭、カナダ・BC州リッチモンド市スチーブストン近郊に漁師として移民した日本人の子弟は、日本語学校で学ぶ傍らその学校で柔道の練習を始めた。これがスチーブストン柔道クラブの始まりである。その後、1936年、リッチモンド市に隣接するバンクーバー市に日本人移民による柔道有段者会が設立される。この組織は、本来国内に於ける柔道の有段者間の親睦と柔道の普及を図るために1921年（大正10年）講道館でつくられたものである。それが、海外で支部的に組織され柔道の普及に尽くした。1937年（昭和12年）までにつくられた海外の有段者会は、中国の天津（1927年）、上海（1928年）、ホノルル（1933年）、ロサンゼルス（1935年）、バンクーバー（1936年）、シアトル（1936年）、サンフランシスコ（1936年）、北マリアナ諸島のテニアン島（1937年）の8つである。

ところで、1942年、第二次世界大戦に伴う日系人強制収容がおこなわれクラブは閉鎖されたが、戦後の1953年、敗戦で自信を失いかけていた日系移民の心の拠り所として再び道場を復活する。数度の移転の後、現在の道場をコミュニティセンター内に建設する。この道場は、柔道場、剣道場そして日本庭園を持ち、日系人と地元カナダ人が入り交じって稽古に励んでいる。^(注1)

また、移民ではないが、商社マンとして、あるいはジャーナリストとして海外に赴任し柔道の普及に尽くした人も多い。

(4) 親日、知日家による普及活動

1952年、フランス柔道連盟の機関誌『JUDO』9月号に、当時のフランス柔道連盟事務局長で知日家のマルスランが「柔道はスポーツか?」と題する一文を載せている。このテーマは柔道の普及発展の中で必ず各国で話題となるが、彼は「柔道はスポーツだが、それは又スポーツ以上のもので、道徳的な潔癖さ、沈着冷静さ、心の均衡を兼ね備えた一つの生き方を学ぶことができる」(『世界にかけた七色の帯』吉田邦子より引用)と述べ柔道の持つ哲学、思想の魅力を伝えている。

英国・ロンドン生まれのトレバー・レゲット(1914~2000)も柔道の普及に努めた一人である。レゲットは、1938年に来日し在日英国大使館に勤務、その後BBC(英国放送協会)日本語部長として日英文化交流に尽くした柔道6段の親日家であり知日家でもあ



松前重義博士と T. レゲット氏『武道思想の探究』(東海大学出版 1987)より

った。彼も『紳士道と騎士道』を初めとする多くの著書によって柔道の技術と思想の魅力を広く世界に伝えている。レゲットは、国際武道大学の客員教授であった。

この他にも、講道館で柔道を学んだ多くの親日、知日の外国人が柔道の魅力を海外に伝えた。

(5) IJF の発展

1948年、戦後最初のオリンピック大会がロンドンで開催された。この時、イギリス、フランス、イタリア、オランダの柔道関係者が集まり欧州柔道連盟を発足させる。

その後、ヨーロッパ以外の国々からも加盟を希望する声があがり、1951年その名称を国際柔道連盟(IJF)とする(会長アルド・トルチ「イタリア」)。

しかし、本家日本やアフリカ等の加盟もなく実質的には国際的組織と呼べるものではなかった。翌1952年、日本の加盟がIJF臨時総会で承認され、同時に嘉納履正講道館館長がIJF会長に就任する。日本が加盟した1952年当時、加盟国は17ヶ国であったが、IJF及び各大陸連盟の努力により今日では199の国と地域が加盟するまでになった(2007年現在)。

年表2が示すように、嘉納履正会長以後これまで6人のIJF会長が誕生している。しかし、日本人は松前重義ただ一人である。松前は会長就任後(1979年)IJFの組織に新たに教育普及委員会を立ち上げ更なる柔道の普及に取り組む。^(注2)同時に女子柔道に着目し1980年11月、第1回世界女子柔道選手権大会を開催(米国・ニューヨーク・参加27ヶ国)、女子柔道のオリンピック種目入りに大いに貢献した。^(注3)

女子柔道に国際的な発表の舞台が設けられたことは、その後の柔

道発展に大きな影響を与えたと言える。

(6) オリンピック種目入り

1964年、第12回オリンピック東京大会において柔道は五輪種目の仲間入りを果たした。この東京大会に参加したのは、27カ国74名であるが、柔道が五輪種目入りしたことでさらに多くの国々の注目を集めた。また同時に、各国はそれぞれの民族の格闘技の技術を柔道に取り入れメダルの獲得に乗り出した。現在、ロシアスタイル柔道、韓国スタイル柔道などの呼び名があることもその証である。この事も、柔道が世界に普及した一因であろう。今日では、すべての大陸にメダルが散り日本選手は厳しい戦いを強いられている。^(注4)

以上、国際化の主な要因を述べたが、世界の多くの人々は柔道に内在する日本文化、思想、哲学、技術に魅せられたことがうかがえる。これらは今後柔道の歩むべき道を示唆していると考えられる。

●戦後柔道の展開（年表2）

- | | | |
|-------|-----|--------------------------------------|
| 1945年 | 11月 | 学校における柔道禁止
嘉納履正（嘉納治五郎次男）三代目講道館長就任 |
| 1948年 | 5月 | 第1回全日本柔道選手権大会開催 |
| 1948年 | 7月 | 欧州柔道連盟結成 |
| 1949年 | 5月 | 全日本柔道連盟結成 |
| | 11月 | 国民体育大会に柔道加わる |
| 1950年 | 10月 | 学校における体育教材に柔道認められる |
| 1951年 | 7月 | 欧州柔道連盟が国際柔道連盟（会長アルド・トルチ・イタリア）と改称 |

- 1952年 12月 国際柔道連盟（IJF）に日本加盟。会長に嘉納履正全柔連会長が就任
（加盟17ヶ国）
- 1956年 5月 第1回世界柔道選手権大会開催（東京・参加21ヶ国）
- 1958年 3月 道場を移転 春日町道場 500畳と6小道場
- 1964年 10月 第18回東京オリンピックにて初めて柔道競技開催
（参加27ヶ国）
- 1965年 10月 嘉納履正 IJF 会長選に敗れる。P・パーマー（英国）
会長に就任
- 1979年 12月 松前重義 IJF 会長に就任
- 1980年 2月 嘉納行光（嘉納履正長男）四代目講道館長就任
11月 第1回世界女子選手権大会開催（アメリカ・ニュー
ヨーク・参加27ヶ国）
- 1984年 4月 講道館改築（国際柔道センター）六道場延べ1300
畳
- 1987年 11月 サルキス・カログリアン（アルゼンチン）IJF 会長
に就任
- 1989年 10月 会長不信任案可決。ローリー・ハーグリーブ IJF 会
長代行就任
- 1991年 7月 ルイス・バゲナ（スペイン）IJF 会長就任
- 1992年 7月 女子柔道五輪種目となる（バルセロナ大会）
- 1995年 9月 嘉納行光 IJF 会長選に敗れる。パク・ヨンスン（韓
国）会長就任
パク会長辞任。マウリス・ビゼール（オーストリア）IJF 会長に就任。IJF 教育・コーチング理事選
に山下泰裕敗れる。IJF の日本人理事はゼロとなる。
IJF 会長指名理事（投票権無し）に上村春樹指名さ
れる

《本文注》

(注1) 2003年11月、戦後スチーブストン柔道クラブ道場が再開して50年を迎えたことを記念した式典が盛大に開催された。式典には国際武道大学柔道部が招待を受け、親善試合と合同練習を行った。帰国後、柔道部員の報告書には「道場でのマナーは日本以上の厳しさであり、日系の指導者からは日本武道を伝える使命感と誇りを強く感じた」との記載が見られた。

(注2) 1990年IJF教育普及委員長に就任した佐藤宣踐氏（東海大学教授）は日本国内に於いて「リサイクル柔道衣運動」を行った。これは、高校の授業等で使い終えた柔道衣を世界各地の後進国に無料で送る運動である。この運動は次のIJF教育普及委員長中村良三氏（筑波大学教授）、さらには山下泰裕氏（東海大学教授）に引き継がれた。山下氏が任期を終えた2007年までに約33000の柔道衣が139ヶ国に送られている。2008年からは講道館、NPO法人柔道ソリダリティー（理事長山下泰裕）が継続して行っている。

(注3) 1980年の第1回女子世界選手権大会以後順調に大会は開催される。1988年のオリンピックソウル大会で女子柔道は公開競技となり、1992年のバルセロナ大会からオリンピックの正式種目となり今日に至る。世界の女子柔道人口は大幅に増えた。

(注4) 近年、柔道の試合ルールは分かりにくいとの声も聞かれる。しかし、基本的に柔道は、投げる、抑える、絞める、関節を決める、からなるいたってシンプルな組み討ち系自由格闘競技である。

世界にはレスリング、ロシアのサンボ、スイスのシュビング、トルコのヤーブルェツェ、韓国のシルム、モンゴルのブフ等々数多くの格闘技があり、各国はこれらの民族格闘技術を柔道に取り入れている。今日の国際大会は、かつての講道館創立時の各流派の戦いにも似ている。

Ⅲ．柔道の理念

柔道の理念について述べたい。柔術を学んだ嘉納は自ら新たな流派を興すに当たり「講道館」と「柔道」と言う名称を用いた。この事は、嘉納の思想を説く上で大きな意味を持つことになる。

まず、「講道館」である。「道」を講ずる館と書くように、「術」のみではなくあくまで「道」（人の生き方）を重んじ、「道」を講ずると言うことから命名している。言い換えれば、「道」が本体であって「術」は付随したものでありかつ「道」に入る手段と考えたのである。したがって「講道館」は柔道を通じた「人間教育の場」であるとの考えから生まれた名称といえる。

次に「柔道」の名称だが、当時あまり評判の良くなかった武術に対するイメージチェンジを図り「道」を強調したものである。これらは全て、嘉納の教育家的な精神によって生み出されたものといえる。

嘉納の考えた柔道の定義と目的は「柔道は心身の力を最も有効に使用する道である。柔道の修行は、攻撃防御の練習によって身体精神を鍛錬修養し、斯道の神髓を体得することである。そうして、これによって己を完成し世を補益することが柔道修行の究極の目的である」（大正4年『柔道』）の言葉に集約される。

後に嘉納は柔道の修行には以下に記す上中下の三段階があることも述べている（大正7年『柔道』）。これは柔道修行の順序と目的を、分かり易く説明したものである。

- 最初に行う「下段の柔道」とは、あらゆる場面における攻撃防御の技術を練習することである。
- 「中段の柔道」は、修行を通して身体の鍛錬と精神の修養をすることであり、これには練習によって得られる快感、愉快さ、美的情操なども加わる。
- 最後の「上段の柔道」とは、下段、中段の柔道の修行において得た身体精神の力を最も有効に使用して世の利益のために応用し役立てることである。

以上のような考えから講道館柔道の二大道標である「精力善用」

と「自他共栄」の思想が生まれた。

「精力善用」とは、無駄なく有効に身体と精神を働かすと言うことであり、柔道の技術に一貫する原理であると共に社会生活全般に渡って欠くことのできない原理であるとの思想である。

「自他共栄」に関しては、さらにこの思想を唱えるまでの嘉納の考えを見てみたい。

嘉納は、「柔道修行で得た全てのことを世の中の商業、政治、教育等のことに応用すべきである。そのためには“自他の関係を見るべし”」と述べている（明治22年「柔道一班并ニ其教育上ノ価値」）。



嘉納治五郎の書『柔道百年の歴史』（1979/ 講談社）より

さらに、明治33年の『国土』誌上では、「世の中のことは、たとえ個人間であっても、団体間であっても、国際間であっても単独で成しえることは、甚だ少ない。互いに譲り合い、互いに助け合って共同の目的を達することが必要だ」との趣旨を述べている。後には「世界全般にわたっては、人種的偏見を去り文化の向上と均等化に努め人類の共栄をはかる」（大正11年『大勢』）との記載もある。

この講道館の二大道標「精力善用」と「自他共栄」は便宜的に二つに分けたものであるが、本来は一つのものであるとされる。なぜなら、個人を完成させることは、必然的に「自他共栄」の高い境地に至ることであるとする考えからである。

この二大道標を公式に並べて提唱したのは大正 11 年講道館文化会を起こした時である。

ところで、2001 年 7 月 18 日付の朝日新聞に、イタリアのジェノバで開催された主要国首脳会議（サミット）において、議長国イタリアのベルルスコーニ首相が、参加各国の首相に『柔道 これが人生』というタイトルの本を進呈した記事が載った。嘉納治五郎の説く柔道の精神「精力善用」「自他共栄」の精神でこのサミットに臨もう、と呼びかけたものである。嘉納の唱えた柔道の理念は今日も色あせることなく多くの人々に受け継がれている。

おわりに

日本古来の柔術が講道館柔道に、講道館柔道が世界の JUDO 変貌を遂げた。世界各地の大会では青色の柔道衣が使用され、日本人にとって見慣れない技術も多用されるようになった。しかし、国際柔道連盟のホームページには次のような一文が記載されている。

「Judo gives its students a code of ethics, a way of living, and a way of being.

They learn how to control their feelings, emotions, and impulses. They learn about values of perseverance, respect, loyalty, and discipline. Judo students develop an outstanding work ethic, as well as important social manners and etiquette. They learn to overcome their fears, and to show courage under pressure. Through competition and the rigors of daily practice, they learn about justice and fairness. Through their experience, they learn about politeness, modesty, and many other wonderful values that contribute to their development as successful citizens of society.

（概略：柔道は、それを学ぶ者に倫理の習慣、生きる方法と存在することの意義を教える。

柔道によって彼らは、彼らの感情、欲求と興奮を制御する方法を学ぶ。彼らは、忍耐、尊敬、誠実と規律の価値について学ぶ。柔道を学ぶ者は、社会的に重要なマナーとエチケットと同様に顕著な労働倫理観を発育させる。彼らは、彼らの恐れを克服して、圧力の下で勇気を示すことを学ぶ。毎日の実践される競争と厳しさを通して、彼らは正義と公正さについて学ぶ。彼らの経験を通して、彼らは礼儀正しさ、謙虚さ、そして社会の成功者となるために彼らに必要な他の多くの素晴らしい価値観について学ぶ)」。

上記の文では、柔道は単なる格闘競技ではなく高い教育的価値と思想を持ったものであることが強調されている。すなわち、世界の柔道人は、嘉納治五郎の思想に誇りを持ちそれを受け継ごうとしていることがこの文章から理解できる。

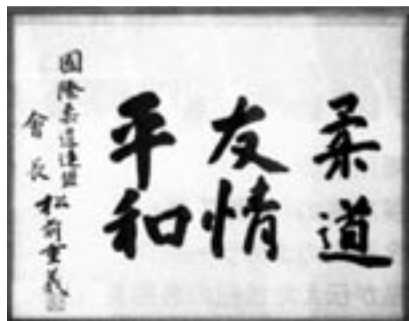
ともすると、私たちは見慣れない外国人の柔道技術やオリンピッ

クに代表される競技柔道に目を奪われがちである。しかし、日本の約3倍の柔道人口をもつフランスでも、その柔道人口を支えているのは試合をしない8歳前後の子供たちである。柔道の持つ教育的価値に着目し、青少年の教育に役立てているのである。

本学の創立者松前重義博士は、1979年、国際柔道連盟会長に就任したおり、色紙に「柔道・友情・平和」と書いて各国の柔道関係者に送った。文字通り、柔道を通して友情を育み世界の平和に貢献しよう、との思いからである

前述したように、松前博士はIJF 会長就任後、連盟に新たに教育普及委員会を立ち上げている。柔道本来の目的を見失うことなく世界の多くの人々に正しい柔道を伝え普及したいと考えたからである。その深い思いの中で1984年、国際武道大学が創立された。

本学学生にとって、日本の武道文化の一つである柔道を正しく学び、正しく伝えることは大きな使命の一つである。



各国の柔道関係者に贈られた松前 IJF 会長の書

■柔道についての主な文献

- 『嘉納治五郎著作集』講道館監修 五月書房 1983
嘉納治五郎が書き残した文献を教育篇、柔道篇、人生篇に分類し松本芳三が解説を加えたもの。
- 『武道の誕生』井上 俊 吉川弘文館 2004
武道はいかに誕生したのか、講道館柔道をモデルに戦前のスポーツ化にいたる過程を探究した本。
- 『柔道の歴史と文化』藤堂良明 不昧堂出版 2007
柔術諸流派の歴史と文化、講道館柔道の歴史と文化、柔道国際化への歩み、の3章からなり柔道の歴史と文化がわかりやすく書かれている。
- 『嘉納治五郎師範に学ぶ』村田直樹 日本武道館 2001
嘉納治五郎の論文、講演原稿等を基に著者の解説を加えたもの。
- 『世界にかけた七色の帯』吉田郁子 駿河台出版社 2004
フランス柔道の父とよばれ十段を贈られた川石酒造之助の生涯を通してフランス柔道を紹介した本。
- 『柔道のコーチング』松本芳三 大修館書店 1975
柔道技術の原理、柔道技術の構造、コーチングの実際、体力トレーニング法と柔道の技術指導に関することが詳しく示されている。
- 『競技柔道の国際化』尾形敬史 不昧堂出版 1990
国際柔道連盟の誕生から今日まで柔道がどのようにして国際化されたのか、組織、審判規定、競技システム、競技内容、に焦点を絞りその変遷を著す。
- 『女子柔道論』中村良三編 創文企画 2006
女子柔道の競技史、競技傾向、技術特性、指導法、医学的諸問題等について論じたもの。女子柔道を知る上で必読の本。

第6章

空手道の歴史とその精神

マーヤ・ソリドワール

魚住 孝至

は じ め に



空手道は、突き・蹴りを中心とする徒手空拳の格闘技であり、日本の武道の一つとして世界の国々で盛んに行われている。ただし、空手道には、他の武道と異なる点が多い。

まず、日本本土ではなく、沖縄の琉球王国で形成され展開した武術に由来することである。1920年代に本土に紹介されて以降、柔道などから大きな影響を受け、30年代末頃から空手の様々な流派が大日本武徳会に次々に登録されるようになった。各流派では型の技術も教え方も異なっており、これらを統合した連盟が出来るのは、戦後1964年になってからである。1960年代になってから、突き・蹴りを相手に当る寸前で止めて自由に技を出し合う競技を行うようになった。1980年代からは、こうした「寸止め」ではなく、実際に突きや蹴りを入れる「フルコンタクト」ルールで試合を行う団体も現れている。

海外では‘KARATE’を、空手道・中国拳法・テコンドー等を含んだ徒手武術の用語として使用する場合も見られるが、日本の武道としての空手道は、以下に示すように、中国拳法や韓国のテコンドーとは大きく異なるものである。

それ故、空手道の歴史を、14世紀末から沖縄で形成・展開した段階、1920年代から日本本土において日本の武道に展開した段階、そして戦後、世界に普及する段階に分けて述べることにする。その上で、他の武道と異なる空手道の特徴とその精神について考え、現在の空手道に見られる諸問題にも触れることにしたい。

I. 空手道の伝統

1. 空手道のルーツ —琉球王国での「唐手」—

沖縄は、日本の最南端の南西諸島の中心であり、東京から1500キロ位、本土の最南端の九州から500キロ位離れており、台湾まで600キロ位、中国大陆まで700キロ位の位置にある。

空手は沖縄の琉球王国で展開した「唐手」と呼ばれた武術に由来している。「唐」は、618年から907年までの中国の王朝名で中国を意味し、「手」は、沖縄の言葉で武術を意味するので、「唐手」は中国から伝来した武術という意味である。唐手は14世紀ごろから始まったと言われるが、18世紀以前は秘密裏で伝承されていたため、文献がほとんどなく、その歴史はほとんど不明である。

14世紀は、沖縄が日本本土や中国や東南アジアと貿易・交流を盛んに行い始め、琉球王国が形成されてくる時代である。14世紀初期には、沖縄本島では南部・中部・北部に、「南山」・「中山」・「北山」（山は国の意味）という三つの王国が形成され対立していたが、1372年、中山王国は、中国の明王朝の冊封体制に入って中国との貿易・文化交流を盛んに行うようになる。1392年、中国福建省出身の「閩人^{びん}36姓」が、那覇の近くの久米村に住むようになったが、この移民によって中国拳法が沖縄に伝えられたといわれている。



図1. 日本地図と沖縄拡大図



図2.『南島雑話』の挿絵
上の方は、巻藁を示す

1429年、中山王国の尚巴志^{しょうはし}が北山、南山王国を滅ぼして統一し、琉球王国が成立した。1477年には、尚真王^{しょうしんおう}が各地域の権力者を都の首里に移し、武器の保有を禁止するようになった。そのため、武器を使わない唐手が展開するようになったといわれる。15世紀から16世紀にかけて、琉球王国は日本・中国・東南アジアとの中継貿易を盛んに行い、黄金時代を迎えることになる。

琉球王国は、1609年、九州の薩摩藩に侵略され、その支配下に置かれるようになったが、中国との冊封関係を維持し、琉球王国は中国と薩摩藩に両属しながら在続した。薩摩藩の侵略以降、武器禁止令はより厳しく実施されたので、唐手の伝承はますます秘密裏に行われた。徒手武術の唐手と共に、農具を転用した武器を使う「琉球古武術」も展開していたらしい。

唐手は14世紀に遡るといわれるが、文献にはっきりと記録された最初はずっと後の1762年の「大島筆記」である。「大島筆記」は、薩摩に向かう途中に難破し、土佐の大島浦に漂着した琉球交易船の乗組員に事情聴取したもので、中国人の「公相君^{クーシャングー}」が琉球に渡ってきて「組合術」を使ったと記述されている^(注1)。また、1850年頃、薩摩藩の名越左源太^{なごや さげん た}が著した『南島雑話』には、「拳法術」として「巻藁^{まきわら}」を使った唐手の鍛練法を示す図が掲載されている(図2)。

唐手という用語が初めて文献に出るのは、1867年開催の尚奏王冊封祝賀行事のプログラムに武芸種目として記述されているものである。

2. 唐手の三つの系統

唐手は、元々中国拳法に由来する単独で決まった攻防の型で稽古・伝承されたが、中国から伝承されてきた型は、地域によって異なっていたので、「那覇手」、「首里手」、「泊手」に区別されるようになる。この三つの流れの歴史は古いが、それぞれの系統が明確に分かるのは、19世紀後半の首里手の松村宗棍まつむらそうこん、泊手の松茂良興まつもらこうきく作や那覇手の東恩納寛量ひがおんなかんりょう以降である。この三名は三系統の中興の祖と呼ばれている。

(1) 首里手

首里は琉球王国の都であったので、首里手は、明から派遣された官僚や琉球からの進貢使や留学生として北京へ行った者が伝えた北派中国拳法から展開し、政府に勤務していた官僚等のエリートが行っていたと考えられる。

首里手の中興した松村宗棍（1809～1898）は、首里の琉球士族の家に生まれ、幼い頃から唐手を習っていたが、王国の政府に勤める中で、薩摩藩、さらに中国の福建省へ渡る機会があり、薩摩藩では示現流剣術を、福建省では中国拳法を学んで、唐手に示現流と中国拳法を融合して、首里手の基盤を築いたといわれる。松村の門人には安里安恒、糸洲安恒等がおり、この二人に師事した船越義珍は、後に日本本土へ最初に普及することになる。

(2) 泊手

泊手は、琉球王国の貿易港であった泊村の聖原寺の周辺に滞在した中国人が中国拳法を伝承したと言われ、首里手と那覇手とは異なる拳法の形が生まれた。

松茂良興作（1829～1898）は、泊手の中興の祖として知られるが、

現在まで継承される泊手の型は首里手とほぼ同じであるので、主に首里手の中で体系化したようである。松茂良の門下生から、本部朝基が出ている。

(3) 那覇手

那覇手は、1392年、福建省から久米村に移居した中国人に由来するとされ、南派中国拳法が、那覇手のルーツと考えられる。

那覇手を中興した東恩納寛量（1853～1915）は、幼い頃から唐手を習っていたが、1873年、中国の福建省へ渡って南派中国拳法を学んだ。1882年に沖縄に戻った東恩納は、1889年に沖縄の最初の道場を開設し、唐手の公開指導を始めた。門人の中で宮城長順と摩文仁賢和は日本本土でそれぞれの流派を創始することになる。

三系統の主な継承者を、後の本土での展開までを合わせて掲載する（図3）。

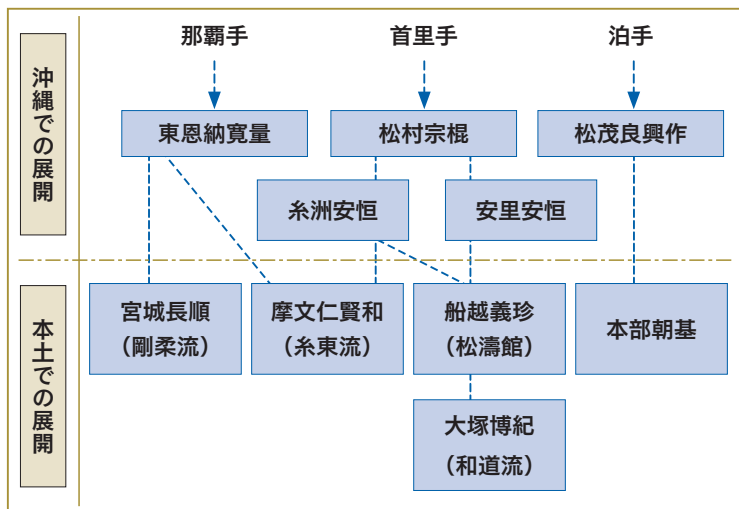


図3. 唐手（空手）の系統図

3. 沖縄における唐手の公開普及

近代日本の歴史は1868年の明治維新から始まるが、1872年（明治5）、明治政府は琉球を日本国に編入して琉球藩とし、さらに1879年には沖縄県として琉球王国を完全に消滅させ、日本国の一部とした。

この頃から、秘密裏に伝承されていた唐手が公開され始め、各地域で公開演武が開催され、地元の新聞が唐手に関する記事を書けるようになった。

1890年代から唐手が学校体育の課外活動として導入され始めたが、これは当時の時代背景と関係していた。1889年、日本では徴兵令が大改正され、学校体育でも男子の身体鍛錬及び精神教育が注目されるようになった。日清戦争（1894～1895年）の結果、清国は沖縄が日本の領土であることを認めたので、1898年には沖縄県でも国民皆兵が実施された。これらの歴史的背景があって唐手が沖縄の学校体育に採用されることになったのである。

首里手の糸洲安恒（1831～1915）は、日露戦争中の1905年に沖縄県立師範学校の唐手師範として招かれた際に、首里手の伝統的な型7つに、新しく創作した型7つを加えて、計14本を指導した。これが、沖縄県内の学校体育としての唐手の基礎となる^{（注2）}。糸洲が新たに考案した型の中には、初心者を対象とした「平安」（ピンアン）5本の型があった。

この1905年には、「唐手」は「唐手」と呼ばれて、沖縄県立第一中学校や師範学校で体育の正科として採用されるようになった。当時の学校で指導された唐手は、団体で号令下に行われる型の反復練習であり、体操に近い形の集団教育であった（写真1）。



写真1. 首里城正殿前で小学生による団体演武（『空手道大観』より）

糸洲は1908年沖縄県庁学務課の諮問に答えて、『唐手心得十箇條』を著した。この意見書で糸洲は、唐手の由来、目的、稽古法を論じ、身体鍛練としての実用性を述べるとともに、型の反復練習や巻き藁を使用した稽

古法を示した。糸洲は、唐手を日本全国にも普及させ、体育に採用すべきだと述べているが、この『唐手心得十箇條』は、糸洲の門人の船越義珍に継承され、本土普及にも影響を及ぼし、体育としての近代唐手の理論的な基礎になる。

1917年には、船越義珍、摩文仁賢和、花城長茂、宮城長順等の沖縄の有力な唐手家たちが集まり、「唐手研究会」を発足させ、唐手の研究・指導・交流活動を行った。

II. 空手道の近代化

1. 船越義珍による唐手の日本本土への普及

日本本土に沖縄の唐手を初めて本格的に紹介したのは、^{ふなこし ぎちん}船越義珍（1868～1957）である。首里の士族家に生まれた船越は、幼い頃から父の友人であった安里安恒に首里手を学び、後に糸洲安恒にも師事した。

船越は、1916～1917年に京都の武徳殿で唐手の演武を行ったが、1921年に皇太子（後の昭和天皇）が洋行途中で沖縄県に立ち寄ら

れた際の歓迎会でも、師範学校の生徒を指揮し、唐手の演武を行った。

1922年（大正11）5月7日文部省が東京で開催した第一回体育展覧会で沖縄県の代表として唐手を紹介したのは、船越であった。この際に船越は、先輩で東京高等師範学校に勤めていた金城三郎によって学校長の嘉納治五郎に紹介されたが、嘉納から富坂講道館においても演武するよう招待された。

嘉納治五郎（1860～1938）は、当時、東京高等師範学校の校長であり、日本の教育、体育行政に強い影響力を持つ者として広く知られ、嘉納が創始した講道館は当時の武道界でも先頭にあった。船越は10日後の5月17日に儀間真謹ぎま しんきんと講道館で演武を行った。350人以上の観客の中には、武道の師範、政治家等だけでなく、新聞記者もいたので、新聞報道によって唐手は広く知られるようになった。さらに、船越は講道館で同年7月から9月までの三ヶ月間、柔道の有段者に唐手を指導した。

この頃から、船越は東京で唐手の普及活動・指導を開始し、まず沖縄県出身学生の寮である「明正塾」の講堂で唐手の指導を始めるようになった。明正塾での入門者には、後に唐手の本土普及に重要な役割を果たすことになる者が多かった。中でも、大塚博紀、粕谷真洋、松田勝一等は、後に流派を作ったり、大学研究会を始めることになる。また、平真賢たいら しんけんは後に琉球古武術を体系化することになる。

船越は唐手を本土で普及させるために、日本の武道の展開に学びながら、幾つかの新たな方式を始めている。



写真2. 唐手を指導する船越義珍
（船越『空手道一路』榕樹書林より）

（１）教本の刊行

1922年11月、船越は日本本土に於いて初めての唐手教本である『琉球拳法唐手』を発行した。この書は、流儀等の唐手の歴史を紹介するとともに、体育としての価値、唐手の技術とその練習法を論じているが、技の名称や唐手に関する用語が初めて公にされ、唐手の稽古法や技術の体系化が見られ、後に出版される唐手教本のモデルとなった。

（２）道着の採用

沖縄において唐手は日常着か、ズボンだけ着て上半身は裸で稽古されていたが、船越は1922年に講道館において演武した際に柔道着を着ていた。1920年代頃の大学唐手研究会の写真にも、柔道着を着た学生が見られる。日本本土において普及し始めた頃から、柔道着を基にした唐手の道着が現れたのである。現在でも空手着は柔道着と基本的に同じで少し薄いだけである。

（３）段位制の導入

1924年4月、船越は、唐手研究会で審査を行い、唐手で初めての段位免状を発行し、有段者は黒帯を締めるようにした。これは柔道の段位を参考にして採り入れたものであるが、後に唐手の各流派でも、こうした段位制を採用するようになる。

（４）大学唐手研究会の開設

唐手は日本本土では、学校体育には採用されず、大学の課外活動を中心として普及するようになる。1924年10月、慶応義塾大学で最初の「唐手研究会」が設立され、船越が会長となった。大学の唐手研究会は後に、東京帝国大学（1925）、拓殖大学（1930）、早稲田大学（1933）と、次々と設立され、船越の唐手が東京で普及するようになった。

2. 他の系統の普及

1920年代から、船越以外にも沖縄出身の唐手家たちが、別系統の唐手の普及活動を開始した。本部朝基（1870～1942）、摩文仁賢和（1890～1952）や宮城長順（1888～1953）が本土の唐手普及に特に重要な役割を果たした。

泊手を学んだ本部朝基は、1922年頃から関西で唐手の普及活動を始め、大阪や東京で公開演武を行った。船越と違って、本部は、形稽古より実戦的な唐手を強調した。1925年、本部は、当時50才を過ぎていたが、京都でボクシング対柔道の興行に飛び入り参加して外国人ボクサーを一撃で倒して評判になったという^{（注3）}。本部は二人で稽古する組手を本土で紹介する教本を初めて著した。

那覇手の宮城長順は、1932年から大阪で唐手を普及し始め、立命館大学等で指導し、後に「剛柔流」を称することになる。

また、沖縄で首里手と那覇手、琉球古武術を学んだ摩文仁賢和は、1928年に東京に出たが、翌年から大阪に移って唐手道場を開いた。1930年に関西大学で設立された唐手研究会でも教えた。

また、唐手に加えて武器を用いる琉球古武術も広がるようになった。本土で琉球武術を普及させるため1925年に「琉球古武術研究会」を作った屋比久孟伝や唐手と古武術の両方を研究していた摩文仁賢和らの人物の努力によって、古武術も、1920年代から展開するようになった。

以上のように、沖縄出身の唐手家たちがそれぞれにそれぞれの唐手を普及し、統一化された形はなかったので、唐手が後に流派別に展開していることになる。

3. 近代空手の技術的な展開

船越が1920年代前半に紹介・普及した唐手は、単独で行う型の反復練習を中心としたものであったが、1920年代後半から技も大きく変容することになる。

1920年代後半から1930年代にかけて、唐手は技術的に大きな変容を遂げるので、以下、(1) 組手の展開、(2) 試合の原型—「東大式唐手拳法試合」、(3) 技術・稽古法の体系化という三つに分けて紹介する。

(1) 組手の展開

二人で稽古する組手は、沖縄では伝統的な稽古法として存在したが、体系化されておらず文献としての記録もない。ただ、花城長茂の「空手組手」(1905)という指導ノートには、二人で行う攻防の簡単な仕方だけが記されている。組手は、日本本土に於いて展開したが、①「分解組手」、②「約束組手」、③「自由組手」の三つの段階に区別することができる。

①分解組手

組手の稽古が日本本土において初めて紹介されたのは、本部朝基の『沖縄拳法唐手術(組手編)』(1926年)においてである。本部は泊手の「ナイハンチ」という伝統的な型を動作一つ一つに分解して、その応用を研



写真3. ナイハンチ型の動作と分解組手としての応用(『本部朝基と琉球カラテ』より)

究し、約束組手12本を創作した。また、組手は、この著作が第一段階となり、後に他にも型の分解が行われるようになった^(注4)

②約束組手

1920年代後半頃から、日本の伝統的な武道の形のように、二人で攻防の技を決まった順序で約束通りに行う約束組手の創出が始まった。船越義珍の『空手道教範』（1935）の中で初めて沖縄の伝統的な型から離れた約束組手の例が見られ、後に発行される他の唐手教本にも約束組手が現れるようになった。

③自由組手

また、同じ時期から自由組手も展開してきた。自由組手は、防具を着けず相手に当てる寸前で止めて自由に技を出し合う練習法である。この自由組手から現代空手道に見られる「寸止め」ルールで行われる組手競技が展開することになる。

（2）組手試合の原型 —「東大式唐手拳法試合」

大学生の間には型稽古だけでは満足ができず、より実戦的な武術としての唐手を求めた者が何人もいたので、大学研究会を中心として、1920年代末から実戦的な組手の研究が始まった。東京帝国大学では、師範の船越の意向に反して、学生たちが、剣道の防具を空手用に改良した防具を使って実戦的な組手試合を始めた。この組手試合は、寸止めではなく、実際に相手に当てる勝負法であった。

1929年（昭和4）7月、東京帝国大学の唐手研究会の三木二三郎と高田瑞穂は沖縄へ調査に行き、その成果と工夫していた稽古法をまとめて、同年12月、『拳法概説』を出版した。この書には、初めて防具を付けて自由に打ち合う試合のやり方が載せられている。

「東大式唐手拳法試合」のルールでは、「審判標準」の「攻撃の個所」

が「面、水月、金的の三ヶ所」と「攻撃は突く、打つ、蹴るの方法」に限られ、「東大式唐手試合道具」として面、胴、金的当、脛当、小手、足部、爪先部の防具が使用されていた^(注5)。

また、関西大学で空手師範として活躍した摩文仁賢和も組手の研究を行い、防具を考案したが、写真からすれば、防具はほぼ同じ形と見られるので、関西大学と東京帝国大学との間で交流があったと考えられる。ただ、当時、試合組手に反対した声が多かったので、摩文仁自身も、防具付き組手の研究は東京帝国大学と関西大学に限られていたと述べている^(注6)。



写真4. 帝大式の組手試合（『拳法概説』より）

（3）技術・稽古法の体系化

唐手の技術の体系化と稽古法の開発は、昭和初期、本土に於いて始まった。沖縄では唐手の教本はまだなく、船越の『琉球拳法唐手』（1922）及び『練胆護身唐手術』（1925）になって初めて技術の体系化が見られるが、両著作では、稽古法は、まだ型の反復練習に限られていた。

1933年の東大唐手研究会発行の『唐手拳法』になって初めて唐手の技が「攻撃」と「防御」に分かれ、稽古法も「基本」、「型」、「組手」に分けられる（表1）。以後、近代空手では、この分け方が基礎となることになる。

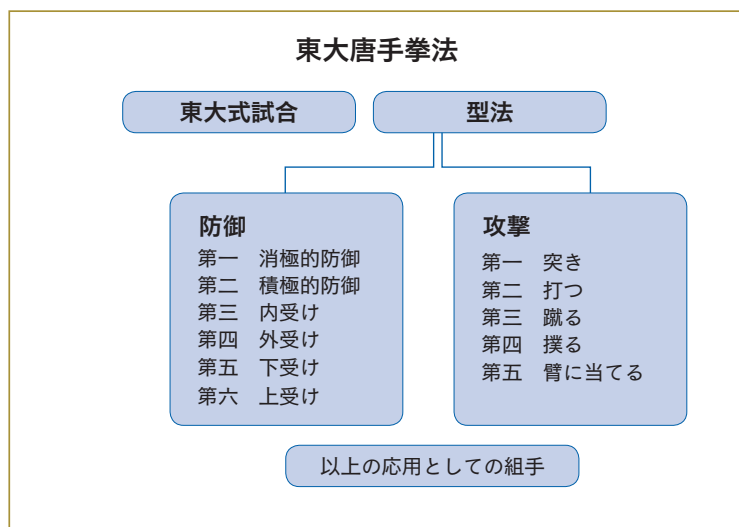


表 1 「東大唐手拳法」の技術体系（『唐手拳法』所収）

4. 唐手から空手へ —近代武道としての定着

（1）唐手から空手への改名

1929年4月、船越は、慶應義塾大学唐手研究会の会員の意向を忖度して、唐手を「空手」に改名した^{（注7）}。船越によると、「空手」の「空」は、第一に「徒手空拳」、即ち武器を用いない徒手武術の意味だが、第二に、般若心経の「色即是空、空是即色」に基づき、全ての現象は「空」に由来しているので、「空」が武道の基礎を示すという^{（注8）}。

また、船越義珍は述べていないが、日中戦争が始まろうとしていた時代背景を考えると、唐手という中国武術の由来から切り離すことが、改名の大きな意図であったと考えられる。

唐手を「空手」とすることが一般的になったのは、1935年頃からである。その頃から著作にも「空手」が出現する^(注9)が、「拳法唐手」、「唐手術」等の言い方もまだあり、1945年以前には統一した呼称とはならなかった。

(2) 日本本土の四大流派の成立

琉球で生まれた唐手は、1922年に日本本土に紹介されて以降、技術的にも形態的にも、柔道から強い影響を受けて日本の武道としての性格を帯びようになっていたが、「空手」への改称が日本の武道化への大きな一歩であった。さらに、日本的な武道化を大きく進めたのは、戦前の武道の統括組織であった大日本武徳会に1930年代後半から、空手の流派の加盟登録が認められたことである。

1935年、空手は、武徳会の柔道部門に、柔術と共に「唐手術」として登録された。これ以降、空手の各流派の登録が始まることになる。大日本武徳会に加盟するためには、流儀名、本部所在地、代表者名、技術体系、稽古体系、技術審査制度、支部名等の申告が登録の条件^(注10)となったので、空手の各流派はこの基準に合わせて体系化を進めたので、空手の各流派の技術体系は日本武道の体系をモデルにして構成されたものであると考えられる。

こうして日本本土で、さまざまな空手の流派・会派が登録されたが、「しょうとうかん松濤館」、「わどうりゅう和道流」、「ごうじゅうりゅう剛柔流」、「しとうりゅう糸東流」が大きな勢力であり、これらが四大流派と呼ばれるようになる。

①松濤館

松濤館は、船越義珍を代表とするもので、首里手の糸洲安恒と安里安恒の唐手を基にした流派である。船越自身は、流派として区別することに反対していたが、門人たちの総意により、船越の書の号

である「松濤」に因んだ名称として1935年に武徳会に流派として登録された。

松濤館は、首里手の形を基にしているが、船越は形の名称を日本的な漢字表記の名称に替えている。他の流派と比べると、動作が大きく、立ち方も深いので、実戦的な技より身体鍛練と基本技の習得を目的とする稽古法といえる。

②和道流

和道流は、船越の弟子の大塚博紀（1892～1982）が開始し、1939年に登録された流派である。大塚は、茨城県の出身で、幼い頃から神道揚心流柔術を学び、1921年に免許皆伝となり、第四世を継いでいた。翌1922年から船越義珍の明正塾に入門し、唐手術を学び始めた。大塚は、船越の他、摩文仁賢和及び本部朝基の指導も受けたといわれる。大塚は、船越に学んだ首里手に、古流柔術を融合させ、1934年和道流を建てた。「和」は日本という意味なので、流名は、日本の古流柔術との繋がりを強調するものである。

和道流は松濤館の形を基礎としているが、形の名称はかえって沖縄由来の元の呼称とするが、松濤館と比べると、動作はコンパクトで、立ち方も比較的高いので、実戦的である。

また、柔術から導入されたたいさば体捌きが流派としての主な特徴で、「転位」、「転体」、



写真5. 和道流の短刀捕り（『空手道大観』より）

「転技」が、和道流の原理と言われる。さらに、柔術の技法に由来する「居捕り」、「短刀捕り」、「白刃太刀捕り」等の形も伝承されている。

③剛柔流

1939年、宮城長順(1888～1953)の剛柔流も流派として認められた。宮城は、主に那覇手の東恩納寛量に学んだが、その基になる中国南派拳法を研究するために中国福建省福州へ十数回渡ったことがあるといわれる。「剛柔流」という名は、1930年に、宮城が、『武備志』^(注11)の「拳法大要八句」にある「法剛柔吞吐」という一節に基づいて名付けたといわれる。

剛柔流の形には、南派の中国拳法の影響が強く見られ、円形の動作や首里手では余り見られない拳を握らずに行う手技が多い。また、形によって身体を鍛練することも那覇手の特徴で、特に呼吸法の習得が強調されている。

④糸東流

首里手の糸洲安恒と共に那覇手の東恩納寛量に学んだ摩文仁賢和は、両系統の長所に日本武道や琉球古武術を加えた「糸東流」を開始した。流名は、師匠二名の苗字を合わせたもので、1937年に流派として認められた。

糸東流は、首里手と那覇手の両方の形を採り入れているので、糸東流の形は、四大流派の中でも最も多い。動作是那覇手より首里手に近いと言える。

以上のように、1930年代末に四大流派が大日本武徳会に次々と登録され、それぞれに展開していったが、各流派の形や技術体系は異なるが、「基本」、「形」、「組手」からなる稽古法と技術の体系化

等の特徴は、戦前の空手に共通して見られる。

1941年12月からアジア太平洋戦争が始まると、戦時体制が取られて、空手の活動も低調とならざるを得なかった。特に45年3月から沖縄は激しい戦場となり、多数の住民が巻き込まれて、壊滅的な被害を受け、米軍に占領された。

Ⅲ．現代空手道としての展開（1945年以降）

1945年（昭和20）8月、日本は敗戦を迎え、占領軍によって武道は全面禁止されたが、空手は、柔道や剣道と違って戦前の学校体育の中で武道として採用されていなかったもので、空手は1946年にジェントルマンスポーツとして行う許可を得ることができた^{（注12）}。

他方、沖縄は、日本本土と切り離されて1972年まで米軍軍政下に置かれたので、空手道も本土とは違った展開をすることになる。本土の空手は流派ごとに展開していたが、1950年代から学生を中心に流派を超える連盟が作られ、また競技化も進むことになる。

戦後から1970年代初期までに、組織の設立、競技化の進展、沖縄における別の展開、国際化の始まりなど、現代までの空手の基盤が形成されることになる。

1．現代空手道に基盤の形成

（1）組織の設立と競技化

空手の組織化は1948年に始まるが、最初の段階では、流派別に松濤館の「日本空手協会」、和道流の「全日空手連盟」、剛柔流の「空手道剛柔流振興会」が発足している。1950年、学生たちの間で流

派を超えた「日本学生空手連盟」が結成された。1957年には「全日本学生空手道連盟」（以下、全学空連とする）に改名され、初めて正式に「空手道」を称するようになった。

空手道の競技化は学生空手の連盟によって進められていたが、1950年代前半当時は、交流稽古の形で自由組手が行われていた。1957年、組手競技の寸止めルールが試合規定として制定され、第1回全日本学生空手道選手権大会がこのルールに従って行われた。

1964年（昭和39）、東京オリンピックを機に、四大流派を中心に流派を超える空手道の総合的な代表団体として「全日本空手道連盟」（以下、全空連という）が設立された。全空連の発足と共に空手道としての普及が始まった。全空連は、1969年、文部省により空手道の全国唯一の団体として認められ、1972年には日本体育協会の加盟団体になり、競技スポーツとして展開できるための主な条件が整えられた。1973年からは、組手競技に加えて、形競技も導入されるようになった。

（2）沖縄での展開

空手は、日本本土では四大流派を中心に展開していたが、1972年まで本土と切り離されていた沖縄では、元来の唐手術の伝統や琉球古武術の影響もあって、本土とは別の流派が展開した。沖縄で「小林流」、しょうりんりゅう「松林流」、まつばやしりゅう「上地流」、うえちりゅう「剛柔流」が沖縄の四大流派に展開した（沖縄の剛柔流は、本土で展開した剛柔流と異なり、鍛練法を強調し、琉球古武道を技術体系の一部に取り入れた会派が多い）。

また戦後、沖縄独特のさまざまな武具を使用する琉球古武術も体系化され、連盟が設立された。1955年、平真賢は、たいらしんけん「琉球古武道保存振興会」を発足させ、1964年、『琉球古武道大観』を発刊した。

琉球古武道は、他に本部朝勇と又吉真光に由来するものと合わせて、三系統がある。さらに、空手と古武道を合わせた「劉衛流^{りゅうえい}」などの会派もある。

（３）空手の海外への普及・国際化のはじまり

戦前にも海外で空手を指導した者はいたが、その普及は朝鮮等の植民地や沖縄出身の移民が多いハワイ等に限られていた。

沖縄は、1945年に米軍が上陸してから、戦後1972年まで米国の施政下に置かれ、米軍基地が多数建設されたが、沖縄の基地に駐留した数多くの米軍人が空手を稽古するようになった。そして彼らが帰国した後、米国で道場を開いて、指導するようになるので、空手は1950～1960年代から米国に普及し始めたと考えられる。本土に於いても、米空軍が柔道と空手を奨励していたので、1953年から早稲田大学、慶応義塾大学、拓殖大学の指導者が米軍人に空手を指導するようになった。

また拓殖大学等の松濤館系の「日本空手協会」は、1956年から専門指導員養成としての研修生制度を開始し、修了した空手家達は1950年代末～1960年代頃から海外で指導するようになる。その一人、金沢弘和は、ヨーロッパを中心にして松濤館を広めた。また西山英俊は、1965年から米国に移住して、同じく松濤館空手を広く普及した。また和道流でも、1960年代からは、大塚博紀の高弟・鈴木辰夫や河野輝雄等がヨーロッパに広めている。

空手道の国際組織の設立としては、1963年、「ヨーロッパ空手連合」(EKU)の発足が最初である。

さらに、全学空連も競技空手を公開するために海外で交流試合等を積極的に行った。1965年、全学空連は第一回日米親善空手道選

手権大会を開催したが、これが国際大会の最初であった。1970年には、全学空連はヨーロッパへ遠征し、指導・交流試合等が行った。

1970年、「世界空手道連合」(WUKO)が加盟国33ヶ国で結成され、同年に第1回世界選手権大会が開かれ、以後2年ごとに大会が開催されるようになった。これに対して、1974年、米国を中心に活躍した西山英隆らによって「国際アマチュア空手連盟」(IAKF)が設立された。

2. 現代空手道の展開

(1) 競技化と国際化の進展

組織化、競技化、国際化の基盤を整えた空手道は、1970年代後半からは、高度経済成長後の豊かな社会の中でスポーツブームと国際化の流れに乗って、本格的に展開していくことになる。

1977年(昭和52)、全空連は、日本武道館を中心にして柔道、剣道等の8連盟と共に「日本武道協議会」の加盟団体になった。これで空手道は正式に日本の現代武道の一つとして認められるようになったのである。

また1979年には、空手道は、国民体育大会(国体)にも組手競技に限られていたが、デモンストレーション種目となり、1981年からは正式種目として行われるようになった。1981年の国体への採用時には、女子の部も行われ、また、同年に開催された第9回全日本空手道選手権大会にも女子が初めて参加するようになった。

1988年のソウルオリンピック大会で、元来は空手が母胎となって1950年代から韓国で展開したテコンドー^(注13)が公開競技となったこと(2000年から正式種目)に刺激され、世界空手連合と、国

際アマチュア空手連盟が改名した「国際伝統空手連盟」(ITKF)との間でオリンピックへの参加競争が始まった。最終的には、世界空手連合が改名した「世界空手連盟」(WKF)が、1999年に国際オリンピック委員会 (IOC) に正式承認団体として認められた。WKFはオリンピック種目としての参加を目指しているが、現在のところ認められていない。



写真6. 2008年世界空手道選手権大会
(日本武道館“Budo”より)

(2) 沖縄での展開

今日、沖縄に於いて、本土の空手道と区別し、その伝統性を強調する動きが見られる。

1990年(平成2年)の学習指導要領の改訂で、「格技」が「武道」に名称が変更され、地域に応じて各種武道の指導が可能になったのを機に、沖縄県では中学校・高校で空手道を教育する学校が多くなった(現在、沖縄県では47%の中学校が空手道を教えている)。

また、「沖縄空手道・古武道」は1997年に沖縄県の無形文化財として公式に認定され、文化遺産として、沖縄の空手道・古武道を国内外に発展・普及するのを支援するために、特定非営利活動法人「沖縄空手道・古武道支援センター」が設立された。

さらに、1999年から「沖縄伝統空手道古武道世界大会」が開催されるようになり、2005年から沖縄空手に関する情報を集めた「沖

縄空手通信」が発刊されるようになった。さらに2008年2月14日、沖縄県内の4団体を統一する組織としての「沖縄伝統空手道振興会」が発足している。

(3) 格闘技としての空手への展開

1960年以降、「寸止め」ルールによる競技が展開すると、寸止めせず、直接打撃する試合法も模索されることになる。松濤館と剛柔流を学んだ大山倍達は、1957年流名を「極真会」とし、1964年の本部道場の開設と共に国際空手道連盟極真会館を発足させた。「極真会館空手」の試合は、寸止めせず、防具なしで直接打撃制で行われる。そのルールは、顔面へは、上段蹴りは認められているが、突き、打ちは禁止されているので、ローキック、胴体への突きや上段蹴りを中心とする勝負のスタイルが展開してきた。「極真会館」から「正道館」、「芦原空手」等の様々な会派が後に生まれたが、各会派によって試合のルール等が異なる。

1970年代、欧米を中心として空手とボクシングを合わせた「キックボクシング」としての競技化も始まったが、1974年に連盟が発足され、「オール・スタイル空手」、「コンタクト空手」ともいうキックボクシングの試合が始まった。さらに、この空手に影響された総合格闘技も次々出現し、元の空手道から完全に離れたプロスポーツとして展開している。総合格闘技はブームも続いているが、ここでは商業主義化された格闘技としての傾向が見られる。

(4) 現在の空手道

現在、日本国内では、全日本、国体大会、実業団、流派の大会等の多くの大会が開かれるが、世界のレベルでは、世界空手道選手権

大会、ワールドゲームズ、国際的なオープン大会等が開催され、各流派ごとのワールドカップもある。

現在、世界のレベルでは、空手道の様々な組織があるが、スポーツアコード(旧称GAISF)によってIOCに空手道の唯一競技団体として認められたのは、世界空手連盟(WKF)である。現在、WKFには178ヶ国が加盟しており、登録人口は5千万人といわれる^(注14)。

Ⅳ. 空手道の特質及びその精神

空手道は、元来系統や流派ごとに展開しており、戦後に連盟は出来たが、稽古する形は流派ごとに異なり、段位の認定権をはじめ流派の力が強かった。けれども、連盟の発足から45年を経て競技化が進むにつれ、組手主体になり、形でも流派の特色は薄れて連盟の指定形と自由形で主に演武されるもの以外は知らない状況も生まれている。改めて今日の空手道の技法をまとめておくことにする。

1. 空手道の技法

まず稽古に入る前に、立礼や座礼からなる礼法を身に付け、空手道の基本的な立ち方13本、拳の握り方、技の名称等を習う。空手道の技法は、大まかに「基本」、「形(型)」「組手」という三つに分けられる。

(1) 基本

空手道の基本技は、形と組手の基礎となる。基本技は、突き、蹴り、打ち、受けからなる。これらの技は、攻撃部位によって上段、中段、

下段に分けられる。上段は頭部や首を、中段は胴体の部を、下段は帯下からの下半身の部分を、それぞれ攻める技である。基本技の稽古は、一人で、その場で、或いは移動しながら行う。

(2) 形 (型)

空手道の形は、伝統的な稽古法で流派によって異なるが、攻防技法の決まった順番から構成されるパターンで、仮想相手をイメージしながら、一人で行う。形稽古は、八方向に移動しながら多種多様の技を行って、目付、呼吸法、重心の移動等を身に付ける。

(3) 組手

組手は元々形の応用から展開したもので、相手と二人で行う。形に基づいて構成された組手を「分解組手」或いは、「形分解」という。

「約束組手」は、空手の基本的な技で、攻撃の仕方や攻める部位を決め、約束通りに行うもので、各流派には約束組手の様々な形がある。約束組手の稽古によって間合い、攻防の仕方を身に付ける。

また、「自由組手」は、多種多様の技を応用して攻めや防御を自由に行う組手である。自由組手は、組手競技の基である。

2. 空手道競技としての特性

(1) 組手競技

伝統流派を基礎とする空手道の組手競技は、打撃部位には直接当てない「寸止め」ルールで行われる。組手競技は、元々は一本勝負として始まり、三本勝負に変更されたが、2000年のWKFのルール改正によってポイント制になった。新ルールでは、表2に見られるように、技の種類によって3ポイント、2ポイントと1ポイントに分けるようになったが、上段蹴り、倒し技が優先されるようになり、

テコンドーに近い形となった。

新規則の採用に伴って、空手道の国際的な競技化が急激に進み、試合技術も大きく進展している。

空手道競技は、体重別に行われるが、2009年に改正された WKF の規則によると、男女共に五階級に分けられることになった。組手競技は、「寸止め」を規則とするが、寸止めできずに当ることもあるので、怪我を予防するために安全防具が使用されている。空手道競技の最初期の1950年代後半には、拳サポータだけで、顔面の怪我が多かったため、日本国内では面の防具・メンホーが採用されるようになった。メンホーは、最初はビニール製であったが、後にポリカーボネイト製に変更され、今日まで日本国内では使用されている。それ以外にボディープロテクター等も使用されているが、日本国内では、防具は年齢、競技団体によって異なる場合もある。

WKF ルールに従う国際大会では、防具は、マウスピース、拳サポータ、フットシンガードに限られているが、男子は金的、女子は胸当てを付けなければならない。また、2009年の規則改正に伴ってジュニアの選手は眼や鼻の部分を守るフェースシールドを使うようになった。

組手競技の得点	有効技
3 ポイント（一本）	①上段蹴り ②マットへの投げ、又は足払いで倒した後の有効技
2 ポイント（技有り）	①段蹴り ②背面への突き ③それぞれの技が得点に値する複合の手技 ④相手を崩し得点した場合
1 ポイント（有効）	①中段、又は上段突き ②打ち

表2 空手道組手競技のポイント制

(2) 形競技

形競技は、空手道の形を演武する競技種目である。WKFに演武形として認められているのは、計84本の形である。試合方法として、2人の選手が「指定形」と、伝統流派の形から選んだ「得意形」を演武して、審判がフラグ方式で判定している。

指定形は、1982年（昭和57）、全空連の「空手道指定形」で初めて発表されたが、四大流派の各流派の形から二つずつ選択された計8本であった。

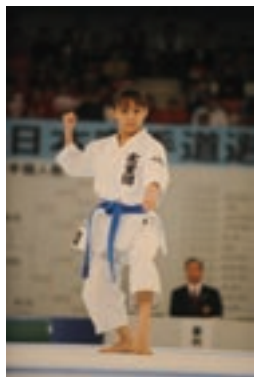


写真7. 全日本空手道選手権
での形競技
(日本武道館“BUDO”より)

その後、2006年に第二指定形として8本が追加された。現在、空手道の指定形は、第一と第二指定形を合わせた16本である。

主な大会に於いて、形競技の予選は指定形の演武によって判定されるが、後は自由に選べる得意形の演武で競うことになる。

また、2000年のルール改正に従って、形競技に形分解が新たに加えられるようになった。3人で同時に形の演武を行う団体形競技には、決勝戦及び準決勝戦では、各チームは形を披露してから三人でその形の応用を約束組手として演武する。この分解組手は制定されておらず、自由に工夫するものである。投げ技、関節技等の技が幅広く取り入れられることによって、形競技を観客にとってより魅力的なものにする工夫である。

3. 空手道の精神

(1) 空手道としての特性

空手道は、元来、護身術として、自分の身を守ることを目指して

秘密裏に伝えられたとされ、伝書はない。「空手に先手なし」という言葉だけが残っている。

近代になって、沖縄で学校体育に取り入れられた時に、糸洲安恒は「唐手心得十箇條」（1908）で、身体鍛練と健康増進を目的として述べていた。糸洲に学んだ船越義珍は、空手を日本本土に普及・指導した際に、その体育としての価値を強調した。船越が1922年に刊行した『琉球拳法唐手』では、空手の価値を体育、護身術、精神修養という三つにまとめている^(注15)。即ち、空手は、用具も要らず、危険性もなく、誰でも何処でもできる安全な体育の方法であり、形稽古は単独でも集団でもできる練習法である。また、空手には護身術としての実用性があり、空手の形に含まれる攻防技法は実戦的に使えるものである。さらに、船越は、精神修養という点を強調し、空手の修行は人格形成であり、謙虚、克己等の習得ができると述べている。1930年代頃に、船越は空手の心得を「空手道二十箇條」にまとめた。

全空連は、空手道の理念として、船越の二十ヶ条から、以下の五ヶ条を摘要している^(注16)：

- 空手は礼に始まり、礼に終わることを忘れるな
- 空手に先手なし
- まず自己を知り、^{しこう}而して他を知れ
- 技術より心術
- 戦いは虚実の操縦^{いかん}如何にあり

現代空手道は、競技スポーツへ展開してきたが、武道としての特性もある。全日本空手道連盟は、まだ明確に「空手道の理念」を打

ち出してはいないが、「礼と節を重んじて、人間形成を成す」ことを目指していると述べている^(注17)。

おわりに

現代空手道を考えると、様々な組織があり、数多くの流派・会派団体があって、それぞれに目指すものもやり方も異なっており、空手道の概念を定義することすら難しくなっている。特に競技スポーツ化が進むにつれ武道としての理念もなくなるという恐れもある。国際大会では、審判の判定に不服で抗議したり、またポイントを取って畳の上でガッツポーズを見せる等をする選手も多く見られる。これは、克己心や相手の尊重等、礼儀を重視する武道から逸脱したものと云わざるを得ない。競技空手においても、礼儀正しく、精神修養を目指すのでなければ、先人たちが築いてきた伝統武道としての空手道の意味が失われることになりかねない。現代、オリンピック種目への採用を目指して大きなルール変更が行われているが、これにより空手のスポーツ化はより一層進むことになると思われる。

現代の社会背景を考えると、中高年の割合が増加し、社会の高齢化が進む中で、特に先進国では、生涯スポーツが、全国民を対象とする健康政策の重要な手段となっている。日本の武道はその点では魅力的であり、特に用具を必要としない空手道は、社会に役に立つことが期待される。また、武道を含めて各スポーツ団体の会員の中で青少年の割合が年々減少しており、青少年の運動能力が低下していることを考えると、空手道を安全に楽しく体験できる体育教育として普及させることが望まれる。その点では、日本国内で平成24年から始まる中学校に於ける武道必修化は、空手道をより一般化す

るチャンスとなる。

現代の空手道には、様々な問題が見られるので、改めて空手道としての特性、その伝統及びその教育としての価値を継承することが必要だと思われる。そのためにも空手の諸流派を越えた指導法を研究・確立すること、空手道専門の指導者・研究者を育成する機関を整備する必要がある。テコンドーや各種格闘技とは異なる空手道の特性を考え、将来の展開を考えなければならない。

《本文注》

(注1) 戸部良熙著『大島筆記』には、「公相君」は数人の弟子と共に中国から琉球に渡り、「組合術ノ手」を伝えたと書き記されている（外間哲弘『空手道史年表』[2001] 20 頁参照）。

(注2) 糸洲は、「五十四歩」、「チントー」、「公相君」「大」・「小」、「パッサイ」「大」・「小」、「ナイファンチ」に、「公相君」を基とした「平安」5本、「ナイファンチ」を基にした「ナイファンチ」「二段」・「三段」の7本を新しく付け加えた（今村嘉雄他編『日本武道全集・第五巻』[1966] 446 頁参照）。

(注3) 外間哲弘『空手道史年表』（2001）、38 頁参照。

(注4) 摩文仁賢和『攻防自在空手研究・十八（セーパイ）の研究』（1934）にも、那覇手の「セーパイ」に基づいた分解組手の例の一つが見られる。

(注5) 陸奥（高田）瑞穂編『唐手拳法』（1933）、469～470 頁参照。

(注6) 摩文仁賢和・仲宗根源和『攻防拳法空手道入門』（1938）、81 頁参照。

(注7) 改名の記録は、慶応義塾大学空手部の日記帳抜萃に見られる。慶応義塾体育会空手部（編集）『慶応義塾体育会空手部五十年史』（1974）、79 頁参照。

(注8) 船越『増補空手道教範』（1941）、2～3 頁参照。ただし、「空手」という呼称は、沖縄県立第一中学校体育教官の花城長茂の手書きの覚書「空手組手」（1905）に初めて見られるが、船越がこれを参考にしたか否かは不明である。

(注9) 摩文仁賢和『攻防自在空手研究・十八（セーパイ）の研究』（1934）、船越義珍『空手道教範』（1935）、仲宗根源和編『空手道大観』（1938）などが、タイトルに「空手」の名称を入れた例である。

(注 10) 藤原稜三『格闘技の歴史』(1990)、664 頁参照。

(注 11) 沖縄の『武備志』は、中国・明代の茅元儀著『武備志』とは別の内容で、著者と発祥地は不明であるが、清代(1644～1911)に構成された南派中国拳法に関する文献で、19 世紀後半頃中国福建省から沖縄に伝承されたといわれる(McCARTHYPatrick “The Bible of Karate.Bubushi”, [1995] 23～42 頁参照)。

(注 12) 早稲田大学教授の大浜信泉が占領軍司令部(GHQ)や文部省と交渉して、1946 年に空手をジェントルマンスポーツとして行う許可を得た(日本体育協会編『スポーツ大事典』[1987] 参照)。

(注 13) テコンドー(拳道)の創始者・崔泓熙らは、1940 年代前期に松濤館空手を習っていたが、朝鮮戦争後の 1954 年に李承晩大統領の前で演武して賞賛を受け、その後、韓国式に「跆拳道」と称するようになった。空手に韓国の「テッキョン」をあわせたものともいわれ、1970 年代に韓国の国技として普及した。相手に直接打撃を与えることもよく、特に足技を重視する。体重別 10 階級制で、リングの中で 3 ラウンド制で試合し、KO かポイントで勝負を決する。

(注 14) 2008 年第 19 回世界空手大会のプログラムに掲載されたデータを参照。

(注 15) これは、嘉納治五郎が柔道の価値を「体育法」、「勝負法」、「修身法」に分けて示していたことから影響を受けた可能性がある。

(注 16) 日本武道館編『日本の武道』(2008) 246 頁参照。

(注 17) 日本武道館編『日本の武道』(2008) 269 頁参照。

空手道史年表

年	空手に関する主な展開
琉球王国の歴史及び琉球唐手のはじまり(14世紀頃から)	
1372年	琉球の中山王国が中国明と冊封体制に入り、文化交流や貿易盛んに行う。
1392年	中国福建省の「閩人36姓」が久米村に移住し、南派中国拳法が沖縄に伝えられる。
1429年	中山王国の尚巴志が北山、南山を滅ぼして琉球を統一し、琉球王国の第一尚氏王朝をはじめる。
1477年	尚真王が中央集権を都の首里で確立し、武器保有の禁止する。
1609年	琉球王国は薩摩藩に侵略され、その支配下に置かれるが、中国との冊封関係を続けながら琉球王国として継続する。
1872年	明治政府は琉球王国を琉球藩として日本国の一部とする。
1879年	沖縄県が設置され、琉球王国が完全に消滅する。

琉球唐手術としての展開（1904～1921年）	
1904年（明治37）	糸洲安恒は「公相君」の型を基に「平安」五つの型を創作。
1905年（明治38）	唐手が沖縄県立中学校に体育の正科として認められた。
1908年（明治41）	糸洲安恒が、「唐手心得十ヶ條」を公にする。
1917年（大正6）	摩文仁賢和、船越義珍等は「唐手研究会」を設立し、唐手の研究と交流が始まる。
1921年（大正10）	皇太子訪沖の際、船越義珍が首里城前で唐手を演武。
日本本土での展開（1922～1945年）	
1922年（大正11）	5月、船越義珍が、文部省第一回体育展覧会及び講道館に於いて唐手の公開演武を行う。7月、東京の沖縄人学生寮で「明正塾」を開き、唐手の普及活動を開始する。 船越義珍『琉球拳法唐手』発刊。
1924年（大正13）	慶応義塾大学で最初の唐手研究会が設立（師範：船越義珍）、その後大学の唐手研究会が次々設立される。 船越は初めて唐手の段位免状を発行。
1925年（大正14）	東京帝国大学唐手研究会の開始（師範：船越義珍）。
1927年（昭和2）	東洋大学唐手研究会の設立（師範：本部朝基）。
1929年（昭和4）	4月、慶応義塾大学の「唐手研究会」が「空手研究会」に改名。 同年、東京帝大も唐手を「空手」と改める。 東京帝大で防具組手の本格的な研究と実践が始まる。
1930年（昭和5）	拓殖大学空手部の設立（師範：船越義珍）。
1932年（昭和7）	関西大学空手部の発足（師範：摩文仁賢和）。
1933年（昭和8）	大日本武徳会に唐手術が柔道の部門として認められる。 早稲田大学空手部の発足（師範船越義珍）。
1935年（昭和10）	武徳会に空手の各流派としての登録が始まる（1935年：船越義珍の松濤館、1937年：摩文仁賢和の「糸東流」、1939年：大塚博紀の和道流、宮城長順の剛柔流）。
1945年（昭和20）	敗戦後、連合軍の支配統治下、GHQにより武道禁止。
現代空手道としての展開（1945年以降）	
1946年（昭和21）	空手がジェントルマンススポーツとしての許可を得る。
1949年（昭和24）	松濤館「日本空手協会」、和道流「全日本空手連盟」結成。
1950年（昭和25）	学生間で流派を越えた「全日本学生空手連盟」が結成される。
1957年（昭和32）	全日本学生空手連盟が「全日本学生空手道連盟」に改名。
1964年（昭和39）	「全日本空手道連盟」が流派を超える統一団体として結成。
1969年（昭和44）	全日本空手道連盟は財団法人となり、組手競技による「全日本空手道選手権大会」を初開催する。
1970年（昭和45）	「世界空手道連合」（WUKO）が結成される。
1972年（昭和47）	全日本空手道連盟は、日本体育協会の加盟団体となる。

1973年（昭和48）	競技種目として組手競技に加え、形競技も採用される。
1981年（昭和56）	空手道が国体の正式種目となる。
1993年（平成5）	世界空手道連合は、「世界空手道連盟」（WKF）に改名。
1999年（平成11）	IOC（スポーツアコードにより）は、WKFを空手道の正式承認団体として認める。
2000年（平成12）	テコンドーがオリンピックの正式種目となる。 WKFは競技ルールの改正を決定。
2008年（平成20）	第19回世界大会が日本武道館で開催。110ヶ国から選手1100名が参加。
2009年（平成21）	2016年のオリンピック種目として空手道の採用選挙に失敗 WKFはパラリンピック委員会に認められる

■空手道についての主な文献

I. 本稿で論じた著作

- 1.『琉球拳法唐手』船越義珍 1922年（2006年復刻版 榕樹書林）
- 2.『増補空手道教範』船越義珍 廣文堂 1941年
- 3.『拳法概説』三木二三郎・高田瑞穂 1929年（2002年復刻版 榕樹書林）
- 4.『唐手拳法』陸奥（旧姓高田）瑞穂 1933年（1999年復刻版 榕樹書林）
- 5.『攻防拳法空手道入門』、摩文仁賢和・仲宗根源和 1938年（2006年復刻版 榕樹書林）
- 6.『空手道大観』仲宗根源和（編集） 1938年（1991年復刻版 緑林堂書店）

II. 参考文献

- 1.『日本武道大系』第八巻「空手道・合気道・少林寺拳法・太極拳」今村嘉雄 他編 1982年 同朋舎
空手道の歴史を、中国拳法からの由来、沖縄での展開、柔術からの影響、四大流派の成立、戦前に活躍した空手の重要人物等に焦点を合わせて論じる。
また、戦後の空手道の展開とその国際化もまとめる。
- 2.『沖縄空手古武道事典』高宮城繁・新里勝彦・仲本政博 2008年 柏書房
沖縄空手古武道の歴史、展開及びその主な流派をまとめる事典。
- 3.『沖縄伝統空手「テ」TIYの変容』、野原耗栄 2007年 球陽出版
沖縄空手の由来から現在までの変容過程を論じる著作。

- 4.『沖縄の空手・角力名人伝』 長嶺将真 1986年 新人物往来社
沖縄空手及び沖縄相撲の先駆者及び彼らの役割を紹介する著作。特に沖縄唐手の三系統を代表した者の影響を細かく論じる。
5. 岩井虎伯『本部朝基とカラテ』、 2007年 愛隆堂
本部朝基の「沖縄拳法唐手術・組手編」(1926年)と「私の唐手術」(1932年)を現代語訳で紹介するとともに、空手の歴史をまとめて論じている。
- 6.『空手道史年表』 外間哲弘 2001年 沖縄図書センター
空手の歴史を年表としてまとめる。

付録

1. 武道のあゆみ
2. 武道憲章
3. 日本武道協議会
4. 日本武道学会
5. 日本古武道協会

1. 武道の伝統（江戸時代までの流れ；年表その 1）

時代	年代	日本社会の動き	武道の伝統
平安	794 年	桓武天皇 平安京に遷都	平安時代に、射礼・騎射・相撲節会、宮中の年中行事となる
	10 世紀ごろ	武士の誕生	この頃、日本刀（鑄・弯刀造）誕生
	1180 年代	源平合戦	武士の間で、弓馬の術の発達
鎌倉	1192 年	鎌倉幕府成立	武士たちが、笠懸、犬追物などを行う
	1274/81	元寇（元軍の襲来）	御家人の窮乏深刻、新興武士進出
室町時代	南北朝	1336 年	室町幕府成立するも南北朝の動乱続く
		1392 年	足利義満、南北朝統一
		1476 年	応仁の乱、戦国時代へ
	戦国期	1493 年	戦国大名の割拠本格化
		1543 年	鉄砲、種子島に伝来
		1560 年	この頃、鉄砲急速に普及
		1573 年	織田信長、幕府滅ぼす
安土桃山	天下統一期	1575 年	長篠の戦い（鉄砲隊活躍）
		1590 年	豊田秀吉、全国統一
	初期	1600 年	関が原の戦い（徳川覇権）
		1615 年	大坂夏の陣（合戦終息）
江戸時代	初期	1639 年	鎖国体制の完成 幕藩体制の組織整備
		幕藩体制の完成 幕藩体制の組織整備	柳生宗矩『兵法家伝書』（1632）、 宮本武蔵『五輪書』（1645）
	中期	1651 年	幕府、文治政治へ転換 太平の世、農地拡大、 街道整備、全国経済圏
		1716 年～	将軍吉宗の享保の改革
		1767 年～	田沼意次の商業振興策
	後期	1787 年～	松平定信の寛政の改革
		1800 年～	外国船接近、一揆相次ぐ
		1841 年～	水野忠邦の天保の改革
	幕末	1853 年	ペリーの黒船来航
		1860 年	桜田門外の変。以後テロ 激化。尊皇攘夷運動から 倒幕運動へ
		1867 年	大政奉還。王政復古の大 号令、倒幕・戊辰戦争へ

II. 近代武道の展開（年表その2）

時代	年号	西暦	日本社会の動き	年号	武道のあゆみ
明治時代	明治1	1868	明治維新	明治1	この頃、文明開化の中で伝統 武術は時代遅れとされる
	4～		廃藩置県、地租改正、学制 殖産興業、徴兵制、廃刀令	6	撃剣興行会、一時流行も禁止 される
	10	1877	西南戦争	10	警視庁の抜刀隊が活躍、伝統 武術見直しへ
	14		自由民権運動盛ん		警視庁で撃剣・柔術の稽古
	15～		松方財政（紙幣整理）	15	嘉納治五郎、講道館を設立
	16		言論統制強化、鹿鳴館	16	文部省、撃剣・柔術の学校教育 への採用の可否を諮問
	17		デフレ不況、秩父事件	17	体操伝習所、採用は否の答申
	22	1889	大日本帝国憲法公布	22	嘉納、柔道の教育的価値講演
	27～8	1894	日清戦争、ナショナリズム 高揚、戦後、産業革命進む	28	大日本武徳会、京都に設立、 剣術・柔術・弓術等の演武会
	32	1899	新渡戸『武士道』（英文）	32	武徳会の武徳殿完成
	37～8	1904	日露戦争に勝つ	38	武徳会、武術教員養成所開校
	43	1910	韓国併合	39	武徳会、柔術・剣術の形制定
大正時代	44	1911	関税自主権回復、条約改正 終了（中国、辛亥革命）	44	中学校で撃剣・柔術の指導可 となる。大日本体育協会設立
	大正1	1912	大正デモクラシー始まる	大正1	大日本帝国剣道形を制定
	4～8		第一次世界大戦 大戦景気で輸出急増	8	武道専門学校（柔道・剣道・弓道） に改称する
	10～		都市化進展、サラリーマン 層誕生、生活の洋風化	11	琉球唐手、本土に紹介される 嘉納「精力善用、自他共栄」
	12	1923	関東大震災		警視庁、武道対抗試合開始
	13		明治神宮競技大会開始	13	武徳会は競技会に不参加、
	14		普通選挙法・治安維持法	15	文部省「剣道・柔道」に改正
	昭和4	1929	世界恐慌始まる	昭和4	御大礼記念天覧武道大会（柔・ 剣道の高段者の全国大会）
	6		満州事変	6	中学校・師範学校で柔・剣道 が必修となる
	7		満州国建国、国際連盟調査		道場に神棚設置を義務化
昭和前期	7		5・15事件（犬養首相暗殺）	11	学校体育で、弓・薙刀も指導 可になる
	12	1937	日華事変 以後、日中戦争本格化	11	国民学校の体錬科で武道必修 武道のイデオロギー強化
	13		国家総動員法公布 国家統制強化、軍国主義化	16	武徳会、政府の外郭機関に改 組。武道の戦技化進む
	16	1941	アジア・太平洋戦争始まる	17	
	～20	1945	戦時体制、学徒出陣、疎開		

Ⅲ. 現代武道の展開 (年表その3)

時代	年号	西暦	日本社会の動き	年号	武道のあゆみ
戦後復興期	昭和20	1945	敗戦 占領軍 戦後改革 民主化、男女同権、農地改革、財閥解体、労働組合等	昭和20	武道禁止令 武道授業を中止 (以後各武道、スポーツ化して復活をめざす)
	21		日本国憲法公布	21	武徳殿・道場から神棚撤去 大日本武徳会に解散命令去
	22		教育基本法公布、新学制 東西冷戦激化、占領政策転換 (民主化より経済復興)	21	日本相撲連盟設立。空手道解禁に。
	24		大企業中心の経済再建策 中国に共産党政権成立	23	財団法人・合気会発足
	25~28	1950 ~53	朝鮮戦争 特需景気で日本経済復興	24	全日本柔道連盟、日本弓道連盟設立
	26	1951	サンフランシスコ平和条約 調印 (西側48カ国と講和)	25	全日本しない競技連盟設立。 学校柔道復活
	27		日本独立回復	26	学校弓道復活
	28		テレビ放送開始 奄美返還	27	全日本剣道連盟設立。 全柔連、世界柔道連盟に加盟
	29		自衛隊発足 (保安隊から改組)	28	学校剣道復活
	30		保守合同、自民党55年体制 以後28年間自民党政権	30	全日本薙刀連盟設立
	31		日ソ共同宣言、国際連合に 加盟、「もはや戦後ではない」	31	全日本銃剣道連盟設立。 居合道・杖道、全剣連が加入
	34		皇太子結婚式、IOC、東京 オリンピック大会を決定	32	全日本少林寺拳法連盟設立
				33	学習指導要領「格技」設定 (柔・剣・すもう、男子に)
高度経済成長期	35	1960	日米新安保反対闘争 (国会デモ) 政府、所得倍增計画発表 1960年代高度経済成長開始	34	学校なぎなた復活 (女子に)
	39	1964	東京オリンピック大会 東海道新幹線、東名高速道路 開通。大量消費時代に。 スポーツブーム (女性も)	36	IOC 柔道を五輪種目に決定
	40		日韓基本条約、ペ平連運動	37	日本武道館、財団法人認可
	43		明治100年、GNP 世界 2 位	39	日本武道館、北の丸に建設 柔道、3階級で金、無差別級銀 剣・弓・相撲、公開演武 全日本空手道連盟設立 武道、女性・少年にも広がる
	43~4		全国で大学紛争	42	高校で弓・なぎなた正科可。 東京教育大学に武道学科新設
	44	1969	東大安田講堂封鎖解除	43	日本武道学会設立。杖道形
				44	居合道形制定 (7本)

時代	年号	西暦	日本社会の動き	年号	武道のあゆみ
国際化期	昭和45	1970	大阪万国博覧会	45	国際剣道連盟、世界空手道連合設立
	46		ドル・ショック（変動制へ）		
	47		沖縄返還、日中国交回復	47	国際少林寺拳法連盟設立
	48	1973	円、変動相場制移行、円急騰	50	全剣連「剣道の理念」制定
			石油ショック（狂乱物価）	51	国際合気道連盟設立
	51		ロッキード事件、政界激震	52	日本武道協議会発足（10団体）
	54		第2石油危機 “Japan as No1”	53	古武道大会（翌年古武道協会）
	55～	1980	貿易黒字増で貿易摩擦激化	55	武道館、武道大学設立決議
	58～		「戦後政治の総決算」行革		居合道制定形3本追加
	60	1985	プラザ合意、大幅な円高に	59	国際武道大学開学
	61～		バブル経済（地価・株価高騰）	61	武道科学研究センター竣工
	62		国鉄JR 6社に分割民営化	62	『武道憲章』制定
平成・21世紀へ	昭和64		昭和天皇崩御、平成時代へ	63	女子柔道ソウル五輪公開競技
	平成1	1989	東西冷戦終結、ベルリンの壁崩壊、グローバル経済に	平成1	学習指導要領「格技」から「武道」へ改称
	2	1990	バブル崩壊不況、湾岸戦争	2	国際なぎなた連盟設立
	5		連立政権誕生。サッカーJリーグ。携帯電話急速普及、	4	国際相撲連盟設立
	7	1995	阪神・淡路大震災、サリン	5	世界空手道連盟に名称変更
	9		山一証券破綻（金融危機）、行政改革、規制緩和・撤廃	6	武道学会、武道人口減少問題
	9			9	IJF ブルー柔道着導入決定
	12	2000	社会の高齢化・少子化進む 介護保険制度発足	12	シドニー五輪、柔道決勝判定で全柔連、抗議
	13	2001	省庁再編、9・11同時多発テロ、構造改革、格差拡大	13	柔道ルネサンス運動
	15		イラク戦争始まる	15	国際武道シンポジウム開催
	17		愛・地球博覧会	17	EXPO 剣道フェスティバル
	18		教育基本法改正	18	国際弓道連盟設立
	20	2008	洞爺湖サミット（地球温暖化問題） 北京オリンピック大会	20	文部科学省、新学習指導要領 公示（武道必修化、4年後実施）
	21		政権交代、民主党政権に	21	日本武道館、“Budo”発行
	22	2010	尖閣問題起きる。APEC 首脳会議、横浜で開催	22	柔道第26回世界選手権大会、 東京で開催
	23		3・11大震災、福島原発事故	23	学校での柔道事故が問題に
	24	2012	自民党、政権復帰	24	中学校体育で武道必修化

(作成：魚住孝至)

武道憲章

武道は、日本古来の尚武の精神に由来し、長い歴史と社会の変遷を経て、術から道に発展した伝統文化である。

かつて武道は、心技一如の教えに則り、礼を修め、技を磨き、身体を鍛え、心胆を鍊る修業道・鍛錬法として洗練され発展してきた。このような武道の特性は今日に継承され、旺盛な活力と清新な気風の源泉として日本人の人格形成に少なからざる役割を果たしている。

いまや武道は、世界各国に普及し、国際的にも強い関心が寄せられている。我々は、単なる技術の修練や勝敗の結果にのみおぼれず、武道の真髄から逸脱することのないよう自省するとともに、このような日本の伝統文化を維持・発展させるよう努力しなければならない。

ここに、武道の新たな発展を期し、基本的な指針を掲げて武道憲章とする。

(目 的)

第1条 武道は、武技による心身の鍛錬を通じて人格を磨き、識見を高め、有為の人物を育成することを目的とする。

(稽 古)

第2条 稽古に当たっては、終始礼法を守り、基本を重視し、技術のみに偏せず、心技体を一体として修練する。

(試 合)

第3条 試合や形の演武に臨んでは、平素錬磨の武道精神を発揮し、最善を尽くすとともに、勝っておごらず負けて悔まず、常に節度ある態度を堅持する。

(道 場)

第4条 道場は、心身鍛錬の場であり、規律と礼儀作法を守り、静粛・清潔・安全を旨とし、厳粛な環境の維持に努める。

(指 導)

第5条 指導に当たっては、常に人格の陶冶に努め、術理の研究・心身の鍛錬に励み、勝敗や技術の巧拙にとらわれることなく、師表にふさわしい態度を堅持する。

(普 及)

第6条 普及に当たっては、伝統的な武道の特性を生かし、国際的視野に立つて指導の充実と研究の促進を図るとともに武道の発展に努める。

昭和62年4月23日制定 日本武道協議会

日本武道協議会

日本における武道を統括する団体として、昭和52年(1977)に加盟10団体で発足。「国内を統括する各武道連盟との連絡融和を図り、かつ柔道・剣道・弓道・相撲・空手道・合気道・少林寺拳法・なぎなた及び銃剣道を奨励して、その精神を高揚すると共に健全な国民の育成に努め、世界の平和と福祉に貢献する」ことを目的とし、武道振興大会開催、武道功労者及び武道優良団体表彰、日本武道代表団海外派遣などを行っている。詳しくは各連盟のホームページ参照のこと。

加盟団体	組織成立年	現在の公表登録有段者数*
● 全日本柔道連盟	昭和24年	20.3万人(登録)[講道館有段者は別]
● 全日本剣道連盟	27年	142.9万人
(居合道・杖道)	31年加入	居合道8万人、杖道1.9万人)
● 全日本弓道連盟	28年	13万人
● 日本相撲連盟	21年	7000人* (国内人口7.5万人*)
● 全日本空手道連盟	39年	30万人* (国内人口250万人*)
● 合気会	23年	18.2万人 (国内人口100万人*)
● 少林寺拳法連盟	32年	4万人* (会員14万人*)
● 全日本なぎなた連盟	30年	5500人 (国内人口6.5万人*)
● 全日本銃剣道連盟	31年	4.8万人 (国内人口40万人*)
● 日本武道館	39年	

※日本武道館編『日本の武道』(2007)に拠る。*は概数のみ公表。

日本武道学会

武道の学術的研究をする組織として昭和43年(1978)に設立。大学の研究者だけでなく、武道関係者が参加。学会誌『武道学研究』(通巻40巻年3号;ホームページ上で全目次閲覧可能)発行。毎年1回の研究大会では、シンポジウムその他、人文科学系、自然科学系、教育指導系に分かれて発表を行う。

東京・埼玉・山梨・東海・北陸・大阪の計6支部があり、また種目ごとに、柔道・剣道・弓道・相撲・空手道・なぎなたの計6専門分科会がある。現在会員数約900名。事務局は、日本武道館内に置く。

日本古武道協会

昭和54年（1979）に、「我が国固有の文化財として、古武道を保存、振興する」ことを目的として発足。毎年、日本古武道演武大会開催、術技向上演武会などを開催している。〔日本武道館は、古武道保存事業として昭和53年（1978）から63年（1988）まで計88流派の古武道演武の記録映画を制作し、そのビデオとDVDを販売・貸し出している。〕

現在の加盟流派は、以下の83流派である。

■柔 術

柳心介胃流柔術（北海道）
諸賞流和（岩手）
為我流派勝新流柔術（茨城）
気楽流柔術（群馬）
天神真楊流柔術（埼玉）
大東流合気柔術（東京）
神道揚心流柔術
天神真楊流柔術（東京）
大東流合気柔術 琢磨会（大阪）
渋川流柔術（大阪）
心月無想柳流柔術（兵庫）
本體楊心流柔術（兵庫）
高木流柔術・九鬼神流棒術（兵庫）
関口新心流柔術（和歌山）
竹内流柔術〈腰廻小具足〉（岡山）
竹内流柔術〈日下捕手開山〉（岡山）
起倒流柔術（京都）
澁川一流柔術（広島）
長谷川流和術（埼玉）

■剣 術

ト傳流剣術（青森）
溝口派一刀流剣術（福島）
北辰一刀流剣術（茨城）
鹿島新當流剣術（茨城）
甲源一刀流剣術（埼玉）
天真正伝香取神道流剣術（千葉）
立身流兵法（千葉）
鹿島神傳直心影流剣術（千葉）
小野派一刀流剣術（東京）
神道無念流剣術（東京）
鞍馬流剣術（東京）
天然理心流剣術（東京）
柳生新陰流兵法剣術（愛知）
心形刀流剣術（三重）
初實剣理方一流剣術（岡山）
タイ捨流剣術（熊本）
兵法二天一流剣術（福岡）
野田派二天一流剣術（熊本）
雲弘流剣術（熊本）
示現流兵法剣術（鹿児島）

■居合術・拔刀術

林崎夢想流居合術（山形）
無雙直傳英信流居合術（東京）
田宮流居合術（神奈川）
水 流居合剣法・正木流鎖鎌術（静岡）
伯耆流居合術（兵庫）
円心流居合据物（大阪）
貫心流居合術（島根）
初實剣理方一流甲冑拔刀術（岡山）
鐘捲流拔刀術（岡山）
関口流拔刀術（熊本）

■槍 術

尾張貫流槍術（愛知）
風流槍術（大阪）
宝蔵院流高田派槍術（奈良）
佐分利流槍術（広島）

■杖術・棒術

無比無敵流杖術（茨城）
神道夢想流杖術（福岡）
竹生島流棒術（長崎）

■薙 刀 術

戸田派武甲流薙刀術（東京）
天道流薙刀術（京都）
直心影流薙刀術（奈良）
楊心流薙刀術（広島）
肥後古流長刀（熊本）

■空手・琉球古武術

琉球古武術（東京）
和道流柔術拳法（東京）
糸洲流空手（神奈川）
琉球王家秘伝本部御殿手（大阪）
金硬流唐手沖縄古武術（沖縄）
沖縄剛柔流武術（沖縄）

■体 術

柳生心眼流甲冑兵法（岩手）
柳生心眼流體術（神奈川）

■砲 術

關流砲術（茨城）
森重流砲術（神奈川）
陽流砲術（福岡）

■その他武術

荒木流拳法（群馬）
荒木流軍用小具足（埼玉）
根岸流手裏剣術（東京）
小笠原流弓馬術（神奈川）
二刀神影流鎖鎌術（高知）
武田流合気之術（福岡）

■準会員

一刀正傳無刀流（長野）
伯耆流居合術（兵庫）
伯耆流居合術（熊本）

著者紹介

魚住孝至（うおずみ たかし） 国際武道大学教授

国際武道大学附属武道・スポーツ科学研究所長

1953年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了
博士（文学）

専門分野：日本思想、実存思想、身体文化

実存思想協会編集委員長

主な著書・論文：『宮本武蔵—日本人の道』（ぺりかん社）、『定本 五輪書』（新人物往来社）、『宮本武蔵—「兵法の道」を生きる』（岩波新書）、編著『諸家評定—戦国武士の「武士道」』（新人物往来社）、「弓の道—オイゲン・ヘリゲルと師阿波研造」（国際武道大学研究紀要第5号）、「芭蕉における詩と実存」（実存思想論集X『詩と実存』（理想社）。

田中 守（たなか まもる） 国際武道大学教授

1958年生まれ。筑波大学大学院修士課程体育研究科修了

専門分野：武道思想・武道史

剣道教士七段。全日本剣道連盟剣道社会体育指導員養成講習会講師、日本武道学会剣道専門分科会幹事。

主な著書・論文：『武道 過去・現在・未来』（日本武道館）、『武道文化の探求』（不昧堂）共著、『武道を知る』（不昧堂）共著、「剣道における競技と人間形成」（国際武道大学研究紀要第23号）。

Alexander BENNETT (アレキサンダー・ベネット)

1970 年ニュージーランド生まれ。カンタベリー大学、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了 博士(人間・環境学)。国際日本文化研究センター専任助手、帝京大学専任講師を歴任。現在、関西大学准教授、国際武道大学研究所客員研究員。

専門分野：武道社会学、比較文化論、スポーツ史

なぎなた・剣道世界選手権のニュージーランド・ナショナルチームメンバー(主将)。剣道錬士 7 段、居合道 5 段、なぎなた 5 段。国際なぎなた連盟理事、全日本剣道連盟参与

世界初の英語剣道専門誌 “Kendo World” 創立者・編集長

主な著書：『武士道のエトスとその歩み：武士道の社会学的考察』(思文閣出版)、“Naginata : The Definitive Guide” (KW Publications)、編著『日本の教育に武道を』(明治図書)、編著“Budo Perspectives” (国際日本文化研究センター & KW Publications)。

松尾牧則(まつお まきのり) 国際武道大学教授

1962 年生まれ。筑波大学大学院修士課程修了

専門分野：弓道史、弓道論、弓道指導法

第 29 回全日本学生弓道選手権大会(団体優勝)

明治神宮奉納全国弓道大会(個人優勝 2 回)

弓道錬士 6 段。日本武道学会理事、国際武道大学弓道部監督。

主な著書・論文：『弓道—その歴史と技法』(日本武道館)、『武道文化の探求』(不昧堂)共著、『近代武道の系譜』(杏林書院)共著、『もっとうまくなる！ 弓道』(ナツメ社)、『弓道虎の巻』(スキージャーナル社)共著、『日本の矢と矢羽根文様について—『矢羽文考』—』(国際武道大学研究紀要第 19 号)など。

柏崎克彦（かしわざき かつひこ） 国際武道大学教授

1951 年生まれ。東海大学体育学部卒業

専門分野：柔道指導論

1975 年、1978 ～ 1981 年全日本柔道体重別選手権 優勝

1981 年世界柔道選手権優勝 柔道 8 段

日本武道学会監事、全日本学生柔道連盟理事、全日本柔道連盟
国際委員、JOCオリンピック強化スタッフ、IJF エキスパートコーチ
主な著書：『寝技で勝つ柔道』（ベースボールマガジン社）、
“Fighting Judo,” (Pelham Books)、『柔道上達のプロセス』（永
岡書店）、“Attacking Judo,” (Ippon Books) 他。

Maja SORI DOVAL（マーヤ・ソリドワール）

1979 年ドイツ生まれ。ドレステンの高校在学中、京都府立南
陽高等学校に留学。2006 年デュセルドルフのハインリッヒ・
ハイネ大学日本文化学科卒業。在学中、琉球大学に交換留学。
2008 年国際武道大学大学院修了。修士（武道文化）。

2011 年早稲田大学大学院博士課程修了。博士（スポーツ科学）。
現在、明治大学研究推進員。津田塾大学非常勤講師。

研究分野：空手道および柔道の歴史と指導法

主な論文：「ドイツにおける柔道の受容と変容—指導法を中心
に」（博士論文）など。

空手道 3 段、空手道公認指導員（日本体育協会）。居合道 2 段、
柔道 2 段。

武道論集 I —— 武道の歴史とその精神（増補版）

2008年 7 月20日 印刷・発行

2010年12月25日 増補版印刷・発行

2013年 9 月10日 増補版増刷・発行

発行者 国際武道大学附属武道・スポーツ科学研究所

〒299-5295 千葉県勝浦市新宮841

電 話 0470-73-4111

ISBN-978-4-9980893-5-3

印刷 港北出版印刷株式会社